

県道丸亀詫間豊浜線（観音寺工区）及び県道多度津丸亀線（丸亀工区）
緊急地方道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

高屋条里遺跡 津森位遺跡

2009. 10
香川県教育委員会

序文

本書は、県道工事に伴い発掘調査を実施した香川県觀音寺市高屋町の高屋条里遺跡と、香川県丸亀市津森町の津森位遺跡の報告を収めたものです。

まず、高屋条里遺跡からは、7世紀後半期の堅穴住居跡や、掘立柱建物跡が見つかりました。これらの主軸は、条里型地割の方向とは異なり、磁北に方向を合わせるものでした。また、珪藻分析により縄文海進時には海が浸入していたこともわかりました。

次に、津森位遺跡からは、古代と中世の集落跡が見つかりました。香川県の最終段階に所属する堅穴住居跡が1棟見つかったほか、多数の掘立柱建物跡が見つかりました。また、中世の集落跡は、小型の建物跡が多い特徴がわかりました。

本報告書が、香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げますとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成21年10月

香川県埋蔵文化財センター

所長 大山 真充

例言

1. 本報告書は、県道丸亀詫間豊浜線（観音寺工区）緊急地方道路整備工事に伴い発掘調査を実施した、香川県観音寺市高屋町に所在する高屋条里遺跡（たかやじょうりいせき）の報告と、県道多度津丸亀線（丸亀工区）緊急地方道路整備工事に伴い発掘調査を実施した丸亀市津森町に所在する津森位遺跡（つのもりくらいいせき）を収録した。

2. 発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが調査担当として実施した。

3. 発掘調査は、下記の期間で実施した。

高屋条里遺跡

期間：平成18年12月1日～平成19年3月31日

担当：文化財専門員 木下晴一、福家正人、調査技術員 藤井菜穂子

津森位遺跡

期間：平成18年4月1日～8月31日

担当：文化財専門員 木下晴一、福家正人、調査技術員 八木國裕

4. 調査に当って、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

香川県西讃土木事務所、中讃土木事務所、地元自治会、地元水利組合

5. 報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆は木下晴一が担当した。

6. 報告書で用いる座標系は国土地標第IV系（世界測地系）で、方位の北は国土地標第IV系による。また、標高は東京湾平均海水面を基準とした。

7. 遺構は下記の略号により表示した。

S H 積穴住居跡 S B 掘立柱建物跡 S P 柱穴跡 S K 土坑

S D 溝状遺構 S X その他の遺構 S R 自然河川跡

8. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位m）を示した。

9. 遺物観察表は、以下の基準で作成した。

残存率は、遺物の図化部分に占める実物の割合を示しており、完形品に対するそれではない。

色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準上色帖 2001年版』を参照した。

胎土中の砂粒の「粗」は径4mm以上、「中」は0.5mm以上、「細」は0.5mm未満を基準とした。

* 地図は国土地理院地形図を使用しました。

本文目次

高屋条里遺跡

第1章 調査に至る経緯と経過 ······	1
第1節 調査に至る経緯 ······	1
第2節 調査の経過 ······	1
第3節 調査体制・整理体制 ······	4
第2章 遺跡の立地と環境 ······	5
第1節 地理的環境 ······	5
第2節 歴史的環境 ······	5
第3章 調査の成果 ······	8
第1節 調査区の概要と層序 ······	8
第2節 南区の遺構・遺物 ······	8
第3節 北区の遺物 ······	21
第4章 自然科学的分析 ······	25
砂層中の珪藻化石 ······	25
第5章 まとめ ······	28

津森位遺跡

第1章 調査に至る経緯と経過	31
第1節 調査に至る経緯	31
第2節 調査の経過	34
第3節 調査体制・整理体制	34
第2章 遺跡の立地と環境	37
第1節 地理的環境	37
第2節 歴史的環境	39
第3章 調査の成果	43
第1節 調査区の概要と層序	43
第2節 I区の調査成果	47
第3節 II区の調査成果	66
第4節 III区の調査成果	70
第4章 まとめ	94

挿図目次

高屋条里遺跡

第1図 遺跡位置図（1）	1	第20図 I区SB12・13平・断面図、出土遺物実測図	54
第2図 遺跡位置図（2）	2	第21図 I区SB14平・断面図、出土遺物実測図	55
第3図 遺跡位置図（3）	3	第22図 I区SB15・16、I区SA02平・断面図、出土遺物実測図	56
第4図 等高線図	6	第23図 I区その他のSP出土遺物実測図	57
第5図 周辺の主な遺跡	6	第24図 I区SK02・03平・断面図、出土遺物実測図	58
第6図 高屋条里遺跡付近空中写真	7	第25図 I区SX01平・断面図、出土遺物実測図	58
第7図 漢柾区剖面図	9	第26図 I区SX02平・断面図、出土遺物実測図	59
第8図 南区 東堀断面図	10	第27図 I区SX03平・断面図、出土遺物実測図	60
第9図 南区 西堀断面図	11	第28図 I区SX03出土遺物実測図	61
第10図 北区 断面図	12	第29図 I区SD01断面図、出土遺物実測図	62
第11図 南区 構造配置図	13	第30図 I区SD08・09断面図、出土遺物実測図	63
第12図 SD01断面図、出土遺物実測図	15	第31図 I区SD03・05・11断面図、出土遺物実測図	64
第13図 SH01平・断面図、出土遺物実測図	15	第32図 I区SD12～14断面図	64
第14図 SB01平・断面図	16	その他の出土遺物実測図	65
第15図 SB02平・断面図	17	I区SB01、SA01・02、SD01平・断面図、出土遺物実測図	66
第16図 SD03出土物出土状況図・断面図	18	その他のI区SP出土遺物実測図	67
第17図 SD03出土遺物実測図	19	I区SD02～04出土遺物実測図	68
第18図 ST01平・断面図	19	I区炭化遺構・遺物実測図	69
第19図 ST01出土遺物実測図	19	機械掘削出土遺物実測図	69
第20図 SX01断面図、墓地層出土物実測図	20	III区SB復原図	71
第21図 南区（包含層）出土物実測図	21	III区SB・平・断面図（1）	73
第22図 SB03・04平・断面図	22	III区SB・平・断面図（2）	74
第23図 SB03等出土遺物実測図	23	III区SB・平・断面図（3）	75
第24図 SK01・02断面図	23	III区SB出土遺物実測図	76
第25図 南区、その他の出土遺物実測図	23	III区SP841遺物出土状況・平・断面図	77
第26図 北区 出土遺物実測図	24	III区SP841出土遺物実測図	77
第27図 堆積物中の建築化石の顕微鏡写真	27	その他のIII区SP出土遺物実測図（1）	78
		その他のIII区SP出土遺物実測図（2）	79
		III区SK02平・断面図、出土遺物実測図	79
		III区SK01・03～05平・断面図、出土遺物実測図	80
		III区SK06～08平・断面図、出土遺物実測図	80
		III区SK09平・断面図、出土遺物実測図	81
		III区SK10～15平・断面図、出土遺物実測図	82
		III区SK16平・断面図、出土遺物実測図	82
		III区SK01平・断面図	83
		III区SK02出土遺物実測図	83
		III区SK04平・断面図、出土遺物実測図	84
		III区SK05平・断面図、出土遺物実測図	85
		III区SK06平・断面図、出土遺物実測図	85
		III区SK07～10平・断面図、出土遺物実測図	87
		III区SK01～04平・断面図、出土遺物実測図	87
		III区SR01断面図	87
		III区SR01出土遺物実測図	88
		III区SR02断面図	89
		III区SR02出土遺物実測図（1）	90
		III区SR02出土遺物実測図（2）	91
		III区SR02山上遺物実測図（3）	92
		その他のIV区出土遺物実測図	93
		I区9・10世紀の柱立柱建物の変遷	94
		道路付近の条理型地割	96
		時刻別・堆積図	97

図版目次

高屋条里遺跡

津森位遺跡

図版 1

空中写真 1974年撮影 國土數値情報(國土交通省)

図版 2

南地区 堆積状況(東から)

南地区 掘削状況(南から)

図版 3

南地区 SH01 掘削状況(北から)

南地区 SH01 断面(北から)

図版 4

南地区 SB01 ほか掘削状況(南から)

南地区 SB02 検出状況(東から)

図版 5

南地区 SB02 ほか掘削状況(西から)

南地区 ST01 掘削状況(東南から)

図版 6

南地区 SD03 遺物出土状況(西から)

南地区 SE03 掘削状況(東南から)

図版 7

北地区 掘削状況(東南から)

北地区 堆積状況(東から)

図版 8

遺物

図版 9

空中写真 國土地理院 1962年撮影(SI-62-4 C9A-6(部分))

図版 10

空中写真 米軍 1948年1月撮影(M796 56部分 上が北)

図版 11

調査区 速景(Ⅱ区から東を見る)

Ⅰ区(Ⅰ-①区) 完掘状況(東から)

Ⅰ区(Ⅰ-③区) 完掘状況(東から)

Ⅰ区(Ⅰ-②区) 完掘状況(東から)

図版 12

Ⅰ区 SH01 完掘状況(南から)

Ⅰ区 SH01 遺物出土状況(東から)

Ⅰ区 SH01 遺物出土状況(西南から)

Ⅰ区 SB01 検出状況(西から)

図版 13

Ⅰ区 SB01 SP01(南西から)

Ⅰ区 SB02 SP17(南から)

Ⅰ区 SB04 SP269(南から)

Ⅰ区 SBとⅠ区 SX03の切り合い(南から)

Ⅰ区 SB02 完掘状況(東から)

図版 14

上 Ⅰ区(Ⅰ-③区) 完掘状況(西から)

左上 Ⅰ区 SD05・06 完掘状況(東南から)

左 Ⅰ区 SD07等 完掘状況(南から)

下 Ⅰ区 SB04 完掘状況(南から)

図版 15

左上 Ⅰ区 SK02 断面(北から)

上 Ⅰ区 SD08・09 掘削状況(南から)

左 Ⅰ区 SD03・04 掘削状況(東から)

下 Ⅰ区 SX03 掘削状況(南東から)

図版 16

Ⅱ区(Ⅱ-①区) 掘削状況(西から)

Ⅱ区(Ⅱ-②区) 掘削状況(南から)

Ⅱ区 SB01 検出状況(南から)

Ⅱ区 SB01 完掘状況(南から)

Ⅱ区 SD02 断面(北から)

Ⅱ区 SD04 断面(南から)

Ⅱ区 SD03 堤状造構①(北から)

Ⅱ区 SD03 堤状造構②(北から)

図版 17

Ⅲ区(Ⅲ-①, ②区) 完掘状況(東から)

Ⅲ区(Ⅲ-③区) 完掘状況(東から)

Ⅲ区(Ⅲ-④区) 完掘状況(東から)

Ⅲ区(Ⅲ-⑤区) 完掘状況(東から)

図版 18

Ⅲ区 SD01等 掘削状況(北から)

Ⅲ区 SP811 掘削状況(北から)

Ⅲ区 SP46 遺物検出状況(北から)

Ⅲ区 SK06・07 掘削状況(西北から)

Ⅲ区 SK09 掘削状況(東から)

Ⅲ区 SK16 断面(西から)

Ⅲ区 SX08 断面(西から)

Ⅲ区 SR01 掘削状況(南から)

図版 19～23

遺物

表 目 次

高屋条里遺跡

第1表 堆積物中の珪藻化石算出表 ······	26	第1表 進捗表 ······	35
第2表 高屋条里遺跡出土土器観察表 ······	29	第2表 SB 観察表 ······	75
第3表 高屋条里遺跡出土石器観察表 ······	30	第3表 津森位遺跡出土土器観察表 ······	99
		第4表 津森位遺跡出土石器観察表 ······	115
		第5表 津森位遺跡出土瓦観察表 ······	115

津森位遺跡

県道丸亀詫間豊浜線（観音寺工区）緊急地方道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

高屋条里遺跡

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

香川県の平野部には条里型地割が広範に遺存している。しかし、条里坪付については小字の範囲が広い等の理由から復原が困難な地域が多い。今回発掘調査を実施した高屋条里遺跡の所在する高屋町では、明治20年代に作成された地籍図（地押調査更正地図）の小字の範囲が、2～4町と狭く、また、「二ノ坪」、「三ノ坪」など、条里坪付に係る数箇地名が遺存することから、香川県において条里坪付が復原できる貴重な地域である。

この地域を縱断するように県道丸亀詫間牟浜線（観音寺工区）の道路整備（バイパス）が計画されたため、香川県教育委員会は平成17年9月から10月に、延べ3日間の試掘調査を実施した。調査の結果、調査対象地の北部で弥生時代後期の土器を包含する旧河道跡が、南部で弥生時代から古代と推定される柱穴跡や溝状構造が検出された。このため、第3図に示す1.834mについて、高屋条里遺跡として文化財保護法に基づく保護措置が必要と判断された。

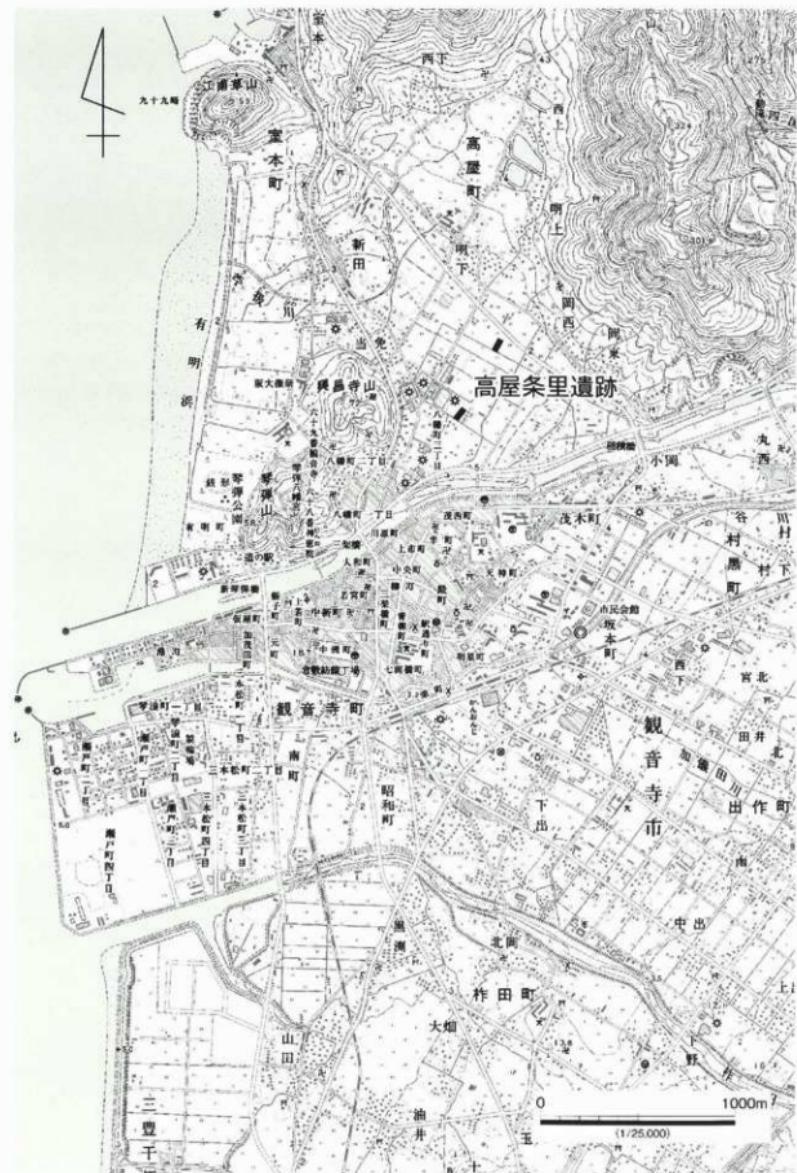
第2節 調査の経過

発掘調査は、平成18年12月1日から平成19年3月29日の期間で実施した。調査は順調に進み、平成19年3月10日には地元住民を対象とする地元説明会を実施し、73名の参加を得た。

整理作業は、平成20年11月1日から12月26日までの2ヶ月間で行った。出土遺物量は、28袋入りコンテナ6箱である。



第1図 遺跡位置図（1）



第2図 遺跡位置図（2）（国土地理院1/25,000地形図「般音寺」を使用）



第3図 遺跡位置図(3) (鎌倉市都市計画図を用い)

第3節 調査体制・整理体制

発掘調査の体制は、以下のとおりである。

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括

課長 三谷 雄治

課長補佐 中村 権伸

総務・振興グループ

副主幹 河内 一裕

主事 脇 悠介

文化財グループ

課長補佐 藤好 史郎

主任 山下 平重

文化財専門員 信里 芳紀

香川県埋蔵文化財センター

総括

所長 渡部 明夫

次長 植原 正人

総務課

課長 野口 孝一

主任 鳩田 和司

主任 田中 千晶

調査課

課長 廣瀬 常雄

文化財専門員 木下 晴一

文化財専門員 福家 正人

嘱託（土木） 高嶋 勝英

嘱託（調査技術員）藤井 菜穂子

発掘作業に携わった方は、以下のとおりである。

調査補助員 井上 加奈子

発掘作業員 磯野 良照 井上 邦昭 小川 浩司 岡崎 文 岡田 忠幸 香川 康一

香川 貞美 黒川 真光 鈴木 正博 茶本 憲一 並川 政隆 林 悠香

平井 加寿美 藤村 治義 三谷 愛子 森安 悅美

整理作業の体制は、以下のとおりである。

平成20年度

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

香川県埋蔵文化財センター

課長 春山 浩康

総括 所長 大山 真充

総括・生涯学習推進グループ

次長 廣瀬 常雄

課長補佐 武井 審紀

総務課 課長 廣瀬 常雄（兼務）

副主幹 香西 としみ

主任 宮田 久美子

主任 林 照代

主任 鳩田 和司

文化財グループ

主任 古市 和子

主幹（兼）課長補佐 藤好 史郎

資料普及課 課長 西岡 達哉

主任文化財専門員 森 格也

文化財専門員 木下 晴一

文化財専門員 乗松 真也

整理作業に携わった方は、以下のとおりである。

嘱託整理作業員 山地 真理子 市川 孝子 加藤 恵子 柴垣 智美 朝田 加奈子

廣瀬 杏子

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

高屋条里遺跡の地理的環境について、第4、6図を用いて概観する。

高屋条里遺跡は、観音寺市街地の北、財田川右岸に位置する。ここは、標高2~3mの平坦面が広がっている。北側は七宝山塊に接する扇状地性の斜面、西側は南北に延びる砂堆に囲まれている。遺跡付近は整然とした条里型地割が見られるが、財田川に沿う所は地割が乱れている。ここは財田川の形成した自然堤防であることから、遺跡付近の平坦面は、周囲を微高地で囲まれた後背湿地に当ることがわかる。

第2節 歴史的環境

高屋条里遺跡周辺には周知の遺跡は多くない。しかし、著名なものが多い。

遺跡の西北約600mの所になつめの木の貝塚が所在する。七宝山塊麓の扇状地性斜面の先端に当る。昭和34年に行われた2mの調査で貝層が検出された。アサリ、ハマグリ等の二枚貝が多数を占め、ツメタガイ等の貝貝が混じっていた。また、貝層には獸骨、魚骨の他、弥生土器片と考えられる土器細片、石器が出土している。昭和55年には、約30m南で行われた農業施設改修工事の際に遺物包含層が見つかり、縄文時代前期の土器片、石鉈、石錘、スクレイパー等の石器が採集されている。また、平成4年の調査では縄文時代後期前半の土器が出土している。

なつめの木の貝塚は、遺跡の内容から海進の様相を推定することができる。『観音寺市誌（通史編）』では、江南草山南麓から鹿隈鍬子塚古墳の直下にかけてを縄文海進時の海岸線と推定しているが、高屋条里遺跡の所在する後背湿地部分に内湾状に海が入り込んでいたと考えられる。

江南草山の南麓には、室本遺跡が所在する。この付近には、凝蘿に沿って3列の砂丘が形成されており（現在確認することはできない）、中間の砂丘の北端部において採土工事（昭和30年ころ）の際に多量の土器が出土した。出土土器は、縄文時代晩期と弥生時代前期のものである。弥生時代前期の土器は、古朴のもので完形のものが含まれる。一部は香川県指定有形文化財である。

七宝山塊の南麓に沿って流れる財田川が、山塊から離れる地点の尾根上に鹿隈鍬子塚古墳が所在する。径27.6m、高さ3.5mの円墳に復原され、2つの埋葬主体があった。第一主体は未調査のまま破壊されたが、第二主体は小規模な竪穴式石室で、成人女性の頭骨とヤリガソナ1点が検出されている。この他に破壊の過程で銅鏡、玉類、鉄器等が採集されており、古墳時代前期のものと考えられている。また、本古墳の周辺では20基以上の箱式石棺が分布していたとされている。

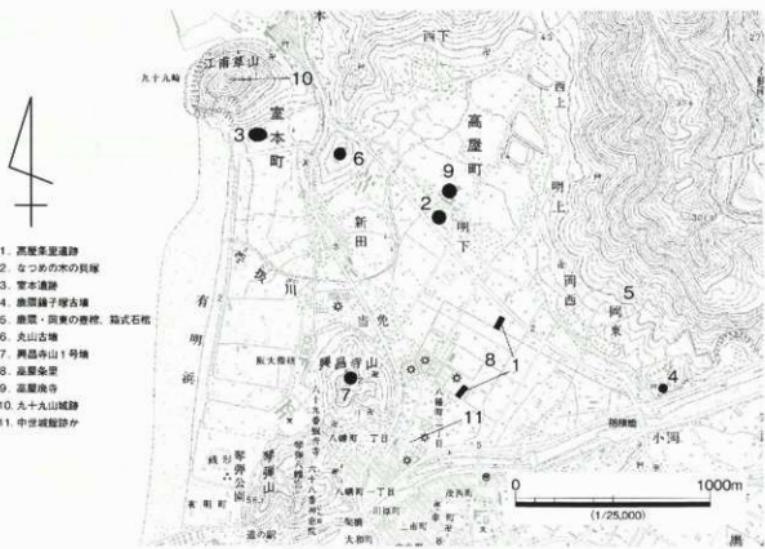
丸山古墳は、桶積山から南に延びる尾根の先端の丸山神社境内に所在する径約35mの円墳である。葺石、円筒埴輪、形象埴輪の出土が確認されている。横穴式石室の可能性が指摘される石室に阿蘇溶結凝灰岩製の舟形石棺が据えられている。

高屋条里遺跡の西にある興昌寺山の山頂に興昌寺山古墳1号墳が所在する。全長約7.8mの両袖式の横穴式石室をもつ。石室には線刻が見られ、築造当初のものが含まれると推定されている。

高屋条里遺跡は、整然とした条里地割と、県内では条里坪付が復原できる希少な場所であることから著名であった。第6図に示すように、この付近の小字の範囲は2~4町の広さを基準にしており、「二ノ坪」、「三ノ坪」、「四ノ坪」、「七ノ坪」、「八ノ坪」といった数詞地名が遺存している。これから、千鳥



第4図 等高線図

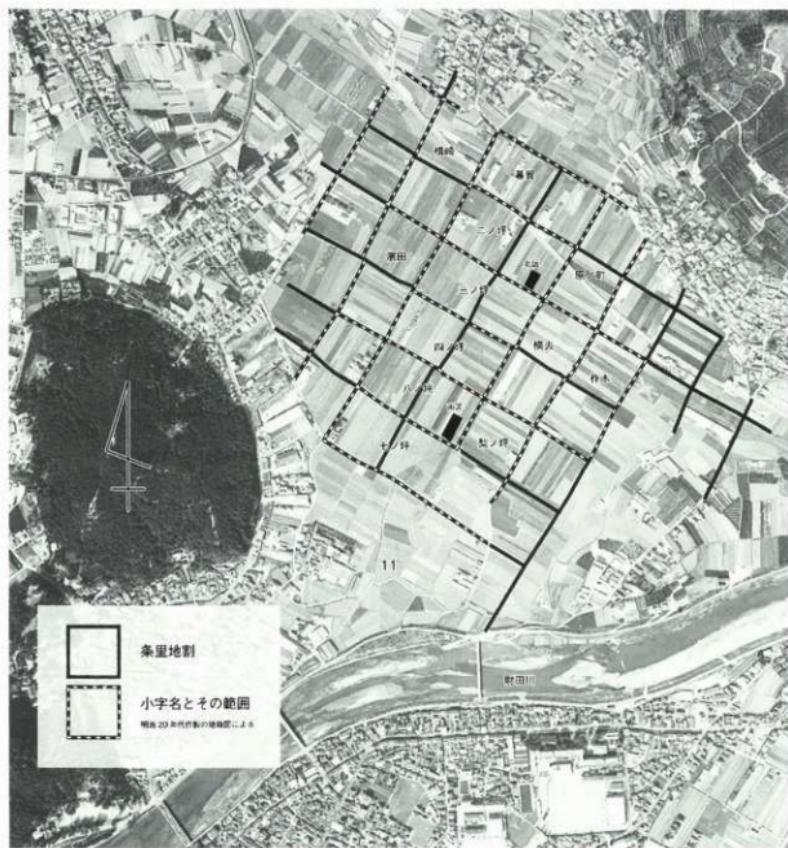


第5図 周辺の主な遺跡

式の坪並が復原できる。なお、何条何里であるのかは不明である。

なつめの木の貝塚の北には高屋庵寺が所在する。四重弧文軒平瓦などの出土が採集されているが、詳細は不明である。

江南草山には九十九山城跡という中世山城が存在する。山頂の平坦面から東斜面に帶郭が連続している。また、第5、6図で11としているところは、周知の遺跡ではないが、獨立した細長い地割が一辺約100 m の方形に一周しているのが確認される。確定できていないが、中世平地域館の可能性が考えられる。



第6図 高屋条里遺跡付近空中写真（1974年 国土数値情報）

第3章 調査の成果

第1節 調査区の概要と層序

調査区は、第7図に示すとおり南北2ヶ所の調査区からなる。両者は直線距離で約270m離れている。調査は、掘削土の置き場や本体工事との調整の結果、それぞれ2分割して行った。調査区名称は、北E区、北W区、南N区、南S区と呼称し、北E区・南S区・北W区・南N区の順序で行った。本報告においては、北区、南区と一括して報告する。

北区では弥生時代後期の土器を含む包含層が検出され、南区では7世紀後半期と推定される堅穴住居跡1、掘立柱建物跡2、墓もしくは祭祀土坑、溝状遺構と中世の掘立柱建物跡2等が検出された。

第8、9図は、南区の調査区西壁と東壁の土層断面図である。

南区は南側に微高地があり、北側に向かって標高を減じている状況である。微高地を構成する堆積物は、約2cmのくさり礫が混じる砂層で、局所的に礫の含有量が多くなる所がある。南を流れる財田川が形成した自然堤防堆積物と推定される。微高地では、地下水位が高く豊富であり、一晩で調査区が水没するほどであった。このため、試掘調査の際に掘られたトレーナーを掘り下げて、排水ポンプを終日稼動させることで対応した。しかし、遺構掘削時に、一定の深さを越えると地下水が滲みだし、一度滲みだすと上色や土性の違いが分からなくなる状態となった。

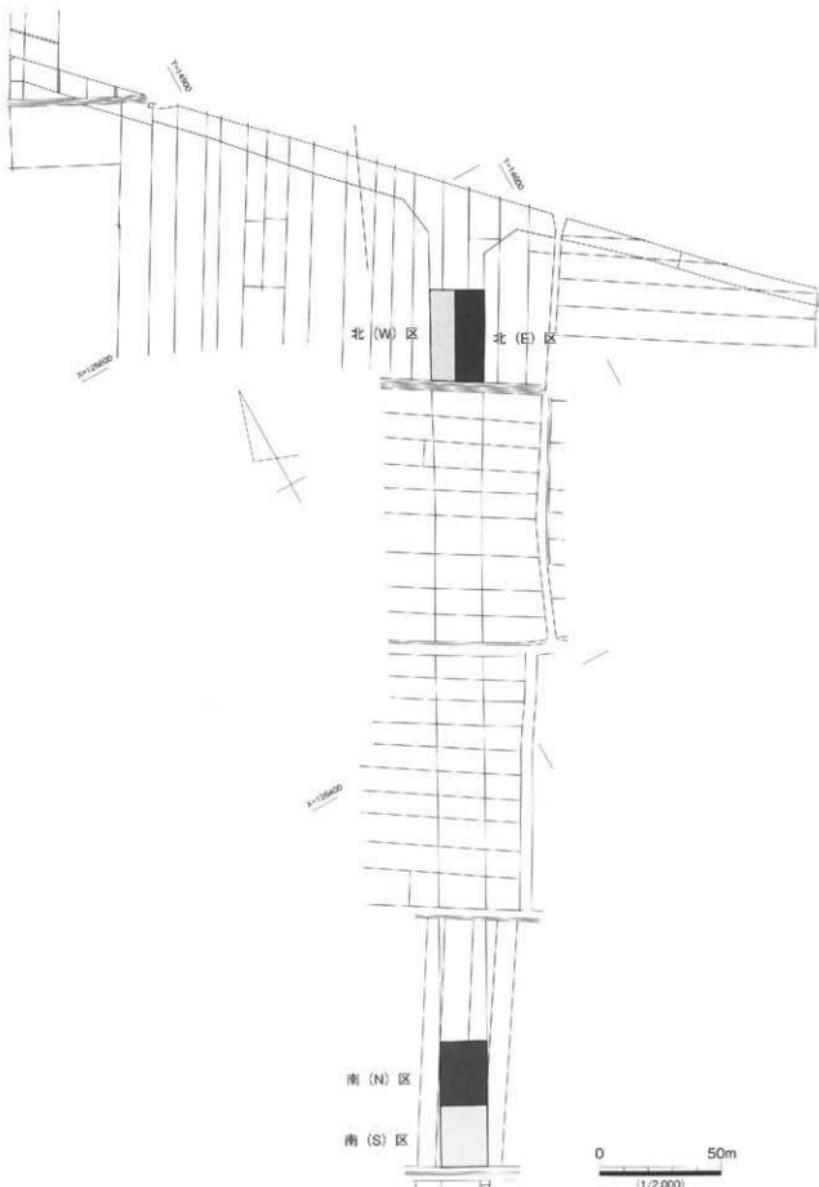
南区は、地表の水田耕土層、床土と考えられる第2層の直下、第3層の上面で中世の遺構を検出した。さらに、約25cm下の第6層（地山）上面で古代の遺構を検出した。なお、第6層上面の凹凸を埋めるように第5層が堆積するが、第5層は整地層と考えられ、本来は第5層上面が古代の遺構面である。第7、8層は、第6層が標高を減じた上に堆積した層である。この付近では遺構は検出されず、遺物の包含も極めて少ない状況である。

第10図は、北区の土層断面図である。ここでは、北E区の東壁と西壁の断面図を掲載する。

北区は、造成土・水田耕土の下に砂粒を含む粘質土層が厚く堆積している。第4層に分類した層は、鉄分の沈着状況や土質の微妙な違いから5、6層に細分することが可能であるが、畔畠等土地利用の状況を窺えるものは見出せなかった。第6、7層には弥生時代後期の土器片が包含されている。上器は細片が多く、摩滅している。第8層が地山と考えるオリーブ灰色の砂層である。細砂を主とするが、粗砂の他、様々な粒径のラミナが含まれる。第7層との境は凹凸が見られるが、理由は明確でない。なお、第8層の砂層について、珪藻分析を実施したところ、珪藻化石数は少なかったものの、完形殻からなる汽水種が特徴的に検出されたことから、汽水環境で堆積した砂層であることが推定されている（第5章）。堆積年代は、弥生時代後期以前としかわからないが、汽水環境にあったことを示すデータである。

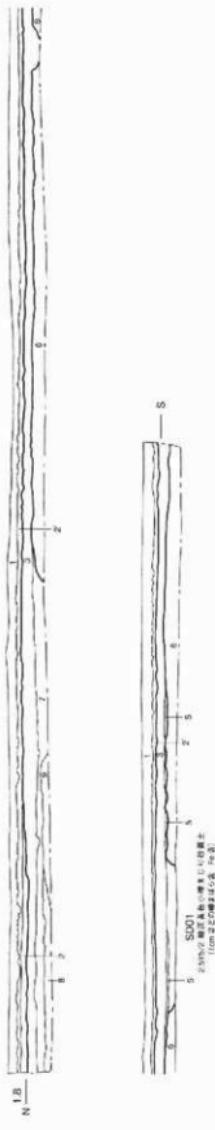
第2節 南区の遺構・遺物

南区の南部は、微高地が検出され、7世紀後半期と推定される堅穴住居跡1、掘立柱建物跡2、墓もしくは祭祀土坑、溝状遺構と中世の掘立柱建物跡2等が検出された。古代の遺構は、真北方向から約10度西偏する方向に揃えて、建物跡・溝状遺構が規格的に配置され、墓もしくは祭祀土坑も、建物の対角線の延長上に位置している。これらは、現地表に見られる条里型地割の方向とは合致していない。一方、中世の掘立柱建物跡2棟は、条里型地割の方向に合致したものである。

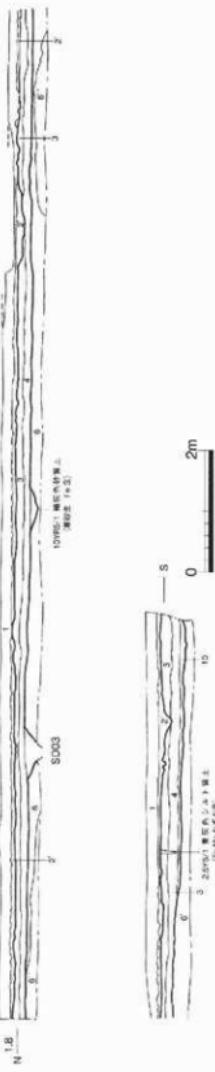


第 7 図 調査区割図

南区 断面

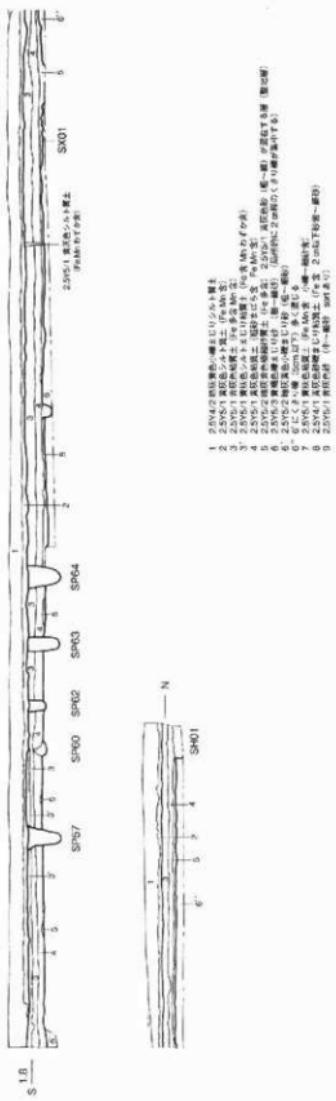


北区 断面

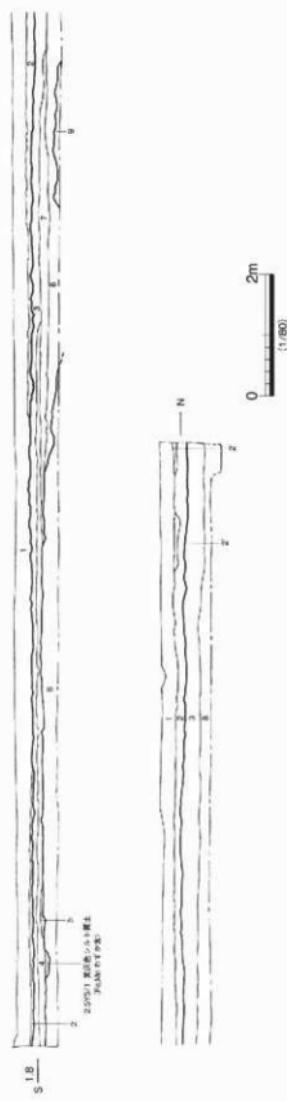


第8図 南区 東壁断面図

卷S区 三



卷之四



第9圖 南区 西驛断面圖

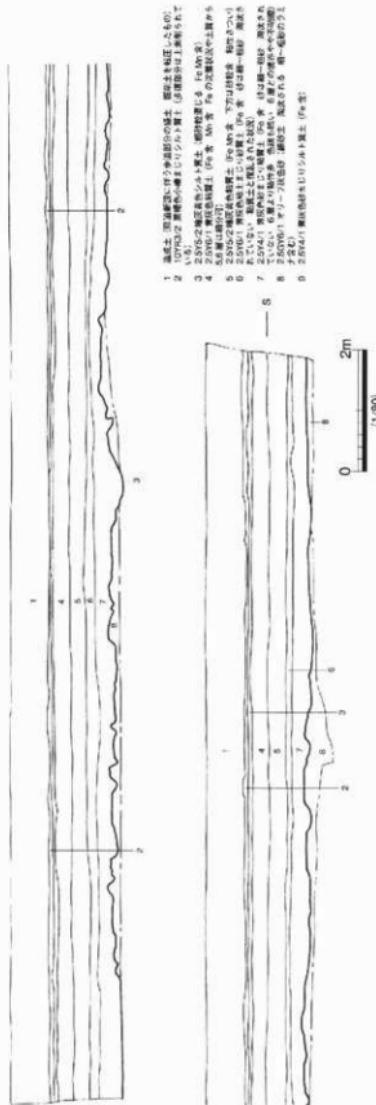
北区 西面



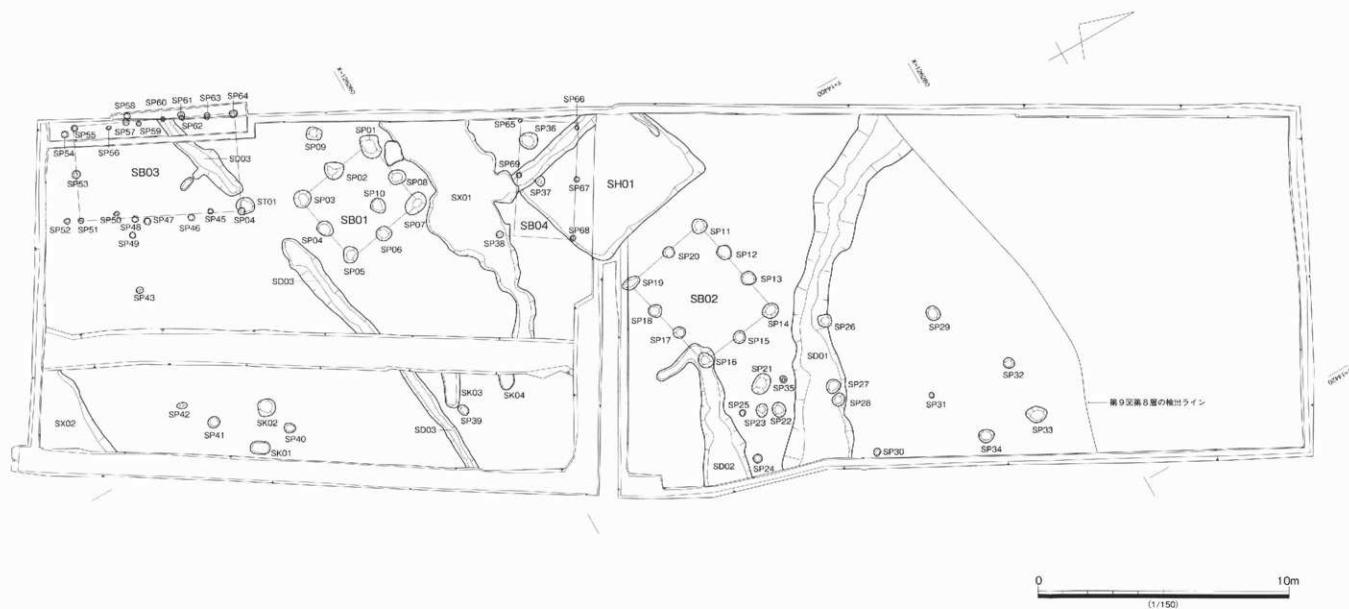
北区 東面



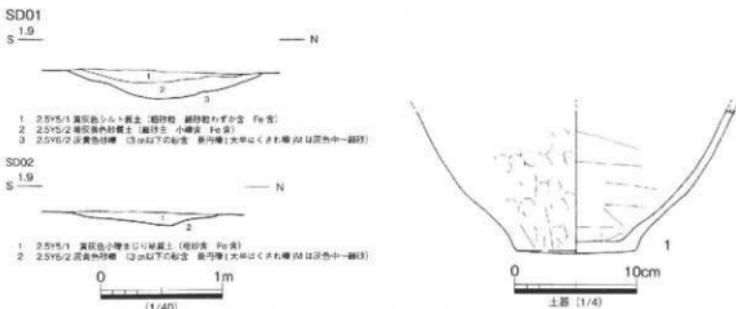
北区 東面



第10図 北区 墓断面図



第11図 南区 遺構配置図



第12図 SD01 断面図、出土遺物実測図

SD 01

調査区を東南から西北方向に横断する溝状造構である。幅1.1~2m、深さ25cmの規模である。出土遺物は極めて少なく、第12図1の他数点の上器細片が出土したのみである。1は、弥生時代前期の壺底部と考えられる。底部を上にした状態で出土した。剥落しており調整は不明である。この1点でSD 01の年代を決めることには躊躇を覚えるが、後述する古代の整地層が上面を覆っており、古代よりは古い造構である。

SD 02も遺物は出土せず年代不明であるが、SD 01と同一時期のものと考えられる。

SH 01

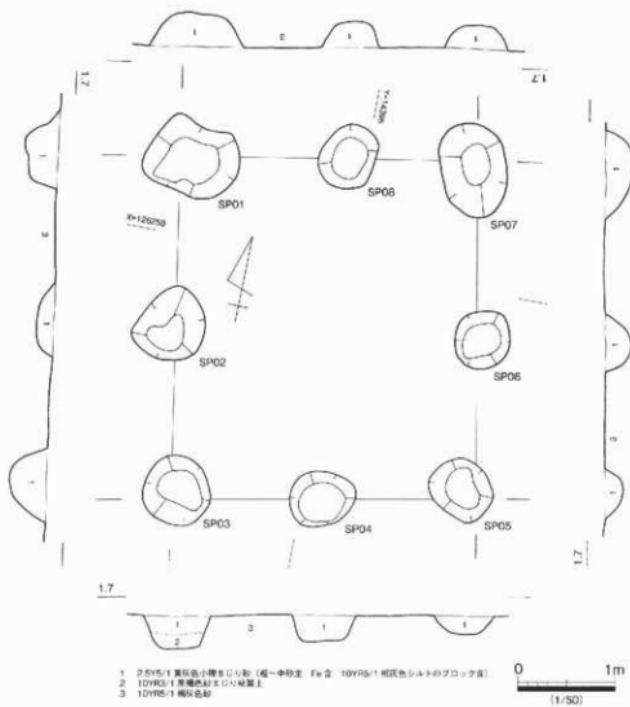
南S区と南N区にまたがって検出された竪穴住居跡の可能性が高い長方形(5.8×4.9m)の落ち込みである。先に調査を行った南S区においては、輪郭を検出することができず、壁溝部分のみを溝状造構と誤認してしまった。断面図に明らかのように、外周に沿って内側に粘土を盛り上げる状況が確認でき、壁溝を巡らしていたようであるが、平面的に検出することができなかつた。また、柱穴跡の有無も湧水のため判断することができなかつた。

出土遺物は僅少で、土師器や須恵器の細片が数点出土したのみである。第13図2は、土師器杯の口縁部の破片で、口縁端部は丸く収めている。

SH 01は、SB 01、SB 02、SD 03と方向を合わせて、規格的に配置されていることから、7世紀後半期のものと考えられる。



第13図 SH01 平・断面図、出土遺物実測図



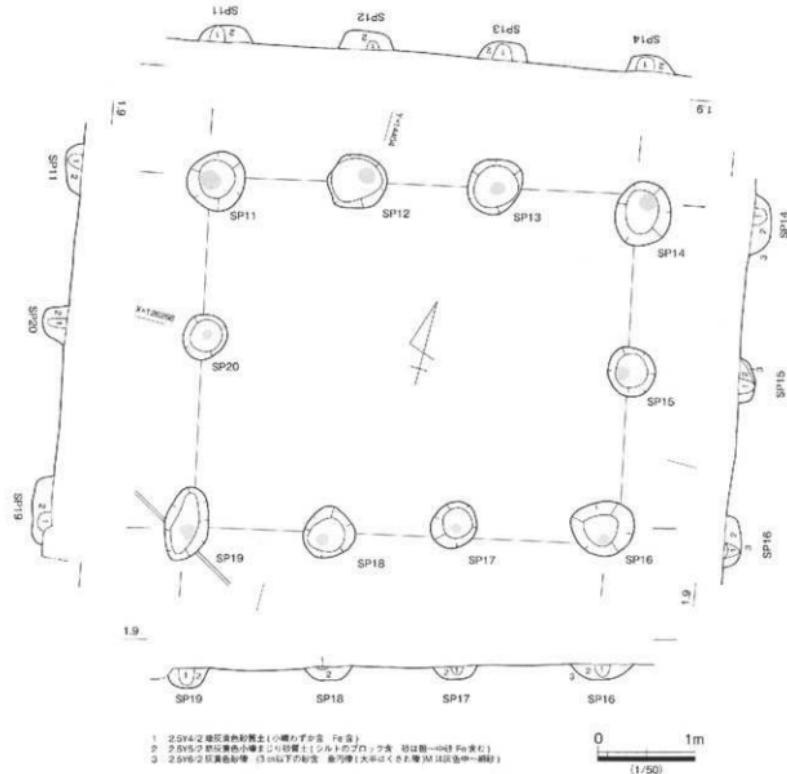
第14図 SB01 平・断面図

S B 01

南区で検出した2間×2間(3.1×3.5m)の掘立柱建物跡である。桁行は、国土座標北より西に約10度振った方向である。径約60cmの不整円形の柱穴跡からなる。柱柵は検出できなかった。出土遺物には土師器あるいは弥生土器片、須恵器片があるが、固化不能である。後述のS D 03等の方向を合わせていることから、7世紀後半頃のものと考えられる。

S B 02

南区で検出した2間×3間(3.5×4.3m)の掘立柱建物跡である。桁行は、国土座標北より西に12度振った方向である。大半が径45~60cmの円形の柱穴跡からなる。各柱穴跡に柱痕が認められた。S P 17から土師質の細片が出土した以外は遺物は出土しなかったが、S D 03と方向を合わせる等、規格性が見られることから7世紀後半頃のものと考えられる。なお、S B 02の東、東北に散在する柱穴跡も、埋上の共通性から同時期のものと考えられる。

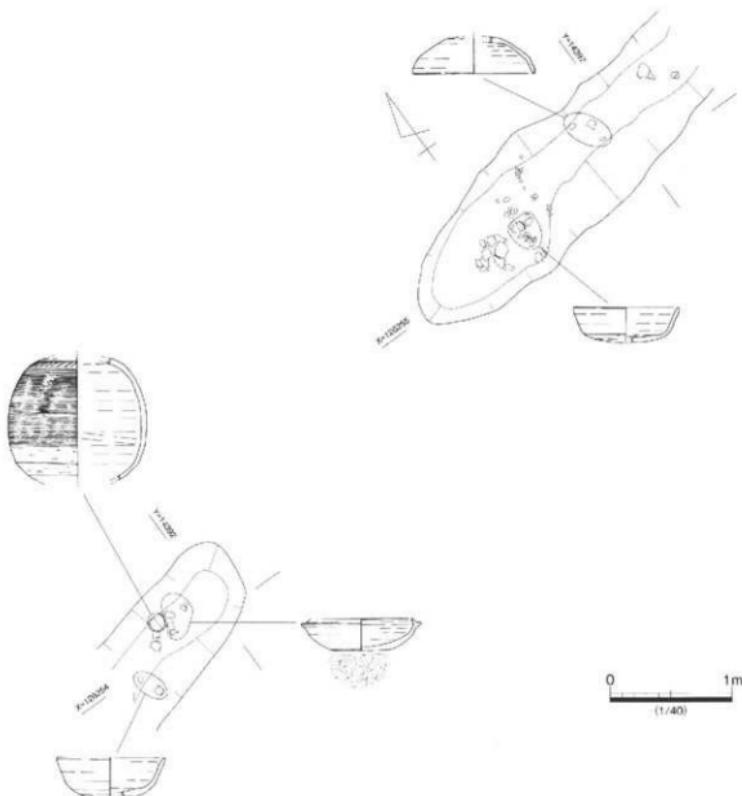


第15図 SB02平・断面図

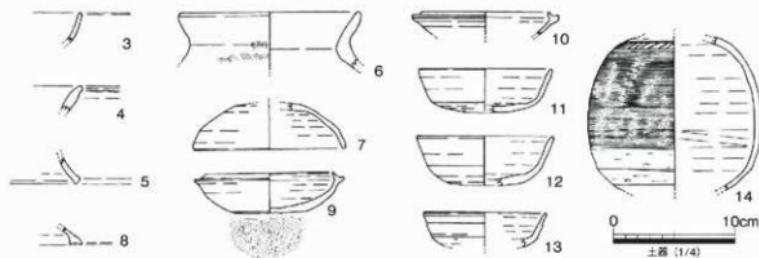
SD 03

南区で検出した幅0.5~1m、深さ約15cmの規模の溝状遺構である。国土地標西から6.5~13度南に振った東西方向に流れている。途中約5m途切れている。SD 03は、比較的多くの遺物が含まれていた。

第17図は、SD 03出土の遺物実測図である。3は上師器杯の口縁部の破片で、端部は尖り気味に収めている。口径は20cm程度である。4は上師器の鉢と考えた。端部外面を強くナデ外側に肥厚させているため、端部外面に幅4mmの弦線があるよう見える。5は土師器高杯の脚端部の破片で、端面は外端が上がっている。6は土師器蓋で、精造された胎土を用いている。「く」の字状に屈曲する口縁で、端部は尖り気味に収めている。体部外面にハケが見られる。7は須恵器杯蓋で、口縁部と体部の境界は明瞭に屈曲している。8は焼成不良の小片で、端部内面にかえりを有する須恵器蓋と考えられる。9~13は須恵器杯である。9の立ち上がりは内傾し低く、水平に伸る受部の端面は不明瞭である。底部は



第16図 SD03 遺物出土状況図・断面図

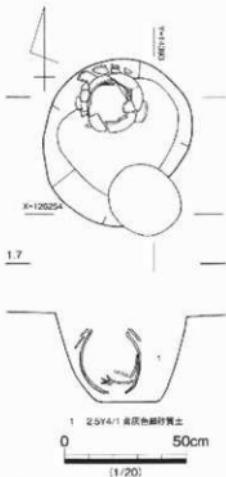


第17図 SD03出土遺物実測図

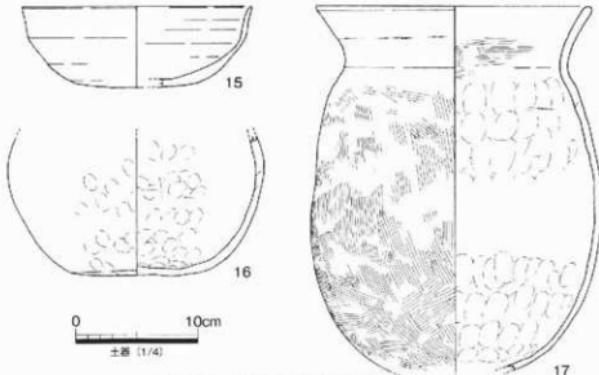
2分の1程度回転ヘラ削りを施し、「上」字のヘラ記号が認められる。10も立ち上がりは内傾し低い。水平に伸る受部の端面に沈線が巡っている。11～13の須恵器杯身の口縁は、直線状で端部は尖り気味に終わる。11は底部に粘土紐の継ぎ目を明瞭に残す。12は焼成不良である。14は須恵器の長頸瓶の体部である。中央附近に最大径があり、屈曲をもたずに丸みを帯びる体部である。体部下部はヘラ削り、その上部にはカキ目があり、体部上半には2本の沈線の間に木片の木口部を刺突した文様を加えている。

S D 03は、出土遺物の様相から陶邑 T K 217併行のものと考えられるが、年代幅をもって7世紀後半期のものとしておく。
ST 01

S D 03が途切れた所、S B 01の対角線の西南延長線上に所在する。径約65cm、深さ約37cmの土坑に、底部を打ち欠いた壺(17)を据え、上部を打ち欠いた壺(16)の底部で蓋をしていった。壺の内部からは鉢(15)が出土している。壺内部の上半



第18図 ST01 平・断面図



第19図 ST01出土遺物実測図

分は空洞となっており、上から落ち込んだ 17、16 の破片があり、その下に割れた状態の 15 があった。下半分の埋土は水洗選別を行い、精査したが、遺物は含まれていなかった。

15 は土師器の鉢で、摩滅している。底部と体部は厚い器壁をもち、強くナデで口縁部に移行しているため、体部と口縁部の屈曲付近の器壁が薄くなっている。口縁端部は丸く収めている。16 は土師器甕の底部で、平底であるが、明瞭な境界をもたずして体部に移行している。内部は指押さえ、外部は剥落のため調整不明である。S T 01 では、これを打ち欠いて蓋に転用していた。17 は土師器甕である。長胴形の体部で、最大径はほぼ中央にあり、底部は欠失する。口縁は体部から緩く屈曲し、外上方に開き、端部は丸く収めている。口縁部は摩滅し、内面下半に横ハケが残るのみであるが、体部外面は、上半部は縱方向の粗いハケ、下半にはランダムにハケが施されている。

S T 01 は、人が通ると推定される位置から検出されていることや、甕を正立させて据えていること等から、胞衣甕の可能性が考えられるが、胞衣が人々に踏みつけられる場所に埋められること自体に疑義もあり（注）、確証は得られていない。

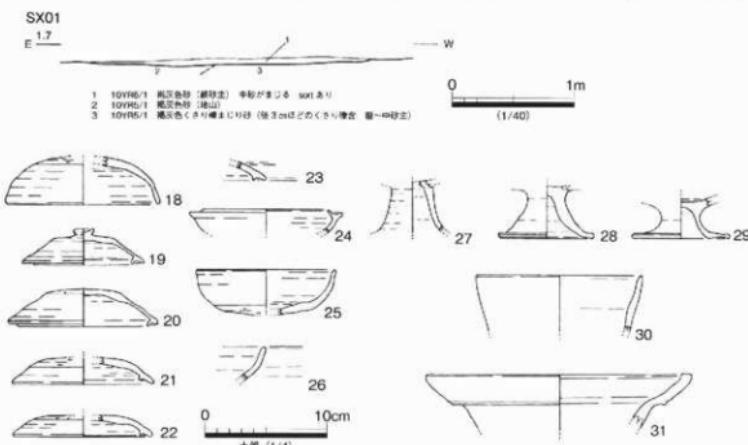
（注）田中久夫「胞衣甕」奈良県橿原考古学研究所編『橿原考古学研究所論集 第十四』八木書店 2003 年。

整地層

南区では、地山と考える第 6 層（黄褐色疊まじり砂）上面の凹凸を埋めるように第 5 層が堆積する。第 5 層は、2 種類以上の土質が混在しており、整地層と考えられる。S X 01 は、深さ約 6 cm の不定形の落ち込みであるが、自然の凹地を整地したものと判断される。

整地層からは比較的多くの遺物が出土している。なお、S B 01 等の 7 世紀の遺構は、整地層上面から掘り込まれているが、上面では遺構検出が難しかったため、整地層を除去して遺構検出を行った。したがって、整地層出土としている遺物の中には、本米遺構に伴うものも含まれていると考えられる。

18～23 は須恵器杯蓋である。本遺跡出土の須恵器が陶邑 T K 217 併行期のものと考えた場合の杯蓋と杯身のセットから考えると、12.4 cm の口径をもつ 18 は蓋と考えられる。天井部と口縁部との境界は不明瞭である。19 と 20 は、口縁部内面に先端が口縁部以下に突出するかえりをもつ杯蓋である。扁平



第 20 図 SX01 断面図、整地層出土遺物実測図

で中央が窪む摘みが付く。この時期の摘みは宝珠形が一般的であるが、打越窓跡（坂出市府中町）などに類例がある。20の天井部は無調整で、摘みをもたないものである。21～23は口縁部内面に先端が口縁部以下に突出しないかえりをもつ杯蓋で、21は焼成不良である。24は立ち上がりをもつ杯身で、非常に低く内傾する立ち上がりを付している。25の杯身は、底部と体部の境界付近のみヘラ削りを施している。27～29は透かしをもたない短脚の須恵器高杯で、28、29の脚部は、裾部が大きく広がり、脚端部はわずかに下方に屈曲させて終わっている。30は須恵器甕の口縁部と考えられ、直線的で急な立ち上がりである。自然釉が付着する。31は須恵器甕の口縁部で、外面の肥厚部下端に凸帯を削り出している。口縁端部は水平な面となり、内側に摘み出している。

南区包含層等出土遺物

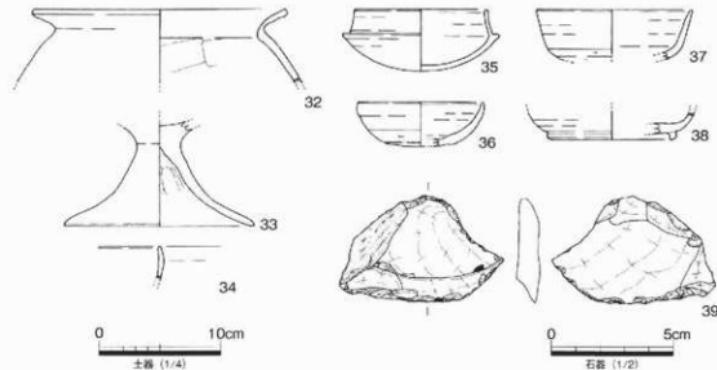
南区包含層としているのは、中世の遺構面と古代の遺構面との間の堆積層である。第8、9図の第3、4層に当る。

32は弥生土器甕で、「く」の字状に外反する口縁で、端部は四角に收めている。摩滅している。33は弥生土器高杯の脚部で、大きく開く裾部で、端部は丸く收めている。34は小片のため不確かであるが、土師器鉢と考えられ、口縁部はやや内傾し端部は丸く收めている。35は須恵器杯身で、摩滅している。やや内傾する高さ2cm近い立ち上がりで、端部は丸く收める。他の須恵器に比べて古い様相をもつ。36、37は須恵器杯身で、36は底部と体部の境界付近のみヘラ削りをしている。38は高台を付す須恵器杯である。丸みを帯びる断面形の高台は少し外側に踏ん張り、端部は平坦である。他の須恵器に比べ新しい器形である。39はサスカイト製のスクレイバーで、一辺に刃部を作っている。

第3層上面で中世の掘立柱建物跡2棟他を検出した。

S B 03

南区の西南隅で検出した掘立柱建物跡である。梁行は南辺で2間、桁行は東辺で3あるいは4間と考えられる。しかし、この付近には柱穴跡が集中し、立て替えの可能性を考えられ、柱間の間隔から2×3間のものである可能性が考えられる。座標北から約25度東に振った方向の南北棟で、規模は3.8×6.3mである。建物跡の方向は、周辺に抜がる条里型地割の方向と概ね合致している。S P 48、57、64の他、隣接するS P 51から遺物が出土している。



第21図 南区包含層等出土遺物実測図

40は土師質土器小皿で、底部と体部は稜をもたずにつながる。口縁端部は、わずかに外方に屈曲させており、底部は回転ヘラ切り後ナデている。41は土師質土器杯である。やや外湾する口縁である。42は瓦器椀である。体部外面は指押さえが明瞭で、口縁部外面は強いナデ、内面は不明瞭であるが、間欠的なヘラミガキが認められる。和泉型と考えられる。

43は土師質土器小皿で、底部から稜をもたずつに体部に移行している。44は土師質土器杯で、口縁端部は外反気味に終わらせている。45は白磁碗で、端部はやや外反気味に終わる。胎土中に黒色粒が含まれている。46は瓦器椀の底部で、形骸化した高台を付す。47、48は土師質土器杯の口縁部の破片、49は底部の破片である。

S B 03は、中世前半期のものと考えられる。

S B 04

S H 01付近で検出した1×2間の掘立柱建物跡である。座標北より約58度西に振った東西棟で、周辺の条里型地割の方向と合致する。規模は2.3×4.5mである。遺物は出土しなかったが、S B 03と埋土が共通することや、建物方向からS B 03と同一時期と考えられる。

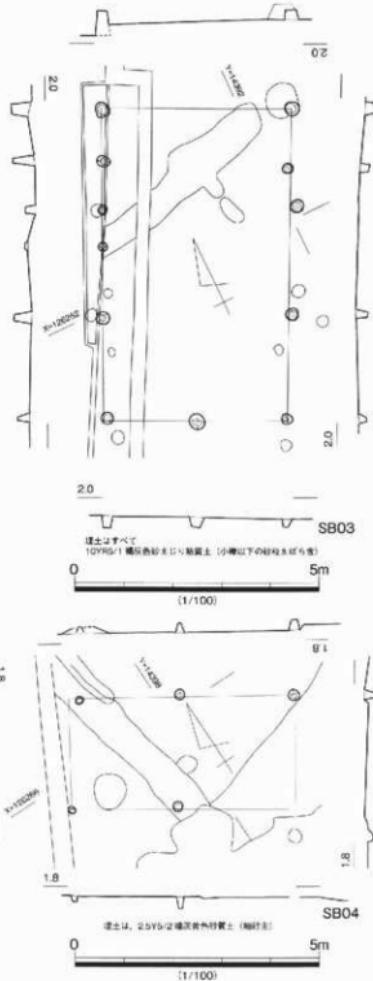
なお、この他にS P 43が、第3層上面で検出したもので、それ以外の遺構（S K 01等）は、第5層上面から掘り込まれたものである。

その他の遺構・遺物

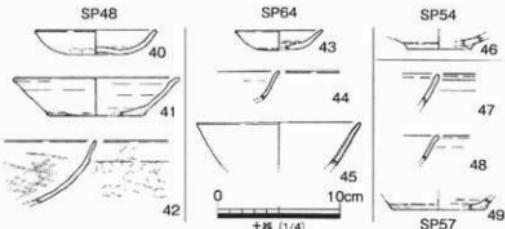
南区からは、以上その他にS K 01～04の他、複数の柱穴跡が検出されている。柱穴跡は既述のとおり、層位的にS P 43が中世の所産である以外は、古代あるいはそれ以前のものと考えられる。しかしながら、時期を決めることができる遺物を伴う遺構がなかったため、明確な時期決定は困難である。

S K 01は、長辺約80、短辺約50、深さ約15cmの隅丸長方形の土坑である。器種不明の土器細片が1点出土したのみである。S K 02は、一辺約70、深さ約20cmの隅丸方形の土坑である。遺物は出土しなかった。S K 03、04は北側を試掘調査トレンチによって壊されている。ともに遺物は出土しなかった。

第25図は、その他の南区出土の遺物実測図である。50はS P 42から出土した弥生土器甕の口縁部



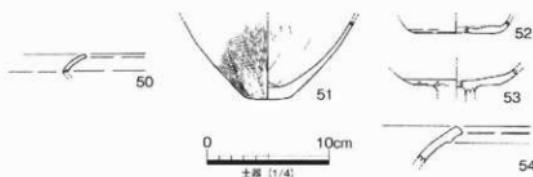
第22図 SB03・04 平・断面図



第23図 SB03等出土遺物実測図



第24図 SK01・02断面図



第25図 南区 その他の出土遺物実測図

の破片で、摩滅する。混入品と判断される。

51、52、54は、試掘トレンチ再掘削中に出土したものであり、53は古代の遺構面を検出する作業中に出土したものである。

51は弥生土器壺の底部と思われ、小さな平底の底部外面にもハケが施されている。52は須恵器杯身の底部で、粘土紐の継ぎ目が見られる。53は須恵器高杯、54は須恵器壺の口縁部の破片である。54の口縁部は外側に肥厚させている。

第3節 北区の遺物

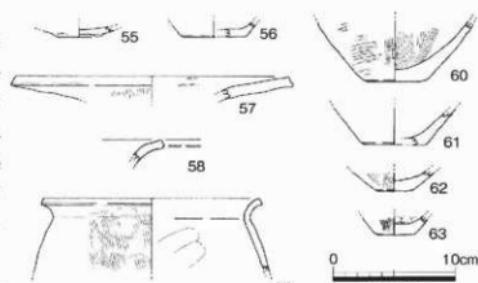
第1節で述べたとおり、北区からは弥生時代後期の遺物包含層が検出された。包含層は、汽水環境下で堆積した砂層の上に堆積する砂混じりの粘質土層である。堆積環境を示す明確な証拠はないが、汽水環境下の砂層より上層は、周辺地形から考えて後背湿地性の堆積物であると推定される。

第26図は、北地区から出土した遺物実測図で、55、56は第4～6層か

ら出土したもの、57～63は弥生時代後期の包含層（第7層）から出土したものである。第7層の方が相対的に密であるものの、いずれも極めてまばらに遺物が包含されている状態である。

55は瓦器底底部の破片で、摩滅する。形骸化した高台が付されている。56は、やや厚手の底部をもつ土師質土器杯と考えられる。

57は弥生土器広口壺口縁の破片で、摩滅するが、外外面にハケが認められる。58は弥生土器壺の外湾する口縁部の破片で、摩滅が著しい。59は弥生土器壺で、口縁は「く」の字状に屈曲するが、明瞭な稜をもたない。外側ハケ、内面には指押さえ後にナデしている。60～63は弥生土器の壺か甌の底部で、60の外側はタタキ後ハケ、内面にはハケが認められる。66はサスカイト製のスクレイパーである。弥生時代後期の包含層から出土した遺物は、小破片で摩滅し劣化していることが特徴である。北側の七宝山塊山麓の斜面及びその前面に当該期の集落が所在し、そこからの流れ込みにより堆積したと考えられる。



第26図 北区 出土遺物実測図

第4章 自然科学的分析

砂層中の珪藻化石

バレオ・ラボ 藤根 久

1.はじめに

珪藻は、10～500 μmほどの珪酸質殻を持つ单細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉、1988；安藤、1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲におよび、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においてもわずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種（陸生珪藻）も知られている。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

高屋条里遺跡は、香川県観音寺市高屋町の一の谷川の下流部に位置する弥生時代～古代の集落跡である。北地区の調査では、弥生土器（後期）包含層の下位層からラミナが発達した細粒砂～粗粒砂からなる砂層が検出された。ここでは、この砂層の堆積環境を推定するために珪藻分析を行った。

2.試料と処理方法

試料は、北地区のラミナが発達した細粒砂～粗粒砂からなる砂層（8層）の1試料である。この砂層上面の標高が1.0m弱である（本文参照）。試料は、以下に示す処理を行い、プレパラートを作製した。

(1) 湿潤重量約10g程度取り出し、秤量した後ビーカーに移し30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を7回ほど繰り返した。(3) 残渣を遠心管に回収し、マイクロビペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥した。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。

プレパラートは、顕微鏡下1000倍で観察し珪藻種を同定・計数した。なお、珪藻化石が少なかったため、プレパラート全面を検鏡した。

3.珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として、海水～汽水種は不明種としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明として扱った。

以下に、小杉（1988）が設定した汽水～海水域における環境指標種群と安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[外洋指標種群（A）]：塩分濃度が35パーミル以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

[内湾指標種群（B）]：塩分濃度が26～35パーミルの内湾水中を浮遊生活する種群である。

[海水藻場指標種群（C1）]：塩分濃度が12～35パーミルの水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。

[海水砂質干潟指標種群（D1）]：塩分濃度が26～35パーミルの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミニア類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が

生活する。

[海水泥質干潟指標種群 (E1)]：塩分濃度が12～30パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

[汽水藻場指標種群 (C2)]：塩分濃度が4～12パーミルの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

[汽水砂質干潟指標種群 (D2)]：塩分濃度が5～26パーミルの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。

[汽水泥質干潟指標種群 (E2)]：塩分濃度が2～12パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

[上流性河川指標種群 (J)]：上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にびったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

[中～下流性河川指標種群 (K)]：中～下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種は、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[最下流性河川指標種群 (L)]：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種は、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになる。

[湖沼浮遊生指標種群 (M)]：水深が約1.5m以上で、水生植物は岸では見られるが、水底には生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼澤湿地指標種群 (N)]：湖沼における浮遊生種としても、沼澤湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼澤湿地の環境を指標する可能性が大きい。

[沼澤湿地付着生指標種群 (O)]：水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地で、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

[高層湿原指標種群 (P)]：尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを中心とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群 (Q)]：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

4. 珪藻化石の特徴と堆積環境

全試料から検出された珪藻化石は、海水～汽水種が2分類群2属1種であった（表1）。

検出された珪藻化石は、汽水種*Terpsionoe americana*と海水種の*Coscinodiscus*属であった。その他では、海綿動物の骨格の一部の骨針化石が比較的多く含まれていた（図版1）。

珪藻化石を検討した堆積物は、ラミナが発達した細粒砂～粗粒砂からなる砂層である。

珪藻化石の大きさは、10 μm～数百μmであることから、珪藻化石が堆積物中に捕獲されなかったために珪藻化石が少ないと考えられる。

ただし、汽水種*Terpsionoe americana*は殻長が最大45 μmであるが、完形殻が8個体中7個体であり、基

第1表 堆積物中の珪藻化石算出表

(種群は、主に安藤(1990)に従った)	分類群	種群	8層
<i>Coscinodiscus</i> spp.	M		6
<i>Terpsionoe americana</i>	B		8
unknown	?		1
骨針化石	-		36
海水種	?		6
汽水種	?		8
不明種	?		1
合計			15

盤層などからの再堆積とは考えにくいことから、砂層の堆積環境を示している可能性が高い。なお、この砂層上面の標高が1.0m弱であることから、繩文海進の最高潮期の3m内外（小杉、1988）より標高が低く、海が侵入していた可能性は極めて高い。

以上のことから、この砂層は、主に汽水環境で堆積した砂層と推定される。

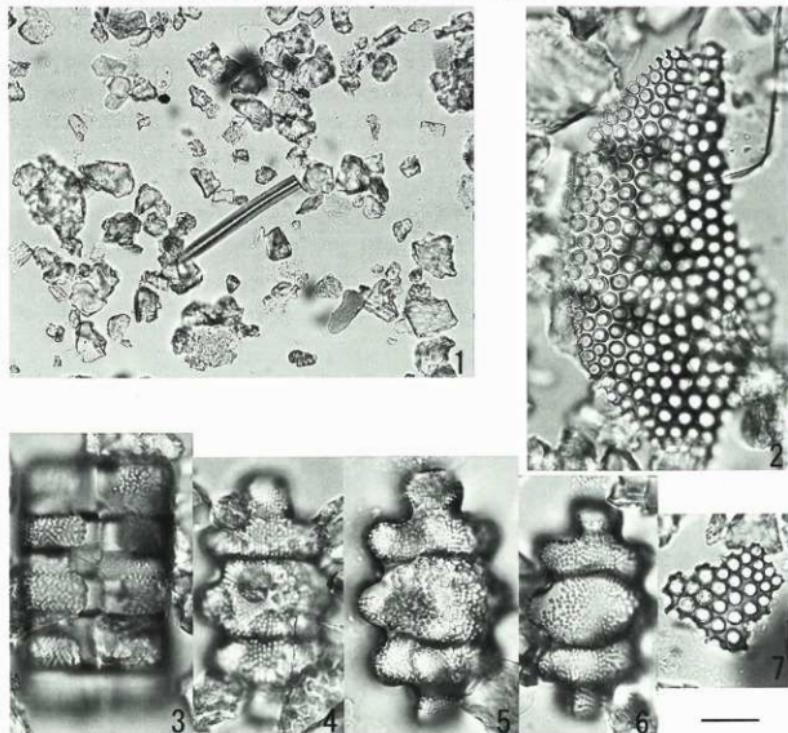
5. おわりに

北地区のラミナが発達した細粒砂～粗粒砂からなる砂層（8層）の珪藻化石を調べた結果、珪藻化石は砂層であるために少ないものの、完形殻からなる汽水種 *Terpsionoe americana* が特徴的に検出されたことから、汽水環境で堆積した砂層と推定された。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用、東北地理、42, 73-88.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用、第四紀研究、27, 1-20.



1.骨針化石と状況 2. *Coscinodiscus* sp. 3. *Terpsionoe americana*

4. *Terpsionoe americana* 5. *Terpsionoe americana* 6. *Terpsionoe americana*

7. *Coscinodiscus* sp.

第27図 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真 (bar,1:25 μ m,2-7:20 μ m)

第5章　まとめ

検出した遺構・遺物の内容から、高屋条里遺跡の時期別変遷を概観し、まとめとしたい。

1. 弥生時代

北区で検出した弥生時代後期の上器包含層の直下層の珪藻分析を行った結果、汽水環境で堆積した砂層と推定されるに至った。これまで、なつめの木の貝塚の存在によって、縄文海進をピークに海が浸入していたことが想定されていたが、このことを確認できた点に意義がある。高屋条里遺跡付近で海が侵入した範囲は、第2章に述べた後背湿地部分と推定される。今後、範囲の確定や年代の検証等を進める必要がある。

南区で検出したS D 01から、弥生時代前期と考えられる壺の底部が出土している。この遺物のみが前期と考えられるものであり、当時の様相を検討することは難しい。

北区では弥生時代後期の遺物包含層を検出した。遺物は、細片が散在する状況で出土し、堆積環境によるのか、摩滅したものが多いのが特徴である。これをもって、当時の様相を復原することは困難であるが、次第に陸化が進む過程で、弥生時代後期に本格的な土地利用が進展したことを見出すものと評価できる。

2. 古代

南区で検出した7世紀後半期の建物群は、竪穴住居跡1棟と掘立柱建物跡2棟が、建物跡の方向を揃えて規格的に配置されている。建物跡群の南には、同様に方向を揃えた溝状遺構がある他、溝状遺構が途切れた所と、1棟の掘立柱建物跡の対角線の延長線との交点に当る位置から、胞衣壺の可能性が考えられる甕を掘えた上坑を検出した。これら巨視的に磁北を基準にしていると考えられ、また、整然と建物が配置されている点も大きな特徴である。

3. 中世

南区では、古代の遺構面より約25cm上位に中世の遺構面があり、2棟の掘立柱建物跡を検出した。出土遺物から中世前半期のものと考えられる。2棟の建物跡の方向は、周辺に広がる条里型地割の方向と合致している。高屋条里遺跡からは、条里型地割に係わる遺構は検出されなかつたが、建物の方向が周辺の条里型地割の方向と同一になる事例が多いことから、7世紀後半期段階には、現況の条里型地割は施工されておらず、中世前半期までの間に施工されたと考えられる。

北区では、弥生時代後期以後に厚さ70cmの包含層が形成され、わずかではあるが中世の遺物が採集されている。畦畔等の土地利用の痕跡は見出されなかつたが、5, 6層の鉄分の沈着が見られた。このことから、中世には水田が営まれていたものと考えられる。

第2表 高屋条里遺跡出土土器観察表

件文 番号	遺物名	種類	用途	色調	外觀・輪		内面・底		手土		口径 mm	底径 mm	重量 g	内面・内底 形		外面・内面 形		焼存在	参考
					輪幅	輪厚	底幅	底厚	砂粒	砂粒				砂粒	砂粒	砂粒	砂粒		
1 SD04	深土器	盆	食	10YR8/3 黄褐色	2.5YR4.0灰白	2.5YR7.3灰黄	中・影	中・影	中・少	中・少	1229	96	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	底部	6.8	
2 SW04	土器	盆	食	2.5YR7.6灰白	2.5YR7.6灰	2.5YR7.6灰	中・影	中・影	中・少	中・少	1229	96	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口		
3 SD03	土器	盆	食	2.5YR7.3灰褐色	2.5YR7.3灰褐色	2.5YR7.3灰褐色	中・影	中・影	中・少	中・少	1229	96	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口		
4 SD03	土器	盆	食	2.5YR7.3灰褐色	2.5YR7.3灰褐色	2.5YR7.3灰褐色	中・影	中・影	中・少	中・少	1229	96	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口		
5 SD03	土器	盆	食	10YR8.4灰褐色	10YR8.4灰褐色	10YR8.4灰褐色	中・影	中・影	中・少	中・少	1229	96	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口		
6 SD03	無把器	盆	食	5YR6.1灰	5YR6.1灰	5YR6.1灰	中・影	中・影	中・少	中・少	1229	96	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口		
7 SD03	無把器	盆	食	5YR7.1灰白	5YR7.1灰白	5YR7.1灰白	中・影	中・影	中・少	中・少	1229	96	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口		
8 SD03	無把器	杯	飲	N6/灰	N7/灰白	N7/灰白	中・影	中・影	中・少	中・少	1229	96	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口		
9 SD03	無把器	杯	飲	N5/灰	N5/灰	N5/灰	中・影	中・影	中・少	中・少	102	102	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口		
10 SD03	無把器	杯	飲	N7/灰白	N8/灰白	N8/灰白	中・影	中・影	中・少	中・少	102	102	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口		
11 SD03	無把器	杯	飲	5YR7.1灰白	5YR7.1灰白	5YR7.1灰白	中・影	中・影	中・少	中・少	111	40	62	長軸アーチ・ヘラ切り	長軸アーチ・ヘラ切り	長軸アーチ・ヘラ切り	長軸アーチ・ヘラ切り	口輪部 瓶口	2.8
12 SD03	無把器	盆	食	5YR5.1灰	5YR5.1灰	5YR5.1灰	中・影	中・影	中・少	中・少	99	99	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口	1.8	
13 SD03	土器	盆	食	10YR7.2 1.45:1.45:1.45	10YR7.2 1.45:1.45:1.45	10YR7.2 1.45:1.45:1.45	中・影	中・影	中・少	中・少	102	102	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口		
14 SD03	土器	盆	食	N7/灰白	N8/灰白	N8/灰白	中・影	中・影	中・少	中・少	102	102	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口		
15 ST01	上縁土器	杯	飲	2.5YR8.1灰白	2.5YR8.1灰白	2.5YR8.1灰白	中・影	中・影	中・少	中・少	186	66	62	長軸アーチ・ヘラ切り	長軸アーチ・ヘラ切り	長軸アーチ・ヘラ切り	長軸アーチ・ヘラ切り	口輪部 瓶口	3.8
16 ST01	土器	盆	食	2.5YR5.4灰褐色	2.5YR5.4灰褐色	2.5YR5.4灰褐色	中・影	中・影	中・少	中・少	102	102	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口	8.8	
17 ST01	土器	盆	食	2.5YR5.3 1.45:1.45:1.45	2.5YR5.3 1.45:1.45:1.45	2.5YR5.3 1.45:1.45:1.45	中・影	中・影	中・少	中・少	102	102	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口	7.8	
18 勝見削	無把器	蓋	蓋	N7/灰白	N6/灰	N6/灰	中・影	中・影	中・少	中・少	224	224	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口		
19 勝見削	無把器	蓋	蓋	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	中・影	中・影	中・少	中・少	102	29	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口	1.8	
20 勝見削	無把器	蓋	蓋	N6/灰	N6/灰	N6/灰	中・影	中・影	中・少	中・少	102	21	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口		
21 勝見削	無把器	蓋	蓋	N8/灰白	N8/灰白	N8/灰白	中・影	中・影	中・少	中・少	115	115	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口		
22 勝見削	無把器	蓋	蓋	N6/灰	N6/灰	N6/灰	中・影	中・影	中・少	中・少	114	114	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口	2.8	
23 勝見削	無把器	蓋	蓋	N8/灰白	N8/灰白	N8/灰白	中・影	中・影	中・少	中・少	102	28	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口	1.8	
24 勝見削	無把器	蓋	蓋	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	中・影	中・影	中・少	中・少	102	21	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口	1.8	
25 勝見削	無把器	蓋	蓋	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	中・影	中・影	中・少	中・少	111	40	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口	2.8	
26 勝見削	無把器	蓋	蓋	1.45:1.45:1.45	1.45:1.45:1.45	1.45:1.45:1.45	中・影	中・影	中・少	中・少	111	40	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口	2.8	
27 SS01	無把器	蓋	蓋	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	中・影	中・影	中・少	中・少	102	29	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口	4.8	
28 勝見削	無把器	蓋	蓋	2.5YR7.3灰褐色	2.5YR7.3灰褐色	2.5YR7.3灰褐色	中・影	中・影	中・少	中・少	102	29	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口	1.8	
29 勝見削	無把器	蓋	蓋	5YR6.1灰	5YR6.1灰	5YR6.1灰	中・影	中・影	中・少	中・少	102	29	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口	2.8	
30 勝見削	無把器	蓋	蓋	5YR6.1灰	5YR6.1灰	5YR6.1灰	中・影	中・影	中・少	中・少	102	29	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口	1.8	
31 勝見削	無把器	蓋	蓋	10YR8.4灰褐色	10YR8.4灰褐色	10YR8.4灰褐色	中・影	中・影	中・少	中・少	102	29	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口	1.8	
32 包含物	弘生土器	盖	蓋	1.45:1.45:1.45	1.45:1.45:1.45	1.45:1.45:1.45	中・影	中・影	中・少	中・少	206	206	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口	2.8	
33 包含物	弘生土器	盖	蓋	2.5YR7.6灰	2.5YR7.6灰	2.5YR7.6灰	中・影	中・影	中・少	中・少	206	206	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	マツク (ナガ)	口輪部 瓶口	4.8	

第3表 高麗里遺跡出土石器觀察要

器物番号	器物名	器種	測量	測量		保存率	備考
				測量	保存率(%)		
31 金合鑄 十脚壺	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
31 金合鑄 十脚壺	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
34 金合鑄 雷紋盞	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
36 金合鑄 銀質盞	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
37 金合鑄 銀質盞	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
38 金合鑄 銀質盞	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
49 SGSNSP6 土生土器	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
49 SGSNSP6 土生土器	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
49 SGSNSP6 土生土器	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
49 SGSNSP6 土生土器	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
50 S44 金合鑄 白胎	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
51 金合鑄 洪生土器	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
52 金合鑄 銀質盞	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
53 金合鑄 銀質盞	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
54 金合鑄 銀質盞	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
55 金合鑄 銀質盞	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
56 金合鑄 土面刻上器	杯	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
57 金合鑄 宋生土器	盞	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
58 金合鑄 楊生土器	盞	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
59 金合鑄 楊生土器	盞	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
60 金合鑄 楊生土器	盞	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
61 金合鑄 楊生土器	盞	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
62 金合鑄 楊生土器	盞	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面
63 金合鑄 楊生土器	盞	杯形	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面	内面・外 面

第3表 高壓條里遺跡出土石器觀察表

写 真 図 版



空中写真 1974 年撮影 國土數値情報（國土交通省）

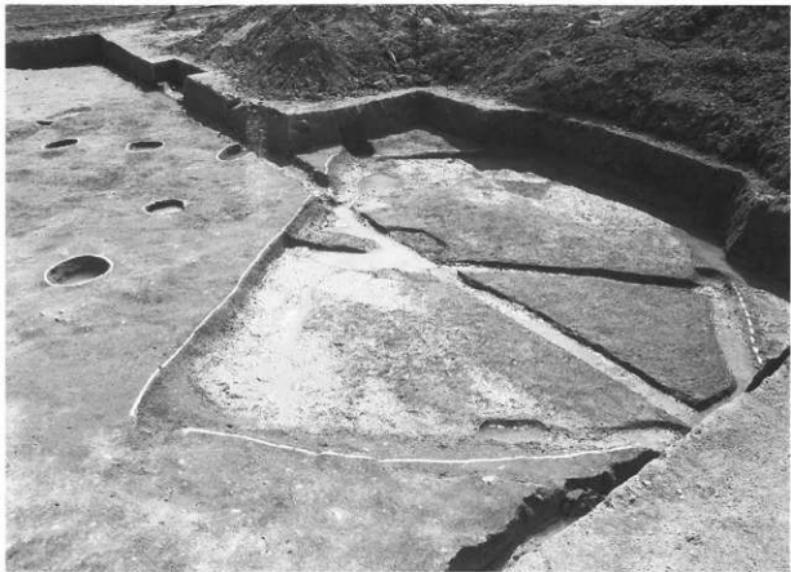
図版 2



南地区 堆積状況（東から）



南地区 掘削状況（南から）



南地区 SH01 掘削状況（北から）



南地区 SH01 断面（北から）

図版 4



南地区 SB01 ほか掘削状況（南から）



南地区 SB02 検出状況（東から）



南地区 SB02 ほか掘削状況（西から）

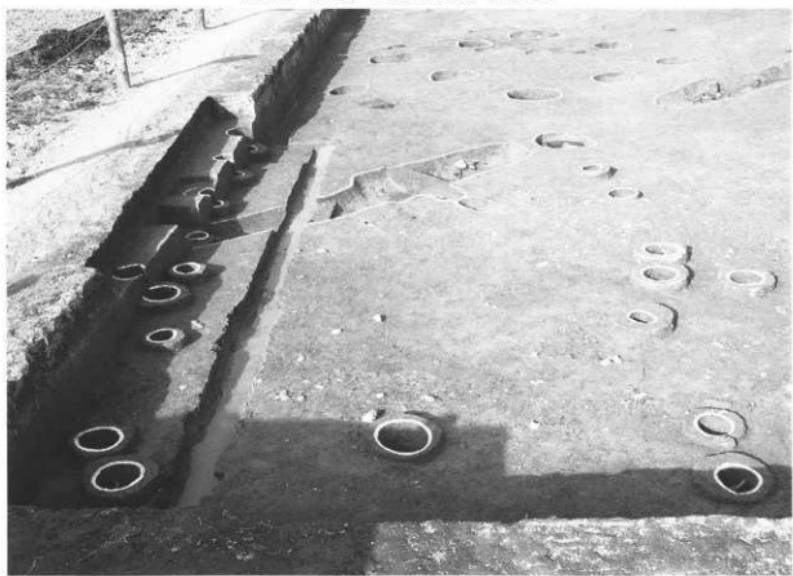


南地区 ST01 掘削状況（東南から）

図版 6



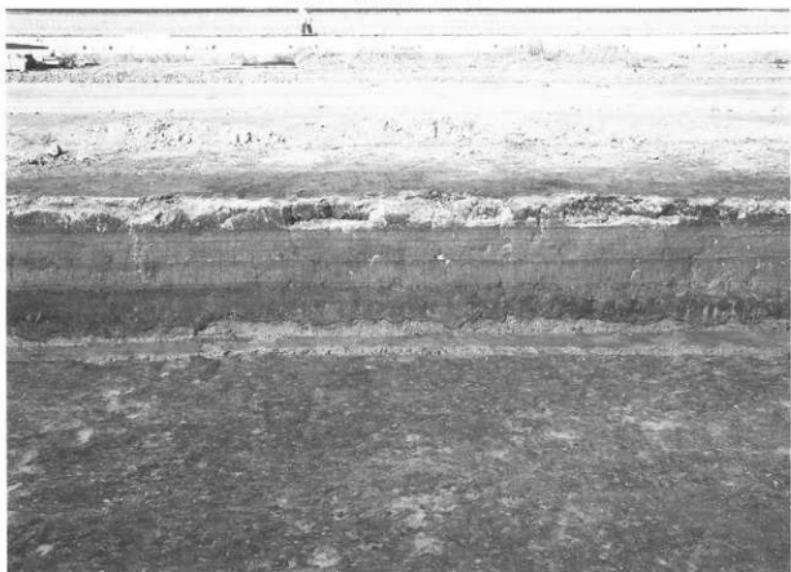
南地区 SD03 遺物出土状況（西から）



南地区 SBO3 挖削状況（東南から）



北地区 挖削状況（東南から）



北地区 堆積状況（東から）

図版 8



県道多度津丸亀線（丸亀工区）緊急地方道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

津森位遺跡

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

県道多度津丸亀線は、多度津丸亀間の交通渋滞の緩和を目的とした新規バイパス路線として計画され、整備が進められている。本路線内では、平成2年度に道下遺跡（丸亀市金倉町、香川県教育委員会他 1991）、平成13年度に今津中原遺跡（丸亀市今津町、香川県教育委員会 2007）の発掘調査が実施されている。その後、事業の進捗に伴い、香川県教育委員会において埋蔵文化財包蔵地の有無を確認する調査を行った結果、津森位遺跡の存在が明らかとなった。

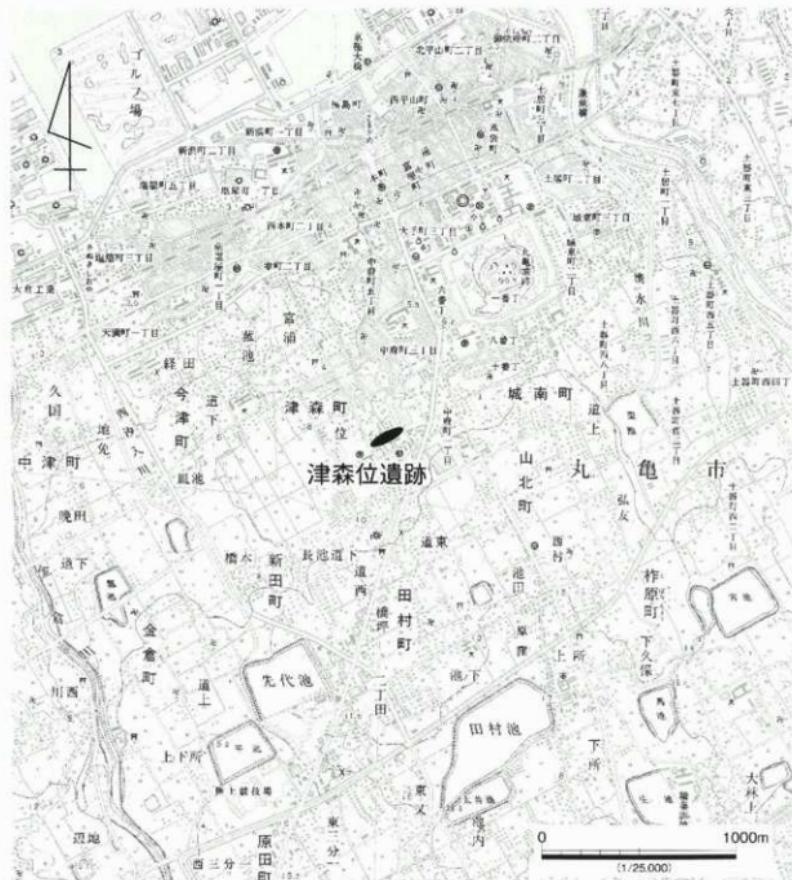
津森位遺跡は、平成14年6月28日と7月23日に実施したトレンチ調査で、弥生時代後期末の溝状遺構と古代と考えられるピット6を検出している。やや規模の大きなS P 05では、7～8世紀頃の須恵器甕が据えられたような状態で検出されている（香川県教育委員会 2003）。このトレンチ調査で、本報告書でI区、II区とする範囲が保護措置の必要な範囲として確定したが、翌年度に該当箇所の官民境界の構造物（水路）の設置工事が行われることになり、調査が実施された。また、III区とする範囲の西北部の構造物設置工事も併せて行われ、工事立会により弥生土器細片を包含する旧流路跡とピット1が検出され、この範囲も保護措置の必要な範囲に追加された。I区とする範囲では、ピット1・土坑1・竪穴住居跡の可能性が高い遺構1を検出した。竪穴住居跡の可能性の高い遺構は、径4m前後、検出面から底面までの深さ約0.2m、掘り方に沿って溝が巡り、中央付近に焼土塊を多量に認める遺構を含むもので、弥生時代終末期の遺物を検出している。II区とする範囲では、ピット4・溝状遺構2・土坑1、弥生土器・土師質土器を検出した（香川県教育委員会 2004）。

平成17年度には、遺跡の東限を把握する目的で試掘調査が実施され、遺跡東限が確定し、県道多度津丸亀線における津森位遺跡の範囲は、2,702mに確定した（香川県教育委員会 2006）。



第1図 遺跡位置図（1）

香川県教育委員会ほか『県道多度津丸龜崎緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 道下遺跡』1991年
香川県教育委員会『埋蔵文化財試掘調査報告XVI 香川県内遺跡発掘調査』2003
香川県教育委員会『埋蔵文化財試掘調査報告XVII 香川県内遺跡発掘調査』2004
香川県教育委員会『埋蔵文化財試掘調査報告XIX 香川県内遺跡発掘調査』2006
香川県教育委員会『県道多度津丸龜崎緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 今津中原遺跡』2007



第2図 遺跡位置図（2）（国土地理院1/25,000地形図「丸龜」を使用）



第3図 遺跡位置図（3）（九州市都市計画図を用い）

第2節 調査の経過

発掘調査は、平成18年4月1日から8月31日までの5ヶ月間で実施した。近隣に住宅が数多くあることに加え、1区北側ではマンション建築工事が併行して行われ、3区では北側に商業施設、南に商業施設の資材置き場がある等配慮すべき事項があった。このため調査区を細分して調整を図る必要が生じ、最終的に10の調査区に細分して調査を行うこととなった。調査は概ね順調に進捗し、大きなトラブルや事故もなく終えることができた。なお、7月22日には丸亀市教育委員会主催の「丸亀文化財の日」に合わせて発掘調査現場を公開し、84名の参加を得た。調査区名と調査の進捗表を、第4図と第1表に示す。

整理作業は、平成21年1月から3月までの3ヶ月間で実施した。遺物の洗浄や注記作業については終了していたことから、遺物の接合・図化・写真撮影と遺構図のトレース、遺構写真の整理等を行い、本書にまとめた。出土遺物量は28%入りコンテナ33箱である。

第3節 調査体制・整理体制

発掘調査の体制は、以下のとおりである。

平成18年度

香川県教育委員会事務局文化行政課	香川県埋蔵文化財センター
総括	
課長 三谷 雄治	所長 渡部 明夫
課長補佐 中村 順伸	次長 棚原 正人
秘務・振興グループ	
副主幹 河内 一裕	課長 野口 孝一
主任 脇 悠介	主任 嶋田 和司
文化財グループ	
課長補佐 藤好 史郎	主任 田中 千晶
主任 山下 平重	調査課
文化財専門員 信里 芳紀	課長 岩瀬 常雄
	文化財専門員 木下 晴一
	文化財専門員 福家 正人
	嘱託（土木） 高嶋 勝英
	嘱託（調査技術員）八木 國裕

発掘作業に携わった方は、以下のとおりである。

整理作業員 東條 俊子	調査補助員 今井 山記子
発掘作業員 石田 信子	
磯野 良照	井上 邦昭
岡田 忠幸	請川 麻子
香川 慶一	小川 浩司
香川 貞美	岡崎 文
鈴木 正博	茶本 恵一
平井 加寿美	中田 勝利
三谷 愛子	林 悠香
森安 悅美	山下 俊明



第4図 調査区割図

	4月	5月	6月	7月	8月	
	準備					施収
I-1						
I-2		12	8			
I-3						
II-1		8	23			
II-2			24	30		
II-3				12	8	
II-4						
II-5						
II-6						
III-1						
III-2						
III-3	17		29			
III-4				30	20	
III-5					21	7
III-6						21 30

第1表 進捗表

整理作業の体制は、以下のとおりである。

平成 20 年度

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

課長 春山 浩康

総括・生涯学習推進グループ

課長補佐 武井 寿紀

副主幹 香西 としみ

主任 林 照代

文化財グループ

主任幹（兼）課長補佐 藤好 史郎

主任文化財専門員 森 格也

文化財専門員 乗松 真也

嘱託整理作業員 山地 真理子 市川 孝子 加藤 恵子 柴垣 智美 朝田 加奈子
廣瀬 杏子

香川県埋蔵文化財センター

総括

所長 大山 真充

次長 廣瀬 常雄

総務課

課長 廣瀬 常雄（兼務）

主任 宮田 久美子

主任 嶋田 和司

主任 古市 和子

資料普及課

課長 西岡 達哉

文化財専門員 木下 晴一

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

自然地理

丸亀市周辺は、等高線の配列が扇形になっている。これは土器川が形成した扇状地を示している。等高線の配列を微細に見ると、出村池付近から丸亀城及び丸亀城下町にかけて尾根状の盛り上がりが認められ、津森位遺跡は、この盛り上がりの西斜面に位置している。扇状地の骨格の形成時期については、三条黒島遺跡において旧石器の接合資料が検出されたり、地表直下から A T 層が検出されたりする等、更新世に遡ることが明らかにされつつある。また、盛り上がりの地質学的な説明は今後の課題であるが、遺跡立地に何らかの影響を及ぼしている可能性があり、注意が必要である。

第6図は、空中写真判読による津森位遺跡付近の微地形分類予察図である。当該地は、ほぼ全面が開田されていることや、丸亀市街地では人工改変の度合いが大きいこと等の理由から、微地形分類は困難であり、第6図は今後修正を加えていく必要があるものである。

津森位遺跡付近は、大きく2つの地形面に分類される。一つは臨海部の浜堤と潟湖（ラグーン）跡からなる部分であり、一つは津森位遺跡の位置する緩傾斜扇状地である。丸亀市付近の臨海部には3列の浜堤が形成され、陸側の浜堤の南には潟湖跡と考えられる低湿地が広がっている。浜堤の形成時期や、潟湖跡の埋積過程を知る資料は知られていない。しかし、潟湖跡に面して、津森・今津など「津」の付く地名が並んでおり、港津に係ることが指摘されていることや、潟湖跡には条里型地割は認められないことから、比較的新しい時期に埋積したと考えられる。

緩傾斜扇状地部分は、旧中州・旧河道及び河間低地よりなる。旧河道は条里型地割の乱れとして把握され、遺跡より東南側では断片的、西北側では連続的に把握される傾向がある。これらの河道の年代を個々に知る資料はないが、近辺の郡家一里屋遺跡や龍川四条遺跡等で調査された旧河道の年代観と大きくなれば変わらないと考えられ、更新世に形成され、以後堆積や浸食を繰り返したものと考えられる。

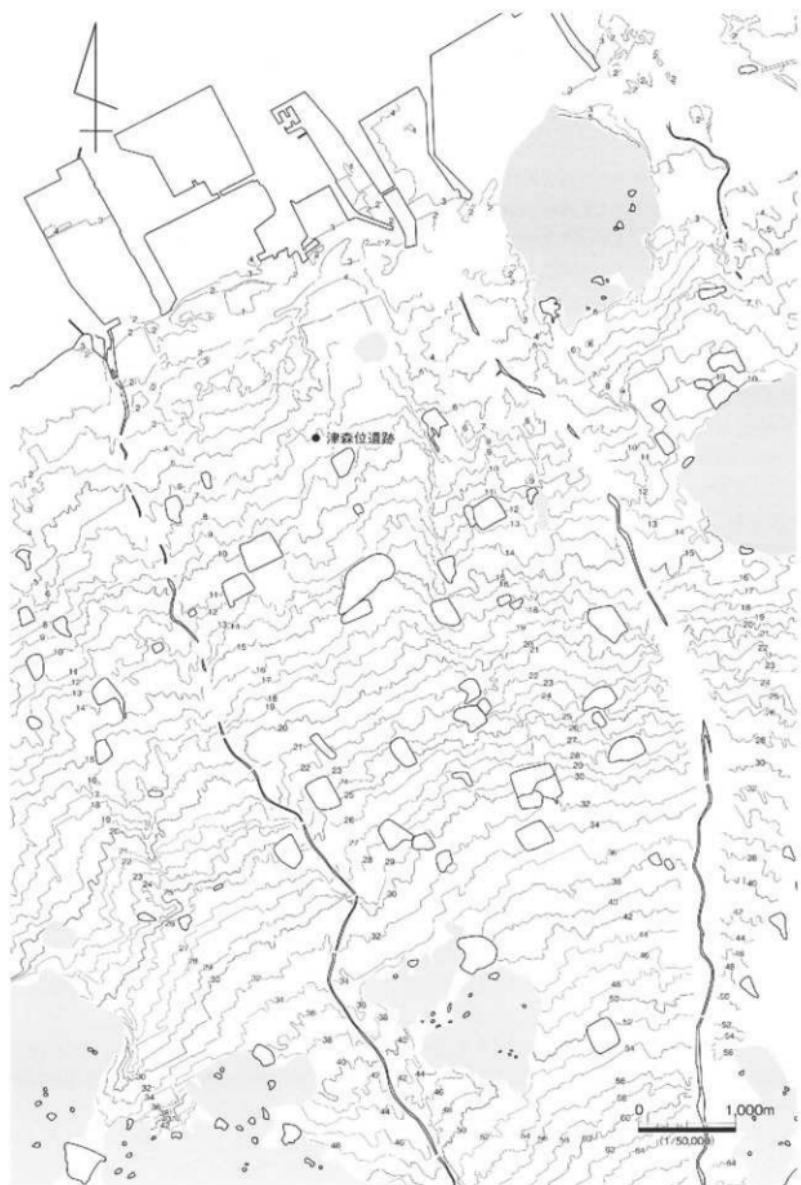
津森位遺跡の南方に、明瞭な微高地があり、林地・畑・宅地として利用されている。この微高地は旧中州と考えられる。当該地周辺では、旧中州も水田化されている傾向があることから、珍しいものである。

津森位遺跡で検出した遺構と周辺の微地形との関連については、周辺地域の発掘調査の進展とともに、継続的に検討を進める必要がある。

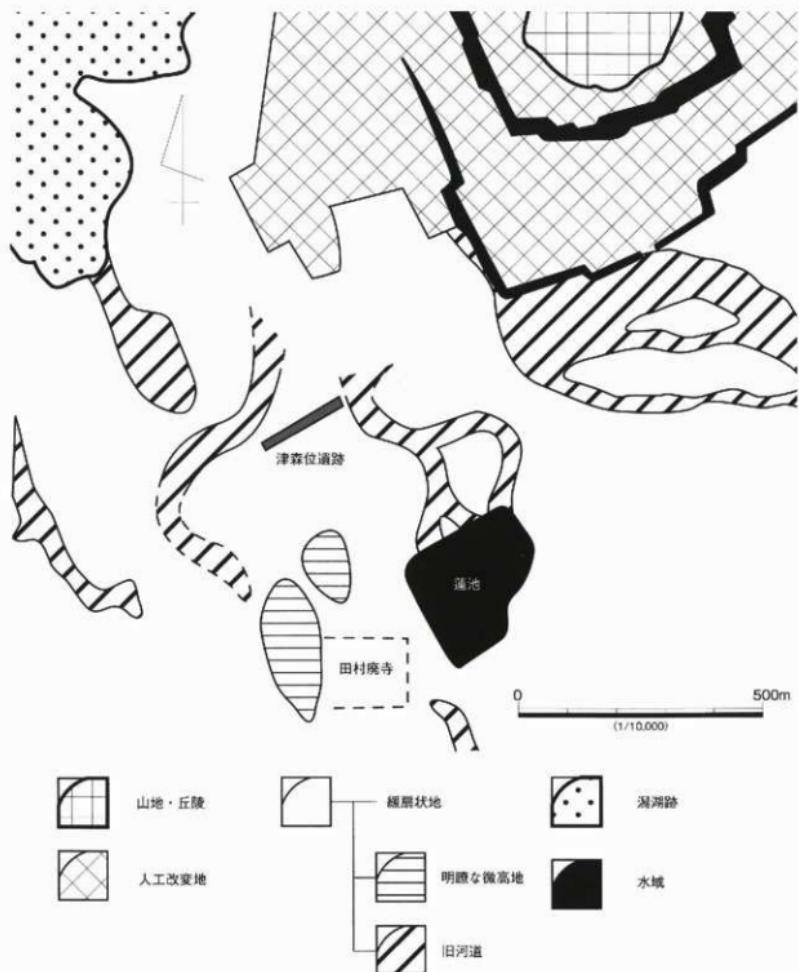
人文地理

土器川扇状地上には、条里型地割が広範に遺存している。一町方格の径溝は、津森位遺跡の南東に位置する蓮池の南東付近では明瞭であるが、津森位遺跡付近では、東西方向は明瞭であるが、南北方向は断片的である。また、後述する今津中原遺跡付近は、耕地整理のため地割が改変されている。耕地整理は空中写真によると 1954 年以降 1962 年までの間に実施されている。

津森位遺跡の東北には、龜山と呼ばれる独立丘陵があり、江戸時代初めに丸亀城が築城された。城の北側と南側を中心に城下町が築造されている。津森位遺跡は、近世の街道に隣接し、丸亀市街地と普通寺市を結ぶ県道 33 号（旧国道 11 号）にも隣接しており、交通至便の地として都市化が進行している。



第5図 丸龜平野 等高線図



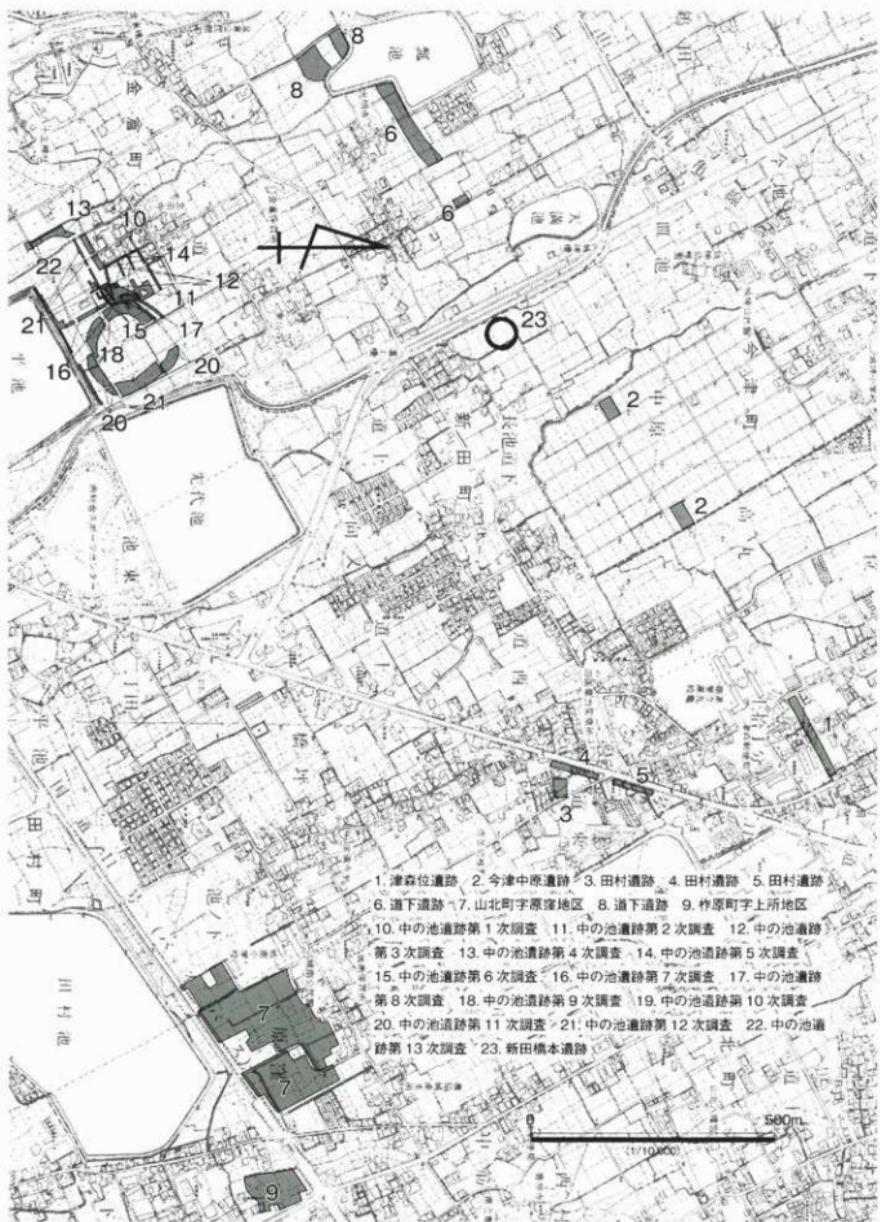
第6図 遺跡付近 微地形分類予想図

第2節 歴史的環境

遺跡周辺では、近年発掘調査事例が増加している。ここでは、調査の行われた遺跡について記述する。

田村遺跡

津森位遺跡の南方約600mの番神社境内に塔心礎が置かれている。これは、南側の耕地から出土し、移されたものである。番神社の南東には、「塔の本」等の寺院に関連すると考えられる小地名が残り、



第7図 遺跡付近の調査実績図

遺構付近の調査実績一覧（番号は第7図に対応する）

1. 本書
2. 『県道多度津丸亀線緊急地方整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 今津中原遺跡』 2007.9 香川県教育委員会
3. 『株式会社 百十四銀行城西支店建設に伴う丸亀市田村町所在の古代寺院跡の調査 田村遺跡』 2002.3 丸亀市教育委員会 株式会社百十四銀行
4. 『県道高松丸亀線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 田村遺跡』 2004.3 香川県教育委員会財团法人香川県埋蔵文化財調査センター 香川県土木部
5. 『県道高松善通寺線道路改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 田村遺跡Ⅱ』 2007.1 香川県教育委員会
6. 『県道多度津丸亀線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 道下遺跡』 1991.11 香川県教育委員会 財團法人香川県埋蔵文化財調査センター
7. 『丸亀市内遺跡発掘調査報告集 第2集 山北町字原宮地区』 2007.3 丸亀市教育委員会
8. 『丸亀市内遺跡発掘調査報告集 第2集 道下遺跡』 2007.3 丸亀市教育委員会
9. 『丸亀市内遺跡発掘調査報告集 第3集 佐原町字上所地区』 2008.3 丸亀市教育委員会
10. 『香川県丸亀市金倉町所在の弥生時代遺跡の調査 中の池遺跡発掘調査概要』 1982.3 丸亀市教育委員会
11. 『香川県丸亀市金倉町所在の弥生時代遺跡の調査 中の池遺跡発掘調査概要』 1982.3 丸亀市教育委員会
12. 『香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度』 1996.3 香川県教育委員会
13. 『丸亀市総合運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 中ノ池遺跡Ⅰ』 1998.12 丸亀市松本考古学研究所
14. 『丸亀市総合運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 中ノ池遺跡Ⅱ』 2000.3 丸亀市松本考古学研究所
15. 『香川県埋蔵文化財調査年報 平成10年度』 2000.3 香川県教育委員会
16. 『丸亀市総合運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 中ノ池遺跡Ⅲ』 2000.3 丸亀市松本考古学研究所
17. 『丸亀市総合運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 中ノ池遺跡 第8次調査』 2003.3 丸亀市教育委員会 (財)元興寺文化財研究所
18. 『丸亀市総合運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 中ノ池遺跡 第9次調査』 2004.3 丸亀市教育委員会 (財)元興寺文化財研究所
19. 『丸亀市総合運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 中ノ池遺跡 第10次調査』 2004.3 丸亀市教育委員会 (財)元興寺文化財研究所
20. 『丸亀市総合運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 中ノ池遺跡 第11次調査』 2005.3 丸亀市教育委員会 (財)元興寺文化財研究所
21. 『丸亀市総合運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 中ノ池遺跡 第12次調査』 2006.3 丸亀市教育委員会 (財)元興寺文化財研究所
22. 『丸亀市総合運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 中ノ池遺跡 第13次調査』 2008.3 丸亀市教育委員会 (財)元興寺文化財研究所
23. 『香川県文化財年報 平成18年度』 2008.2 香川県教育委員会

白鳳期から平安時代にかけての瓦が多数採集され、田村廃寺と呼ばれている。近年、当該地周辺の発掘調査が行われ、寺院北限を示すと考えられる溝状遺構や塗地跡、梵鐘の鉄造遺構、寺院に関連すると考えられる掘立柱建物跡等が検出されている。

第7図3地点は、店舗建設に伴い丸亀市教育委員会が発掘調査を行っている。ここでは弥生時代後期の遺物を多量に包含する集石層、古墳時代後期の直径約10mの円墳跡、7世紀末期から8世紀前半期に比定される掘立柱建物跡2棟、溝状遺構、9、10世紀の築地跡、掘立柱建物跡等が検出されている。7世紀末期以降の遺構は、真北方向を指向しており、多量に出土している瓦の存在も合わせて寺院跡であることを示していると考えられている。なお、瓦のセット関係から、白鳳期に創建され、衰退期を経て、10世紀代に再興、13世紀頃には廃絶した経緯が明らかにされている。

第7図4、5は、県道高松普通寺線の道路改修に伴って香川県埋蔵文化財センター、香川県教育委員会が調査を行った地点である。4は平成10、11年度に調査を実施し、5は平成17年度に調査を実施したものである。両者は近接するが、4は復原される掘立柱建物跡が真北方向を指向し、瓦も多く出土しているのに対し、5では瓦の出土は1点で、田村廃寺創建期と同時期と考えられる掘立柱建物跡の方向は、座標北より20度前後西に振れている。どちらの調査区も狭小であり、検出遺構の解釈や年代観については、確定が困難であるが、4は田村廃寺と関連し、5は関連しない可能性が高い。なお、5の報告書において「田村北型地割」として抽出されているとおり、当該地付近には周辺とは異質な真北方向を指向する地割の集合があり、田村廃寺の範囲を示す可能性がある（第6図に図示）。

今津中原遺跡・道下遺跡

今津中原遺跡は、津森位遺跡と同様に、県道多度津丸亀線建設に伴って発掘調査が行われた遺跡で、津森位遺跡の西方約500mの地点に位置する。調査区は約220m離れた2ヶ所に分かれ、西側の調査区からは弥生時代後期の溝状遺構数条が、東側の調査区からは中世後半期から近世の溝状遺構数条が検出された。なお、基盤は扇状地の骨格を形成する更新世の堆積層と考えられる。報告書では今津中原遺跡を旧海岸線近くの旧河道が広がる低地と表現しているが、先述の扇状地内に見られる尾根状の盛り上がりに対して低いということで、低湿地ということではない。

道下遺跡は、県道建設に先立って1990年に財團法人香川県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施している（第7図6）。弥生時代と中世・近世を中心に縄文時代晚期以降の遺物が出土している。検出遺構は、弥生時代後期の溝状遺構等である。また、隣接地の宅地開発に先立って丸亀市教育委員会が試掘調査を実施したが、ここでは遺構・遺物は検出されなかった。

新田橋本遺跡

商業施設建設に伴い発見された遺跡である。発掘調査の結果、南から北へ流れる複数の溝状遺構が検出されている。出土遺物が僅少なため明確な時期はつかめないが、弥生時代後期から古墳時代後期のものと考えられている。遺跡の内容は、今津中原遺跡や道下遺跡と共に、農業用水路として把握できる。

山北町字原窓地区（試掘調査）

商業施設建設に伴い試掘調査が実施されている。調査の結果、複数の溝状遺構や柱穴跡が検出されたが、遺構の密度は低く遺物の出土量も僅少であった。周辺の地形や堆積状況から見て、調査地全域が旧河道に当っている可能性が考えられる。

作原町字上所地区（試掘調査）

商業施設建設に伴い試掘調査が実施されている。調査の結果、溝状遺構等が検出されたが、遺構密度は低く、遺物の出土量も僅少であった。

中の池遺跡

中の池遺跡は、戦後直後に遺跡の所在が確認され、1980年代の調査では弥生時代前期の環濠集落であることが県下で初めて確認される等、著名な遺跡である。1998年以降、総合運動公園整備事業に伴って発掘調査が継続的に行われており、複数の溝状遺構が複雑に切り合って検出され、環濠を含めて居住域の維持管理が行われていたことが判明した。また、竪穴住居跡・水田跡・木植基等も検出され、遺跡の内容が明らかにされつつある。

参考文献

- 高重兼「律令制の同郡津制の成立と崩壊」『岡山史学』第18号 1966年
宮武進「田村庵寺跡」『新編丸亀市史1 自然・原始・古代・中世編』丸亀市 1995年
『田村遺跡発掘調査報告書』株式会社百十四銀行城西支店建設に伴う丸亀市田村町所在の古代寺院跡の調査』丸亀市教育委員会ほか 2002年
『岡道高松丸亀改正工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 田村遺跡』香川県教育委員会ほか 2004年
『田村遺跡Ⅰ』『祭道高松善通寺線道路改修事業及び船道西側田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 田村遺跡Ⅱ』
川島本町遺跡 川島本町南遺跡 香川県教育委員会 2007年
『岡道高松丸亀改正緊急地方整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 箔下遺跡』香川県教育委員会ほか 1991年

第3章 調査の成果

第1節 調査区の概要と層序

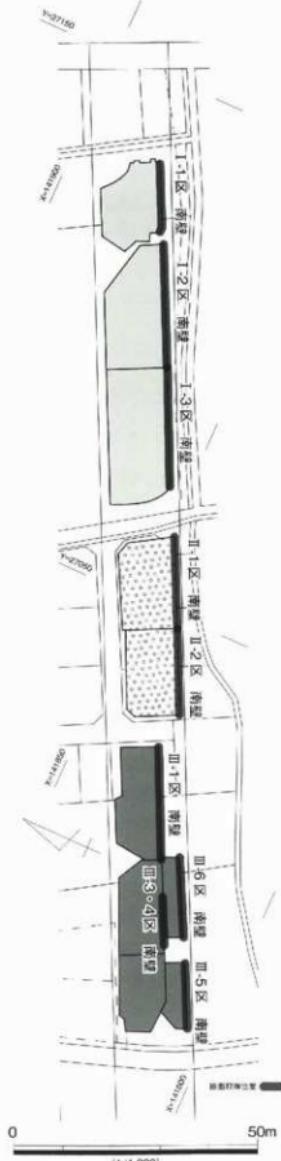
第1章にも記したとおり、2,702m²の調査地を10の区画に細分した。第4図に示すとおり、全体をI～III区の大区に分け、それを東から1, 2と小区を付し、I-1区、I-2区等のように呼称した。整理作業に際して大区毎に遺構番号を整理し、I区S P 01、III区S P 01等のように呼称することとした。また、柱穴跡(S P)は、竪穴住居跡に係るものや掘立柱建物跡に係るものも、すべて大区毎に連番を付した。

次に、津森住跡の土層の状況を説明する。

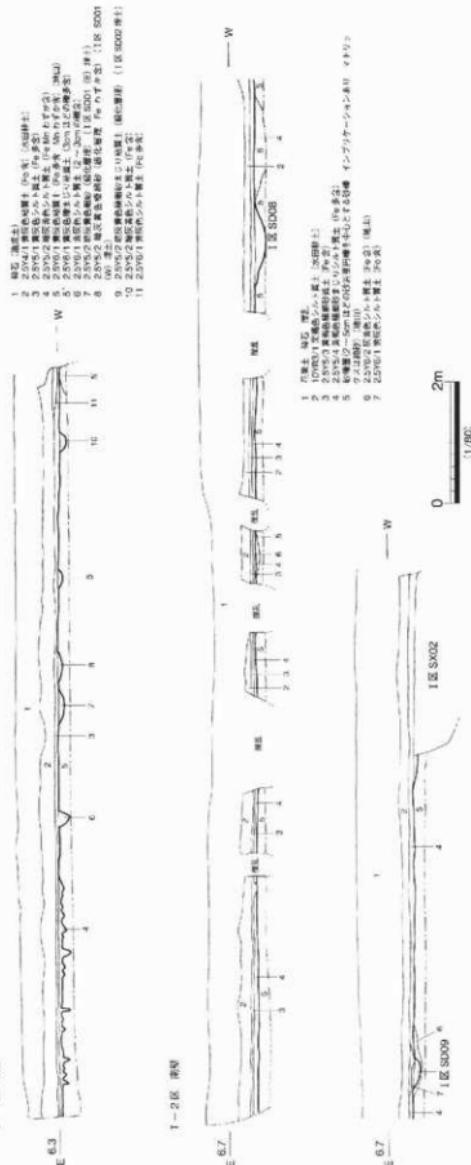
調査着手前は、宅地として土地利用されており、調査区全体が花崗土や碎石、搅乱された土で造成され、その下に以前の水田耕作土層が遺存していた。地表面の標高は、I区で7.0～7.2m、II区で約7.0m、III区で6.6～6.8m、水田耕作土層下端の標高は、I区で約6.4m、III区で約6.1mを測り、東から西に向かって緩く下っている。

かつての水田耕作土の下には、床土や旧水田耕作土と考えられる土層が薄く堆積し、ほとんどの地点でその下に地山が現れる。遺物包含層が堆積していたのは、I区S X 01以北の狭い範囲とIII区の中央付近のみで、10cm内外の厚さである。

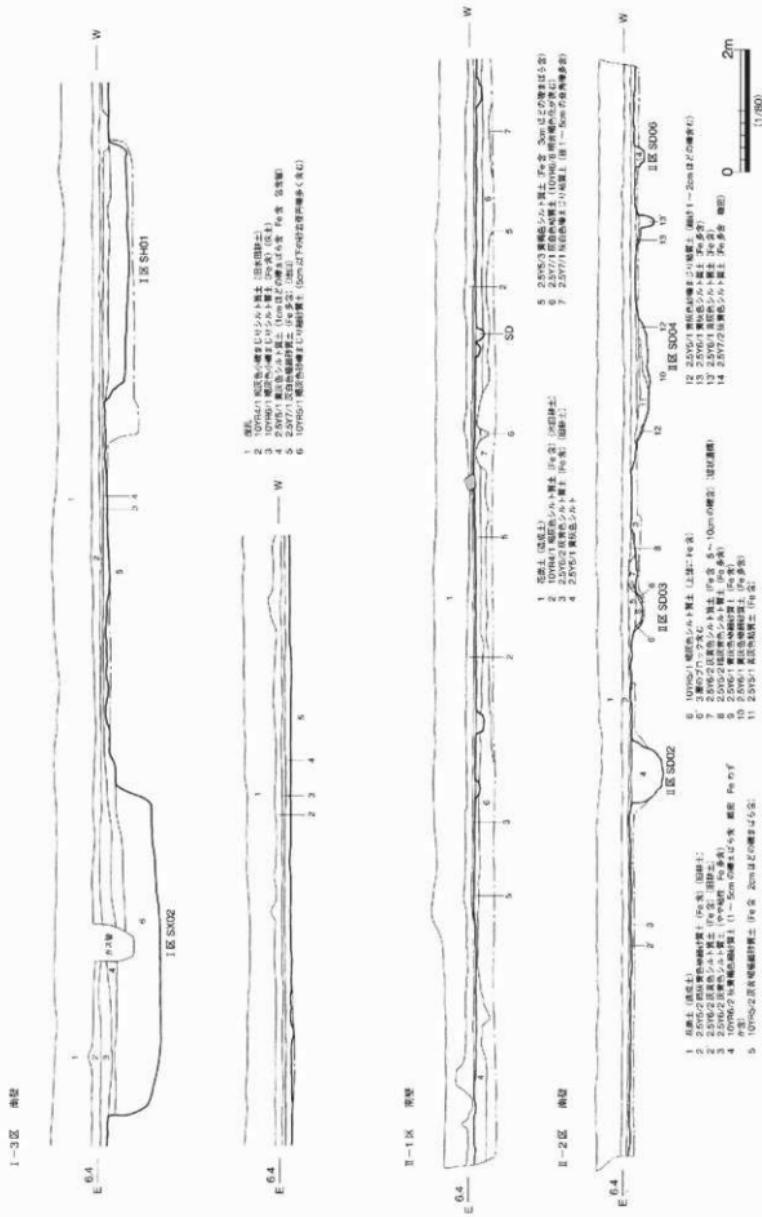
地山は、2～5cmの砂岩円礫を中心とする砂礫層が波状に堆積する上面に、灰白色や黄灰色のシルト質土や粘質土が堆積するものである。調査区の所々で遺構面が砂礫層となるが、III区西南部の砂礫層は地下水位が高く、湧水が見られた。この堆積層は、土器川扇状地の構成層で更新世のものと推定される。



第8図 調査区土層断面取得位置図

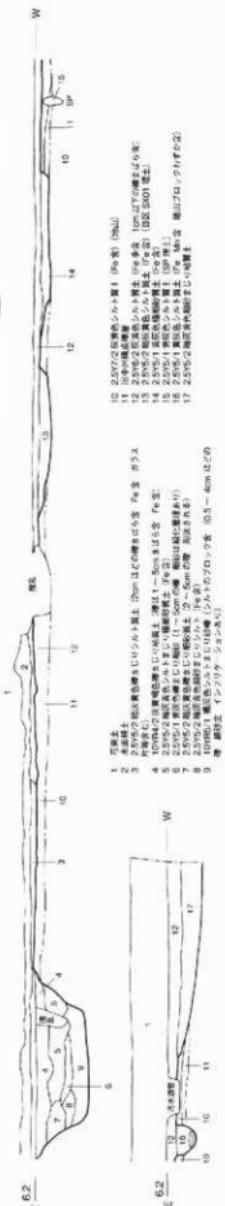


第9圖 土層斷面圖(1)



第10図 土層断面図(2)

商報



前序 - 34 頁



卷之三



四百



第11回 + 判斷而圖 (3)

第2節 I区の調査成果

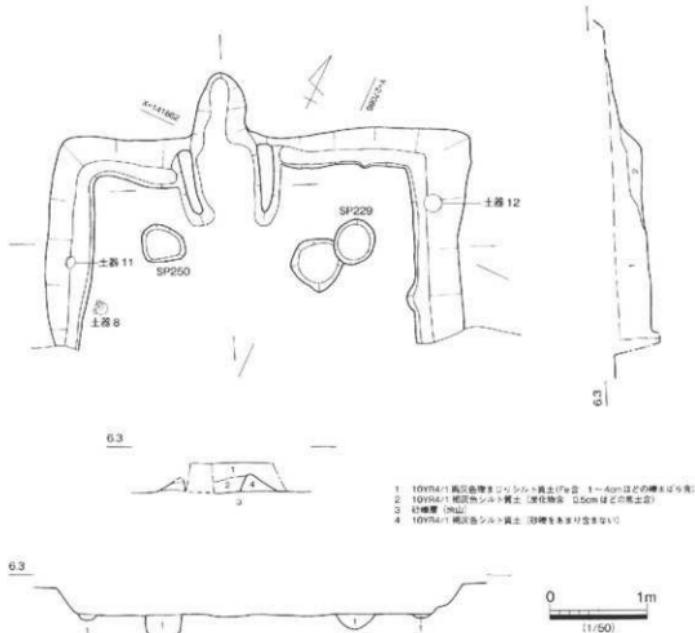
津森位遺跡は、巨視的に東半分に古代の集落、西半分に中世後半期の集落を検出した。古代の集落は、堅穴住居跡1棟、復原できた掘立柱建物跡17余、溝状遺構等からなる。出土遺物から8~10世紀にかけての時期幅をもったものと考えられる。西半分の中世後半期の集落は、形のはっきりとしない多数の柱穴跡が密集する状況である。30棟弱の掘立柱建物跡を復原したが、小規模な建物が多いことが特徴である。

以下、調査成果をI、II、III区に分けて遺構の種類順に報告することとする。なお、柱穴跡出土の遺物については、図化可能と判断したものはすべて図化している。

I区 SH01

方形の堅穴住居跡で、北半分を検出した。コーナーは隅丸ではなく、ほぼ直角に屈曲する平面形態である。北辺長約4.2m、検出面からの深さ約0.3mの規模で、南北軸は座標北から約26度西偏する。この方向は、周辺に広がる条里型地割の方向と概ね合致している。

壁面は、約55度の角度をもって掘り込まれ、幅約20、深さ約5cmの壁溝が巡る。北辺中央のやや西寄りに造り付けの竈を設けている。竈はシルト質土で構築され、表面の赤変等の使用痕跡は明瞭でない。



第12図 I区 SH01 平・断面図

竈内部には、炭化物や焦土片を包含するシルト質土が堆積していた。I 区 S 229 と 250 は主柱穴跡と考えられる。いずれも直径 40、深さ約 20cm の規模である。なお、貼床やベッド状遺構は認められなかった。

第 13 図は、S H 01 から出土した遺物の実測図である。1～5 が埋土から出土したもの、6～13 は床面上で検出したものである。

1 は須恵器杯蓋の口縁部細片である。S H 01 出土の須恵器杯蓋の口縁部は、いずれも全体が内湾する弧を描き、端部は下方に短く屈曲する形態である。2 は須恵器杯で、口縁部の外傾度の大きくなる後出の要素が認められるが、細片のため径や傾きにやや曖昧な点がある。3 は土師器の三角形折曲把手の破片である。4、5 は土師器甕で、「く」の字状に外反する口縁をもつ。

6、7 は土師器皿である。6 は I 区 S 299 と床面出土の破片が接合した。外湾して立ち上がる口縁をもち、端部は丸く收めている。8 の須恵器杯蓋は完形で出土した。天井は丸みを帯びて高く、扁平な摘みを付している。口縁端部の身受けは少し摘み出す程度である。口径は 13.4cm である。9、10 も須恵器杯蓋の口縁端部の細片である。11 の須恵器杯は完形で出土した。底部から明瞭な稜をもたずに内湾して立ち上がる形態で、口縁 12～13cm、器高 4.2cm である。12 の土師器甕も完形で出土した。球状の体部から明瞭な稜をもたずに外反する口縁部をもち、口縁部内面と体部外面には粗いハケが見られる。13 は煙道部から出土した土師器甕の口縁部の細片である。

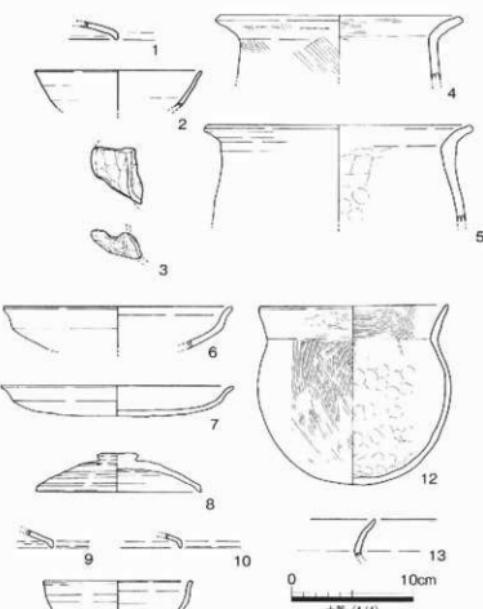
以上の出土土器から、S H 01 は 7 世紀後半期から 8 世紀前半期のものと思われる。

I 区 S B

I 区では総数 396 個の柱穴跡を検出した。埋土は 4 種類程度に分けられるが、暗灰黄色極細砂のものが明瞭に分離できる以外は、巨視的には同一と捉えられる。暗灰黄色極細砂のものは S B 16 を構成する柱穴跡で、中世のものであり、それ以外は古代に属するものと判断する。I 区の東半分では、柱穴跡は散在しており、掘立柱建物跡の復原は容易であるが、西半分は柱穴跡が集中し、13 棟が密集する状況である。以下に個々の掘立柱建物跡の内容を報告する。

I 区 S B 01

調査区東端で検出した 3×1 間以上 (3.5×1.5m 以上) の掘立柱建物跡である。一辺の柱穴跡は方



第 13 図 I 区 SH01 出土遺物実測図

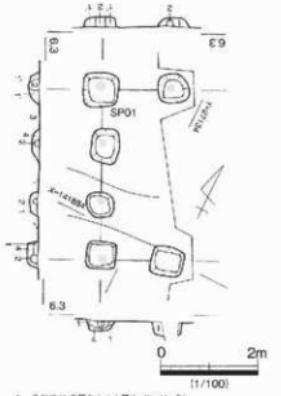
向を合わせた隅丸方形の平面で、検出した6穴のうちの5穴で柱痕を確認することができた。柱間寸法は112～117cmを測る。建物の方向は、座標北から約25度西偏している。第14図14はI区SP01から出土した須恵器杯蓋の口縁部の細片である。

I区SB02

2×3間(3.1×5.5m)の掘立柱建物跡である。一部の柱穴跡は擾乱によって壊されている。柱穴跡は不整円形もしくは不整な隅丸方形で、5穴では柱痕が確認できた。柱間寸法は166～185cmを測る。梁行の方向は、座標北から約18度西偏している。第15図15はI区SP20から出土した須恵器杯で、断面四角形のしっかりとした高台を付している。16はI区SP12の柱痕から出土した土師器甕の口縁部細片である。17は細片のため器種不明であるが、土師器鉢と考へて図化した。この他関連する柱穴跡から図化不能の須恵器、土師器片が出土している。

I区SB03

2×3間の総柱の掘立柱建物跡である。西面に小規模な柱穴跡が柱列を描えて並んでおり、庇と考えられる。平面規模は4.9×4.2m(身舎部分は3.4×4.2m)である。一部擾乱されているが、ほとんどの柱穴跡で柱痕を検出できた。柱間寸法は梁行で150～200(平均171)cm、桁行で130～150(平均145)cmを測る。柱穴跡は方向を合わせた隅丸方形のものと不整形のものが混在している。桁行の方向は、座標北から約26度西偏している。第16図18はI区SP73から出土した須恵器杯で、口縁部の外傾度が大きく、復原径は13.6cmである。19もI区SP73から出土したもので、

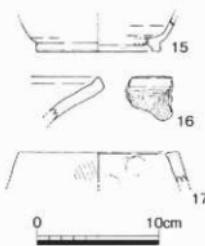
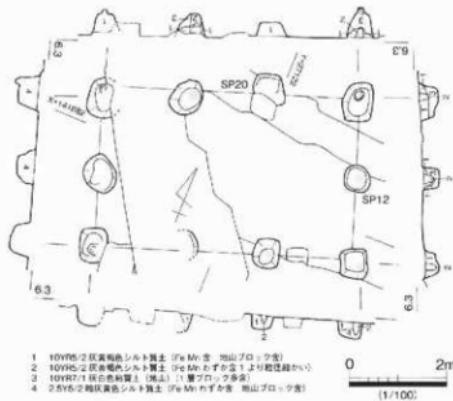


1. 2.SYS/1 黄褐色シルト質土 (Fe Mn 高) 2. 2.SYD/1 黄褐色シルト質土 (堆山プロック窓) 3. 2.SYD/1 黄褐色粘土質土 (Fe Mn 高) 4. 2.SYS/1 黄褐色シルト質土 (5cmほどの塊) (ブロック多生)



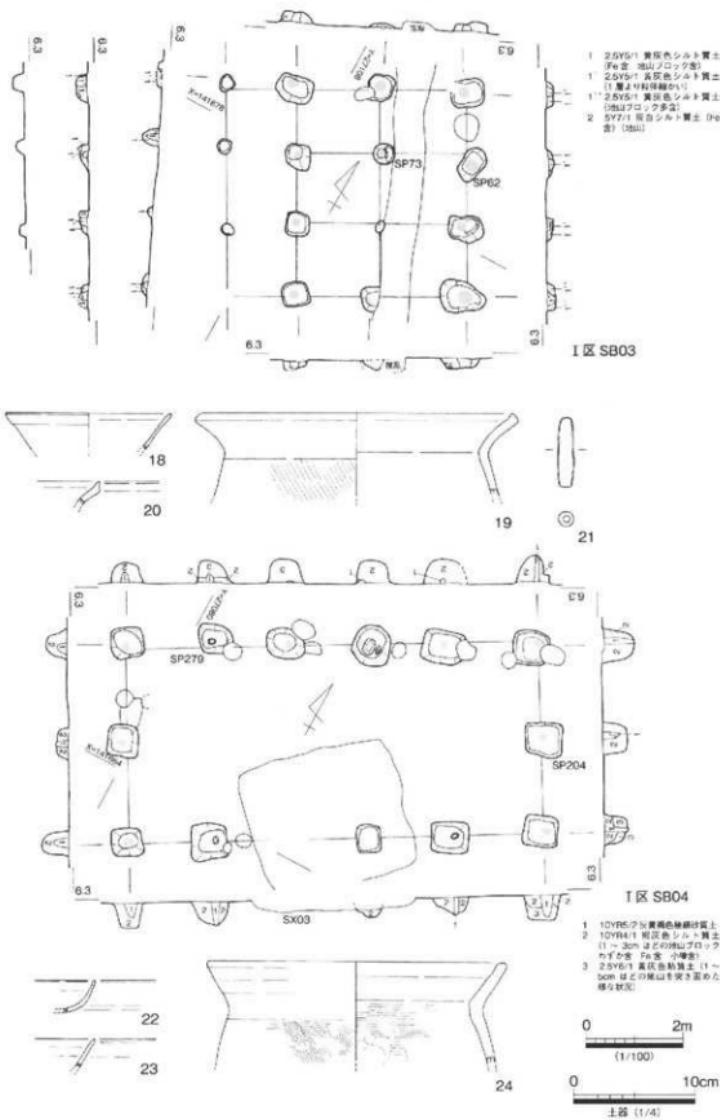
第14図 I区SB01 平・断面図

出土遺物実測図



1. 10YRS-2 桂葉模様シルト質土 (Fe Mn 高 地山プロック窓) 2. 10YRS-2 桂葉模様シルト質土 (すずか多生) 3. 10YR7-1 緑色粘土質土 (堆山) 4. 2.SYB-2 黄褐色シルト質土 (Fe Mn カスカ 堆山プロック窓)

第15図 I区SB02 平・断面図、出土遺物実測図

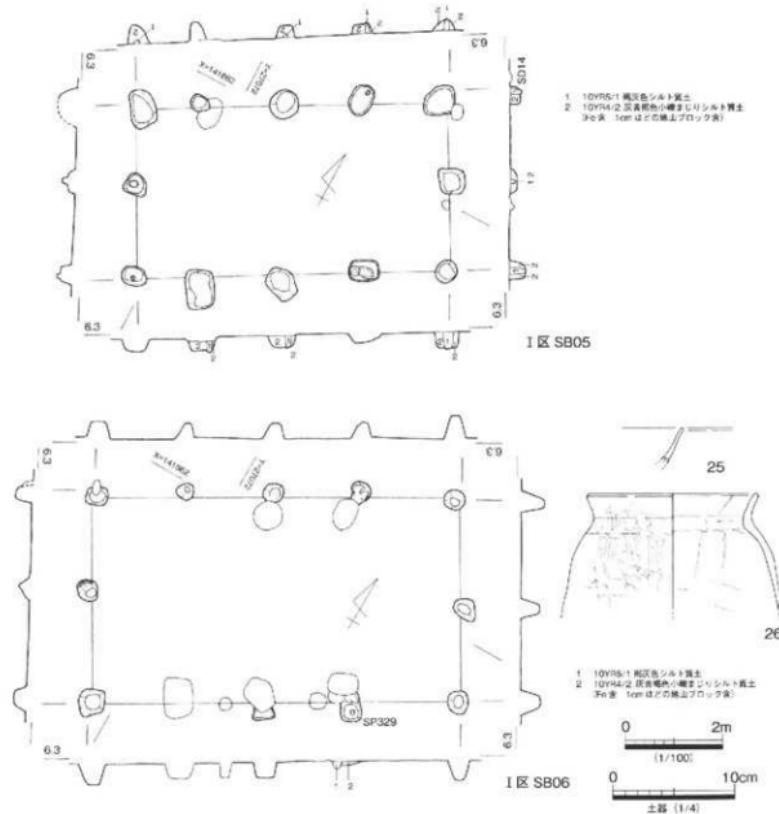


第16図 I区 SB03・04 平・断面図、出土遺物実測図

土器部の口縁部である。外面には4mm近い間隔の粗いハケが施されている。20はI区S P 81出土の土器部の口縁部、21はI区S P 62出土の管状土錠である。

I区SB 04

2×5間(4.1×8.5m)の掘立柱建物跡である。柱穴跡の規模や建物面積から、今回検出した掘立柱建物跡の中で中心的な位置を占める。I区S X 03と切り合い関係があり、I区S X 03より新しいが、両者の埋土が酷似することから、柱穴跡の一つを検出することができなかった。遺存するほとんどの柱穴跡で柱痕を検出できた。柱間寸法は150～205(平均181)cmを測る。東西面と南面の柱穴跡は方向を揃えた方形を呈するが、北面のものは不整円形もしくは不定形である。梁行の方向は、座標北から約30度西偏している。第16図22はI区S P 279、23、24はI区S P 204から出土した遺物である。22は土師器杯の細片で、精選された胎土を用い、口縁端部を内側に丸めている。23は細片であるが、須恵器杯と考えられる。24は十師器甕である。体部内外面に粗いハケが施されている。



第17図 I区 SB05・06 平・断面図、出土遺物実測図

I区SB05

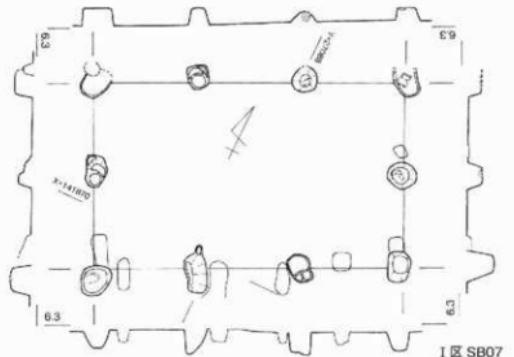
2×4間(3.6×6.5m)の掘立柱建物跡である。I区SB06より一回り小さいが、ほぼ重複しており、同一地点で建て替えられたと考えられる。切り合い関係からI区SB05が新しい。梁行の方向は座標北から約30度西偏している。図化可能な遺物は出土していない。

I区SB06

2×4間(4.3×8.8m)の掘立柱建物跡である。柱穴跡の形状は円形・隅丸方形・不定形と多様で、位置も乱れているが柱は通る。梁行の方向はI区SB05と同じで、座標北から約30度西偏している。第17図25、26は、I区SP329から出土した。25は縁飾陶器碗の口縁部で、細片であるため時期決定の指標に乏しい。硬陶であることから9世紀後半期以降の所産と考えられる。26は長柄形の体部から上方に短く屈曲する口縁をもち、形態から真蛸瓶と考える。

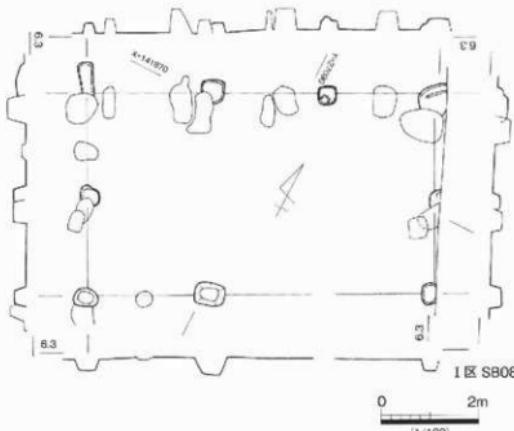
I区SB07

2×3間(4.0×6.3m)の掘立柱建物跡である。I区SB09と切り合いがあり、I区SB09より新しい。梁行の方向は座標北から約27度西偏している。複数の柱穴跡から遺物が出土しているが、内面黒色の黒色土器碗の底部細片が1点含まれる他は器種不明の土師器か須恵器の細片である。

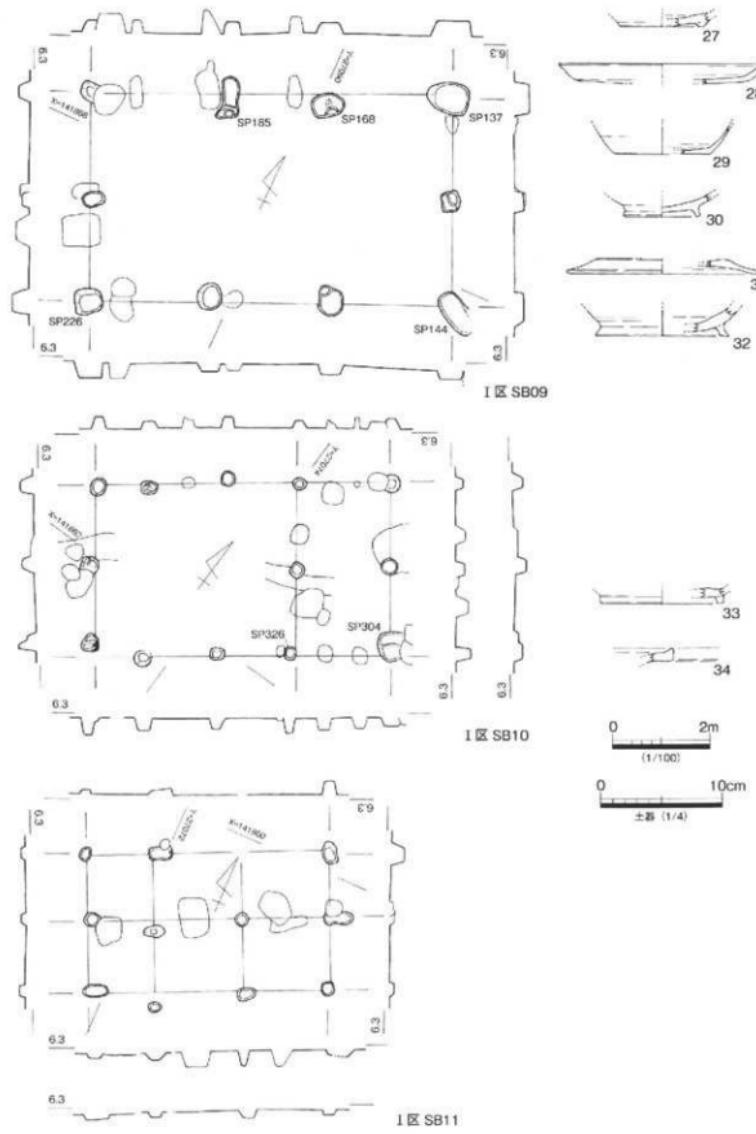


I区SB08

2×3間(4.2×7.0m)の掘立柱建物跡である。I区SB09とほぼ同じ大きさで、重複している。切り合いからI区SB08の方が古い。桁行の方向は座標北から約27度西偏している。複数の柱穴跡から遺物が出土しているが、図化できるものではなく、大半が器種不明の土師器か須恵器細片である。



第18図 I区SB07・08平・断面図



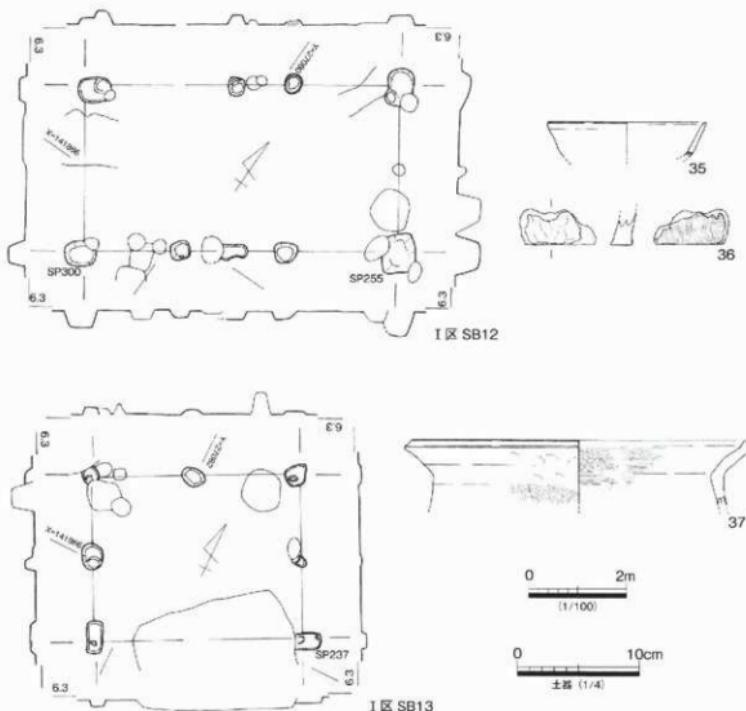
第19図 I区 SB09～11 平・断面図、出土遺物実測図

第19図はI区SB 09から出土した遺物実測図である。27はI区SP 226から出土した土師器椀の底部と思われる破片で、段面U字形の高台を付している。椀としたが、胎土に小穂を疊らに含んでおり、器壁も厚いことから異なる器種の可能性がある。28は土師器皿、29は須恵器杯で、ともにI区SP 137から出土した。30はI区SP 144から出土した内黒の黒色土器椀で、外方に踏ん張る高い高台を付している。31はI区SP 185から出土した須恵器の杯蓋で、平坦な頂部から屈曲して口縁に至る。口縁端部に身受けはなく、内面に1条の沈線が巡っている。32はI区SP 168から出土した須恵器壺の底部である。

I区SB 09の年代は、出土遺物に9世紀前半期から10世紀前半代の時期幅があるようであるが、時期の新しい遺物から9世紀後半期から10世紀前半期のものと考えられる。

I区SB 10

2×4 間 (3.5×6.0 m) の掘立柱建物跡である。桁行の方向は座標北から約37度西偏しており、I区の掘立柱建物跡の中では、I区SB 12とともに方向を違えている。I区SB 10は柱穴跡の直径が約34cmであり、他の掘立柱建物跡よりも柱穴跡が小さい傾向が認められる。また、東から2間目の梁行の



第20図 I区SB12・13 平・断面図、出土遺物実測図

中央にも柱穴跡がある。第19図はI区S P 304と326から出土した遺物である。33は須恵器杯、34は土師器壺である。

I区SB 11

2×3間(2.9×4.7m)の掘立柱建物跡である。やや柱の通りは歪むが、総柱建物に復原できる。I区SB 10と同様に柱穴跡の大きさが約33cmと小さい。また、柱穴跡埋土は黄灰色板細砂質土のものが卓越しており、この点でもI区SB 10と共通する。桁行の方向は座標北より約26度西偏している。

I区SB 12

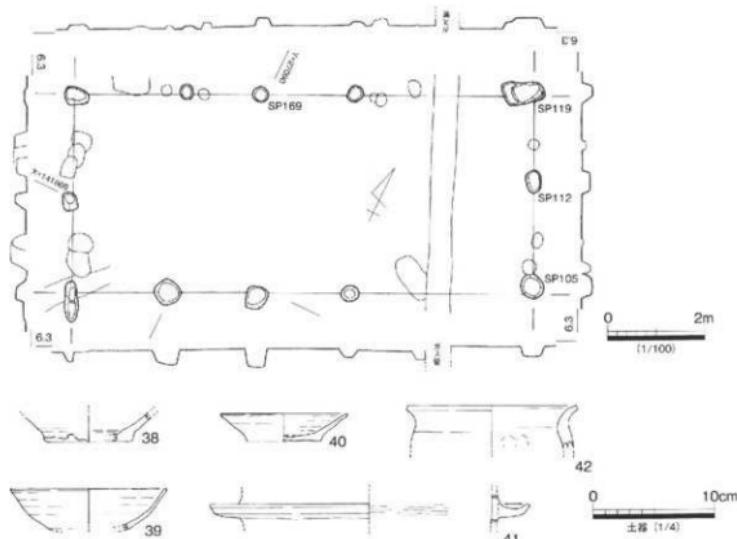
1×4間(3.3×6.4m)の掘立柱建物跡である。東側の梁行の中央部にある柱穴跡を採用すれば2間となるが、西側では検出していないため不明である。梁行の方向は座標北より約35度西偏しており、I区SB 10と共に通する。I区SB 10とは約1mしか離れていないが、同時に存在していたと考えられる。35は須恵器杯で、復原径は12.8cmである。I区S P 255から出土した。36はI区S P 300から出土した移動式竈である。底部と考えたが、細片のため部位は不明である。

I区SB 13

2×2間(3.4×4.4m)の掘立柱建物跡である。南辺の一穴はI区SX 03に塗されている。I区の掘立柱建物跡は、梁行1に対し桁行2程度の平面形のものが多いが、I区SB 13はやや特異な平面形である。建物方向は座標北から約28度西偏する。I区S P 237から土師器壺の口縁部の細片が出土している。

I区SB 14

2×4間の掘立柱建物跡である。桁行で柱穴跡が存在しそうな位置に擾乱が入っているため、本来は5間であった可能性がある。4.1×9.4mの規模で、I区検出の掘立柱建物跡の中では最大の床面積で



第21図 I区SB14 平・断面図、出土遺物実測図

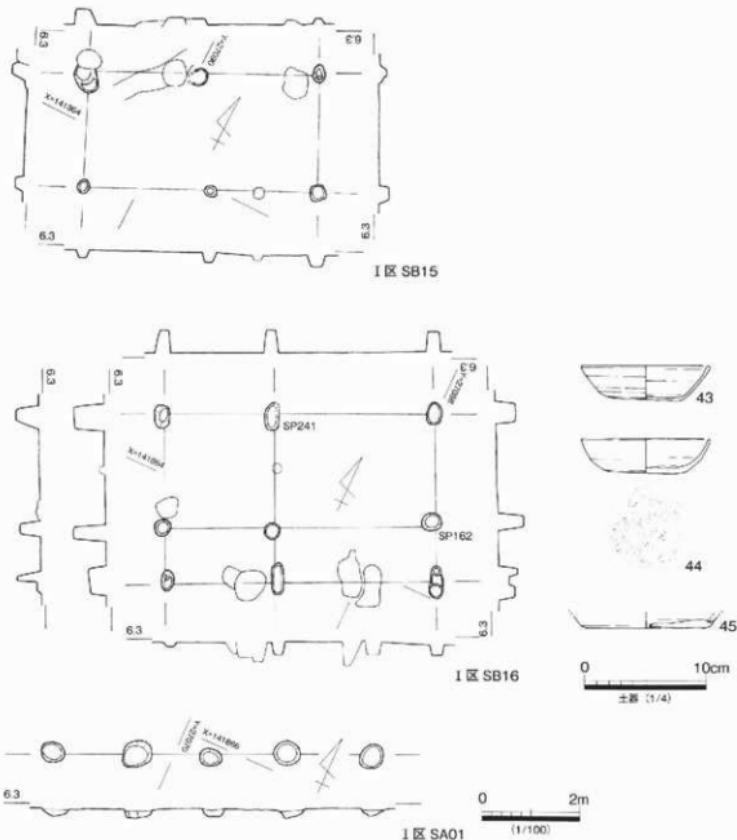
ある。I区S P 169（遺物番号38、39）、119（40）、105（41）、112（42）から出土した遺物を図化した。38～40は土師器杯である。38、40は円盤状の底部から斜め上方に直線的に延びる体部をもつ。41は土師器土釜の鋸部で、鋸先端を上方に摘み出している。42は真蛸壺と考えられる。

I区SB15

1×2間（2.4×4.8m）の掘立柱建物跡である。梁行の方向は座標北から約25度西偏する。I区S B 15は、遺物細片は出土しているが、時期を決める手がかりに乏しい。

I区SB16

2×2間（3.5×5.5m）の掘立柱建物跡である。梁行を3等分したうちの南側に柱穴跡があり、何らかの内部施設を反映したものと考えられる。I区S B 16のみ、他とは明瞭に異なる埋土（25Y5/2



第22図 I区 SB15・16, I区 SA01 平・断面図, 出土遺物実測図

暗灰黄色極細砂)であり区別できる。渠行の方向は、座標北から約25度西偏する。43、44はI区SP 241から出土した土師質土器杯である。43が8分の5、44が8分の7程度遺存している。45は須恵器皿で、焼成不良である。出土遺物から、I区SB 16は他の掘立柱建物跡に比べ、明らかに後出で、中世のものである。

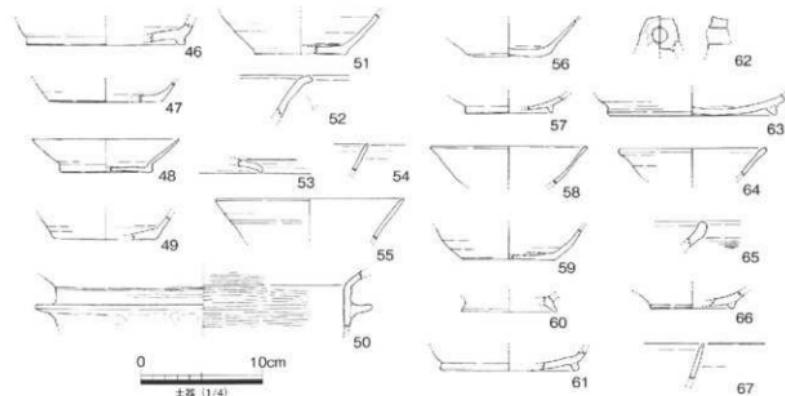
I区SA 01

5穴からなる横列跡である。長さから見て、調査区外となる北側に柱穴跡列があり、掘立柱建物跡となる可能性が高い。横列跡の方向は、座標北から約65度東偏する方向で、周囲の掘立柱建物跡の多くと同方向である。

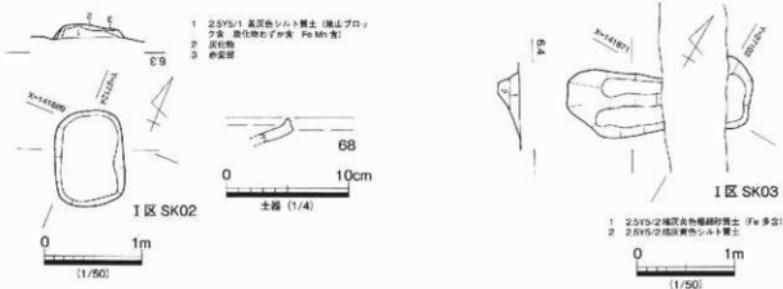
I区その他のSP

第23図は、I区のその他の柱穴跡から出土した遺物の実測図である。

46はI区SP 08出土の須恵器杯の高台部の破片、47はI区SP 19出土の土師器杯である。48はI区SP 26出土の土師器杯で、円盤状の底部から垂直に立ち上がり、屈曲して外上方にのびる体部をもつ。49はI区SP 32出土の須恵器杯、50はI区SP 36出土の土師器上釜である。50の口縁部先端は欠損するが、外上方に屈曲し、内面に2mm幅の粗いハケが施されている。51、52はI区SP 42から出土した。51は須恵器杯、52は細片であるが、土師器壺の口縁部と考えられる。53、54はI区SP 54から出土した。53は須恵器杯蓋の口縁部、54は須恵器杯の口縁部である。54は細片のため傾きは正確でない。55～59はI区SP 104から出土した。I区SP 104には数個体分の供膳具片が含まれていた。55、56は土師器杯で、56の底部は凹凸が目立っている。57は薄手のつくりの内黒の黑色土器碗で、摩滅しているために細部調整は不明である。58は須恵器杯で、口縁部下の強い回転ナデのため、やや外反気味の口縁である。59は焼成不良の須恵器杯で、平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がってい。60はI区SP 120出土の内黒の黑色土器碗の高台部の細片で、ハ字状に外側に踏ん張る高台である。61はI区SP 196出土の須恵器杯の高台部、62はI区SP 203出土の飯蛸壺の吊り手部の破片である。62の頂部は棒状工具で窪ませており、穿孔の方向は明瞭である。63はI区SP 214出土の土師器皿、64はI区SP 257出土の土師器杯、65はI区SP 299出土の外面上に波状文の見られる須恵器壺の口縁部の破片、66はI区SP 322出土の土師器碗、67はI区SP 357出土の須恵器壺の口縁部の破片である。



第23図 I区その他のSP出土遺物実測図



第24図 I区 SK02・03 平・断面図、出土遺物実測図

I区の掘立柱建物跡及び柱穴跡の年代

I区の掘立柱建物跡及び柱穴跡から出土した遺物は、以上のように7世紀後半代から10世紀代にかけてのものと考えられる。量的には9世紀代から10世紀代にかけてと考えられる遺物が主体である。また、柱穴跡の埋土に大きな質的差異が認められないことから、7世紀後半代から8世紀にかけての遺物は混入した可能性があり、柱穴跡の年代は9世紀代から10世紀代のものと考えられる。なお、I区の掘立柱建物跡の時期差については、建物方向や柱穴規模は参考にならず、柱穴の切り合い関係と出土遺物及び建物の重複関係から推定した。詳細は第4章のまとめに記述する。

I区 SK 01

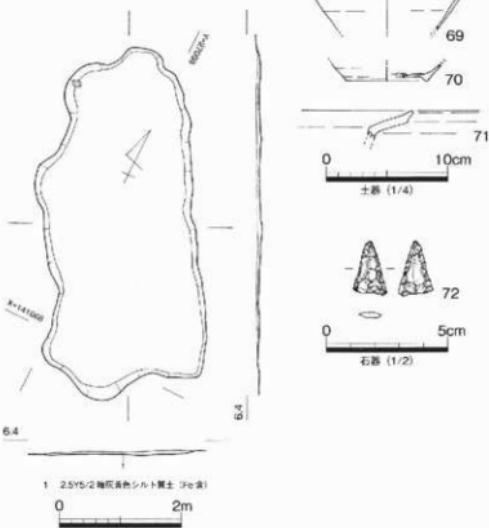
一辺約85cmの方形の土坑である。
深さは約4.9cm。時期を特定できる
遺物は出土しなかった。

I区 SK 02

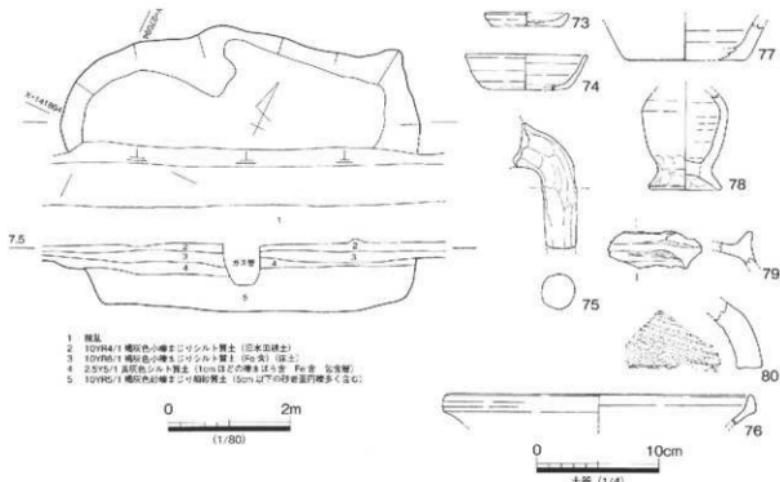
長辺約100、短辺約70、深さ約15cm、断面は皿状を呈する土坑である。
I区 SD 01 と切り合い関係があり、
I区 SD 01 より新しい。埋土は2層に分かれ、下層は炭化物が側面から底部に堆積している。底面には赤変部も見られることから、何かを焼成した土坑である。68の土師器甕の細片が出土しているが、I区 SD 01 との関係から中世前半期より新しい。

I区 SK 03

長辺約190、短辺約50、深さ約22cmの大きさで、平面形も断面形も不定形な土坑である。I区 SD 09 に



第25図 I区 SX01 平・断面図、出土遺物実測図



第26図 I区 SX02 平・断面図、出土遺物実測図

坡されており、古代もしくはそれ以前の遺構と考えられるが、遺物は出土しなかった。

I区 SX 01

長軸約5.8、短軸約2.5m、深さ約8cmの規模の不定形の落ち込みである。人為的でなく自然形成の凹地と判断される。69、70は須恵器杯、70は薄い器壁に高台を付している。71は土師器土鍋の口縁と思われ、外上方に伸る口縁で、端部を上方に摘み出している。72は平基式のサヌカイト製石鏡である。出土土器から古代の遺構である。

I区 SX 02

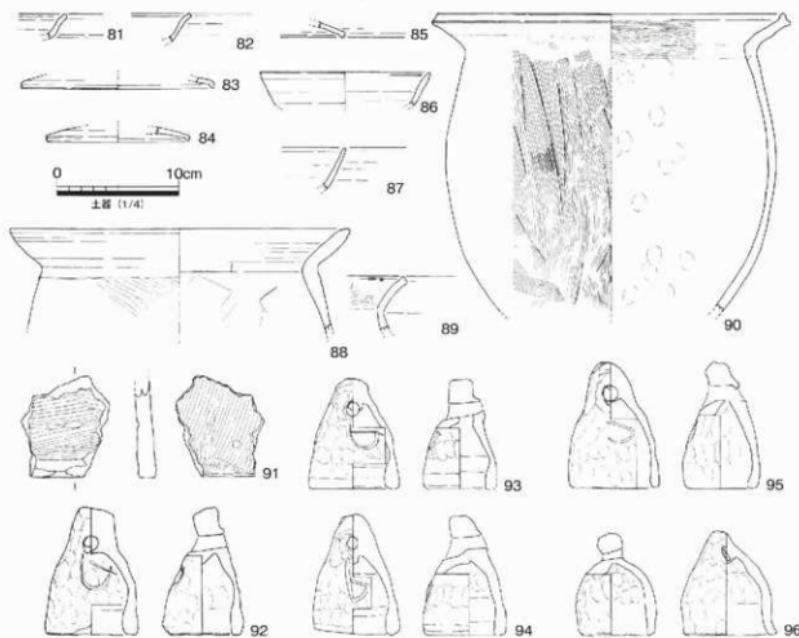
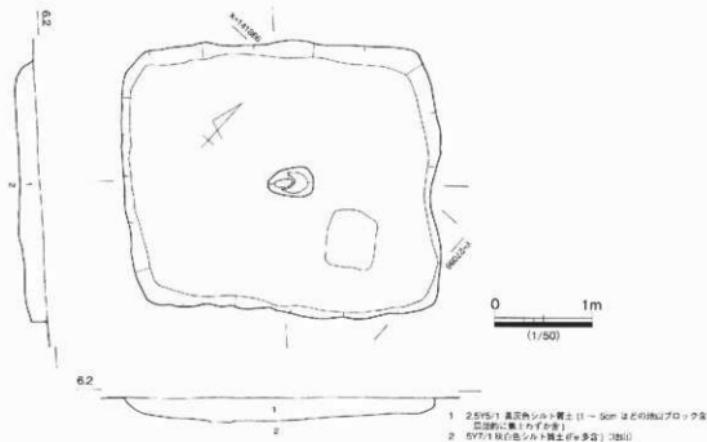
径約5.9、深さ約1.7mの落ち込みである。検出部分は半円形を呈し、南は調査区外に延びる。5cm以下の亜円礫を多く含む砂質土で埋没しており、湧水が見られた。理土中に遺物片を包含していた。73は土師質土器小皿、74は上師質上器杯、75は上師質上器上釜の脚部、76は束挿須恵器の鉢、77は須恵器壺である。78は黒褐色に焼成された素焼きの土器で、「ハ」字状の脚台の上に長胴状の胴部がつく。形態は古瀬戸の花瓶に類似する。79は移動式竈の破片、80は須恵質の丸瓦片である。

出土上器からI区 SX 02は中世の遺構である。機能については不明である。

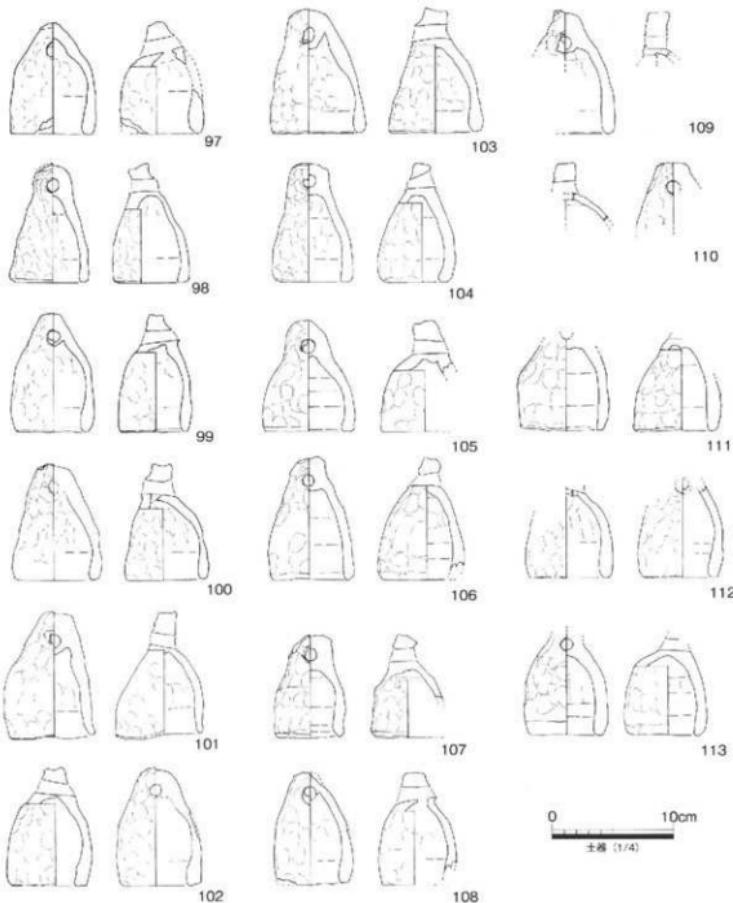
I区 SX 03

長辺約320、短辺約270、深さ約5cmの落ち込みで、断面形は底部の平らな皿状を呈する。中央部に柱穴跡状の小穴がある。I区 SB 04と切り合ひ関係があり、平面的に精査した後、I区 SB 04の柱通りに合わせて上層觀察用の畦を残し、I区 SX 03を掘削した。両者は理土が酷似しており、埋土中に含まれる地山ブロックの量から、I区 SB 04の方が新しいと判断した。

I区 SX 03からは、多量の飯蛸壺が数個ずつ固まって複数の単位となった状況で出土している。排水作業の際に、置いていた土器が動いてしまったために出土状況の圖面を掲載できないが、飯蛸壺を焼成するための施設とするよりも、繩で括って使用できる状態にあるものを保管していたと推定させる出



第27図 I区 SX03 平・断面図、出土遺物実測図



第28図 I区 SX03 出土遺物実測図

土状況である。遺構埋土に焦土をほとんど含まず、また、被熱による赤変の痕跡も見られないことも、焼成土坑でないことを示している。

第27、28図はI区SX03出土の遺物実測図である。81、82は土師器杯、83～85は須恵器杯蓋、86、87は須恵器杯、88～90は土師器甕、91は移動式竈である。これらの遺物は8世紀に所属すると考えられる。

92～113は飯蛸壺である。これらの胎土、焼成法はほぼ共通しており、同一場所で同時に製作された

ものと考えられるが、形態上の特徴は A^{6.3}

差異がある。飯蛸壺の吊り手部の上面

は、棒状の工具で窪みを成形したり、B^{6.3}

丸味をもたせたりするものがあるが、

I 区 S X 03 出土のものは、吊り手部

上面の平面形が隅九方形で窪みをつく

るもの、楕円形で窪みをつくるもの、

円形で窪みをつくらないものとバリ

エーションがある。穿孔の方向は、明

瞭であるものが大半である。また、吊

り手部と体部が明瞭に区別できるもの

と不明瞭なものが混在する。ヘラ記号

をもつものが4個体あるが、いずれも

「U」字と「U」の書き終わり付近に「—」

を記している。これらの諸要素は混在しており、グルーピングは困難である。

以上の点から I 区 S X 03 は、8世紀の遺構で、飯蛸壺を保管していた土坑と考えられる。

I 区 S D 01, 02

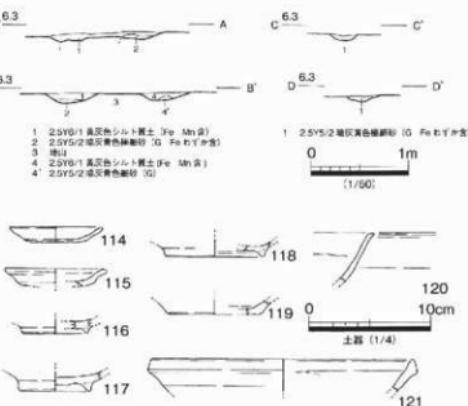
I 区の東端付近で検出した溝状遺構である。I 区 S D 01 は調査区北部から分岐して、平行する2条の溝となる。西に約1m離れて I 区 S D 02 が存在するが、埋土も類似しており、同時に存在していたと考えられる。I 区 S D 01 の東、西の流れとも幅約50、深さ約10cm、I 区 S D 02 は幅約30、深さ40cmの規模で、方向は座標北から約35度西偏する。

第29図114、115は土師質土器小皿である。115は底部から屈曲し外反する口縁をもつ。116～118は土師質土器碗の底部、119は須恵器杯の底部である。120は白磁碗である。内面に1条の沈線が巡っている。121は東播系須恵器の鉢である。以上の遺物から I 区 S D 01, 02 は 11世紀後半期から 12世紀前半期に属すると考えられる。

I 区 S D 08, 09

I 区 S D 08 は、幅約115、深さ約20cmの規模、I 区 S D 09 は、幅約40、深さ約7.5cmの規模で、座標北から約35度西偏する方向で、約3mの間隔で平行して流れている。埋土は共通するものの、出土遺物は僅少で年代を絞り込むことが難しく、土層断面においても同時性を示す根拠はない。しかし、幾何学的な意味で平行していることから同時に存在していた可能性が考えられる。なお、両溝を道路の側溝とする見方もあるが、積極的に証明する根拠も否定する根拠もない。両溝の方向は、周辺に広がる条里型地割の方向より西にわずかに傾いており、I 区の掘立柱建物跡群の中では方向が異なっていた I 区 S B 10, I 区 S B 12 と同方向である。また、復原される条里坪境から東に約37m (I 区 S D 08, 09 の中間点) 離れている。

第30図122～130は I 区 S D 08 出土の遺物実測図である。いずれも埋土中から出土した。122は土師器皿、123は土師器杯、124、125は須恵器杯蓋である。126は消極的であるが須恵器壺の口縁と考える。127はやや下方に伸びる鉗を付す上釜、128は須恵器壺の高台部と思われる破片、129は須恵器壺の体部、130は移動式竈の破片である。



第29図 I 区 SD01 断面図、出土遺物実測図

を記している。これらの諸要素は混在しており、グルーピングは困難である。

以上の点から I 区 S X 03 は、8世紀の遺構で、飯蛸壺を保管していた土坑と考えられる。

I 区 S D 01, 02

I 区の東端付近で検出した溝状遺構である。I 区 S D 01 は調査区北部から分岐して、平行する2条の溝となる。西に約1m離れて I 区 S D 02 が存在するが、埋土も類似しており、同時に存在していたと考えられる。I 区 S D 01 の東、西の流れとも幅約50、深さ約10cm、I 区 S D 02 は幅約30、深さ40cmの規模で、方向は座標北から約35度西偏する。

第29図114、115は土師質土器小皿である。115は底部から屈曲し外反する口縁をもつ。116～118は土師質土器碗の底部、119は須恵器杯の底部である。120は白磁碗である。内面に1条の沈線が巡っている。121は東播系須恵器の鉢である。以上の遺物から I 区 S D 01, 02 は 11世紀後半期から 12世紀前半期に属すると考えられる。

I 区 S D 08, 09

I 区 S D 08 は、幅約115、深さ約20cmの規模、I 区 S D 09 は、幅約40、深さ約7.5cmの規模で、座標北から約35度西偏する方向で、約3mの間隔で平行して流れている。埋土は共通するものの、出土遺物は僅少で年代を絞り込むことが難しく、土層断面においても同時性を示す根拠はない。しかし、幾何学的な意味で平行していることから同時に存在していた可能性が考えられる。なお、両溝を道路の側溝とする見方もあるが、積極的に証明する根拠も否定する根拠もない。両溝の方向は、周辺に広がる条里型地割の方向より西にわずかに傾いており、I 区の掘立柱建物跡群の中では方向が異なっていた I 区 S B 10, I 区 S B 12 と同方向である。また、復原される条里坪境から東に約37m (I 区 S D 08, 09 の中間点) 離れている。

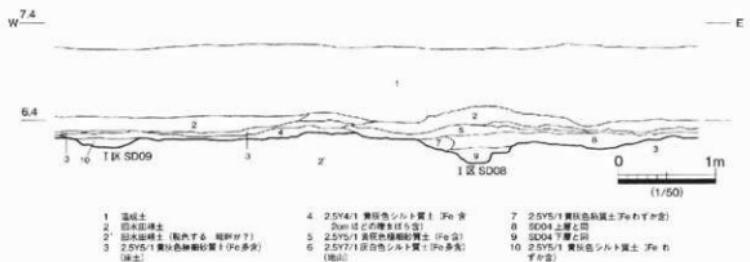
第30図122～130は I 区 S D 08 出土の遺物実測図である。いずれも埋土中から出土した。122は土師器皿、123は土師器杯、124、125は須恵器杯蓋である。126は消極的であるが須恵器壺の口縁と考える。127はやや下方に伸びる鉗を付す上釜、128は須恵器壺の高台部と思われる破片、129は須恵器壺の体部、130は移動式竈の破片である。

131～134はI区SD09出土の遺物実測図である。いずれも埋土中から出土した。131は土師器杯、132は須恵器杯蓋、133は土師器壺、134は土師器の鉢と思われる破片である。
その他のSD

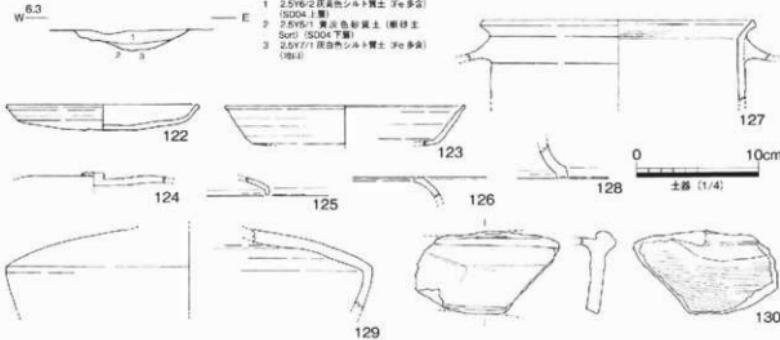
I区SD03、04は、I区東半で検出した東西方向に流れる溝状遺構である。両者には切り合い関係があり、I区SD03が新しい。

I区SD03は、幅約70、深さ約10cmの規模で、緩やかにカーブしながら流れている。出土遺物は僅少で、135の他は素焼き上器の細片4点が出土したに過ぎない。135は弥生土器壺の底部片と考えられる。今回の調査範囲では弥生上器の出土はきわめて稀である。I区SD03は、I区SB01～03、I区S

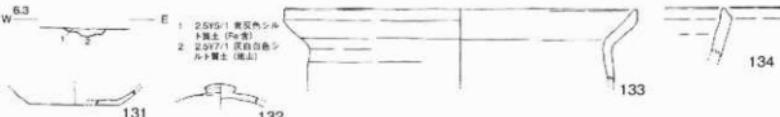
I区 調査区北壁



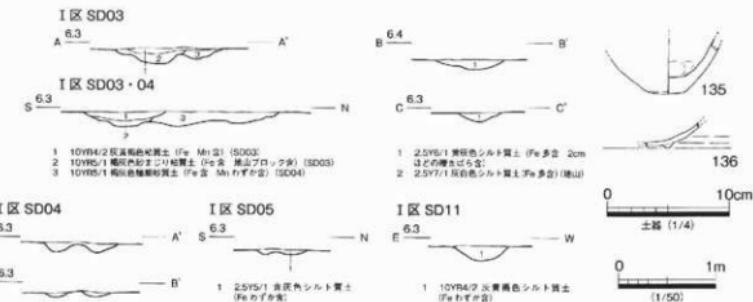
I区 SD08



I区 SD09



第30図 I区 SD08・09断面図、出土遺物実測図



第31図 I区 SD03 ~ 05 · 11 断面図、出土遺物実測図

D 08、09 より古いことは、切り合
い関係より明白であるが、I区 S
D 04 出土遺物に古代の遺物が含ま
れることから、古代の遺構と考え
られる。

I区 S D 04 は、幅約 75、深さ
約 10cm の規模で、I区 S D 03 の
北側を流れている。真ん中にコブ
のある断面形で、保存状態の悪い

地点では 2 流が平行して流れるように見える。位置関係から見ると I区 S D 05 に連続するが、I区 S D 05 の断面形は皿状のため、別遺構と把握した。I区 S D 05 は、幅約 50、深さ約 10cm の規模である。I区 S D 04 からは、固化しなかったが古代の須恵器杯と考えられる細片の他、数点の素焼き土器片が出土している。また、I区 S D 05 からは 136 の瓦質焼成の須恵器碗の細片が 1 点のみ出土している。形骸化した高台を付すもので中世の所産と考えられる。I区 S D 05 付近は上層の擾乱が及んでいる部分が多く、混入と考えられる。

I区 S D 11 は、幅約 55、深さ約 15cm の規模で、I区 S H 01 より古い遺構である。器種不明の素焼き土器の細片 5 点が出土したのみで詳細な時期はわからない。I区 S D 12 は、幅約 25、深さ約 75cm で、延長約 2.3m を検出した。素焼き土器片 1 点を出土した。I区 S D 13 と 14 は規模や埋土の様相が異なつていてために別遺構と考えたが、同一の溝である可能性も残る。I区 S D 13 からは固化していないが、外面に格子目タキ、内面に青海波文のある須恵器片の他、素焼き土器片数点が、I区 S D 14 からは素焼き土器の細片数点を検出している。

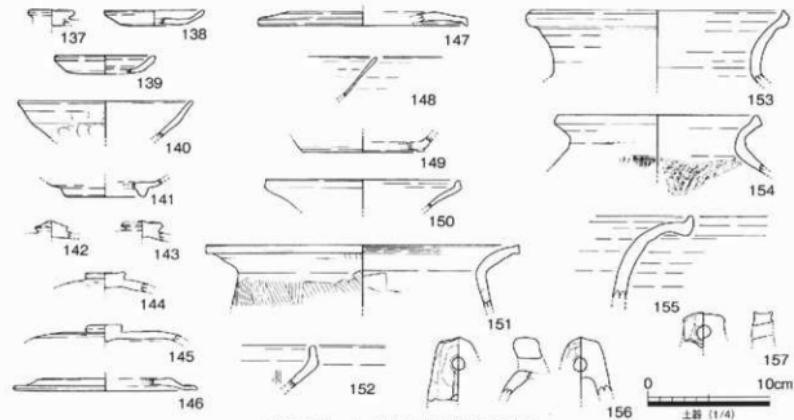
これらの溝状遺構は、埋土に共通性が見られることから同時期か近い時期の遺構と考えられ、I区 S H 01 よりそれほど古く遡らない時期の遺構と考えられる。

I区その他の出土遺物

第33図 137 ~ 157 は、機械掘削中、遺構検出作業及び清掃中に出土した遺物実測図である。137 は土師器杯蓋、140 は土師質土器杯、141 は土師質土器碗である。142 ~ 147 は須恵器杯蓋で、146 は口縁

端部に身受けがなく、内面に沈線が1条巡っている。149は土師器堺の口縁部と思われる。

以上の出土土器は、7世紀後半期頃から中世前半期のもので、I区から検出した遺構の年代観と合致している。逆に言えば、それ以外の時期の遺構・遺物は含まれていないと考えられる。



第33図 その他の出土遺物実測図

第3節 II区の調査成果

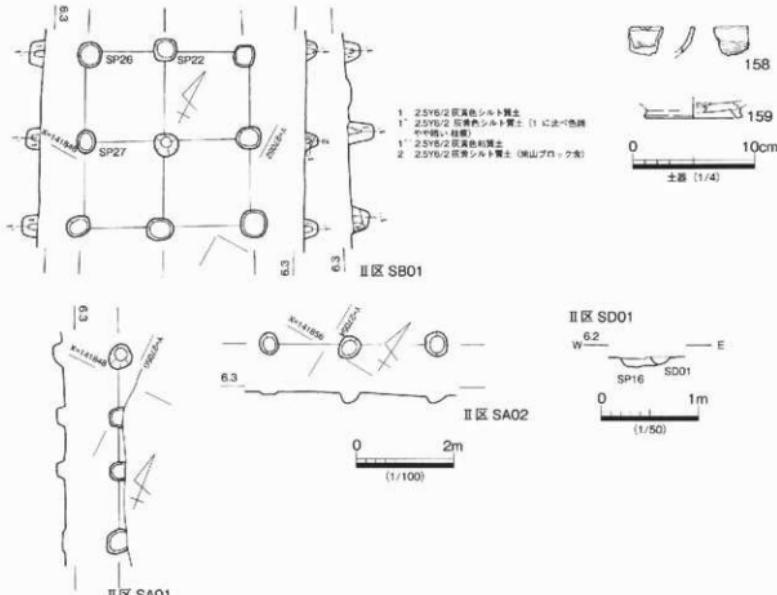
II区では、東半分で古代の掘立柱建物跡1、構列跡2、西半分で中世の溝状遺構4、柱穴跡等を検出した。東半分は削平を受けていると考えられ、構列跡等の柱穴跡の深さは浅く、本来は掘立柱建物跡を構成する柱穴跡が、構列跡状に遺存しているものと考えられる。西半分ではII区SD04より西側に柱穴跡が見られ、II区SD04がIII区を中心に検出した中世集落の東限となっている。

II区SB01

2×2 間(3.6×3.4 m)の総柱の掘立柱建物跡である。建物跡の方向は座標北から約30度西偏している。柱穴跡の平面形は隅丸方形か円形で、すべての柱穴跡で柱痕を確認でき、柱間寸法は東西が $145 \sim 180$ (平均 167)cm、南北が $165 \sim 190$ (平均 179)cmを測る。158はII区SP12から出土した土師器杯で、赤色顔料が塗布され、内面に放射暗文が認められる。159はII区SP22から出土した須恵器壺の底部片である。II区SB01は放射暗文が施された土師器杯が出土していることから、I区の掘立柱建物跡群よりも先行する可能性がある。

II区SA01

4つの柱穴跡からなる延長約3.8mの構列跡である。座標北から約30度西偏する。II区SD01と切り合いがあり、II区SD01より古い。遺存状況は悪く、南端の柱穴跡は約5cmの深さである。II区SB01との前後関係は不明である。II区SA01の東側には、柱穴跡埋土と同じで、遺構とは認識できない程の浅い不定形の落ち込みが複数あり、柱穴跡の痕跡であった可能性がある。このことから、II区S



第34図 II区 SB01, SA01・02, SD01 平・断面図、出土遺物実測図

A 01は、本来は掘立柱建物跡に伴うものである可能性が高い。時期を特定できる遺物は出土しなかった。

II区S A 02

3つの柱穴跡からなる延長約3.4mの柵列跡である。座標西から約25度南偏する。II区S A 01と同じ理由から、本来は掘立柱建物跡に伴うものである可能性が高い。時期を特定できる遺物は出土しなかった。

II区その他の柱穴

後述するII区S D 04より西側には多数の柱穴跡が検出され、III区の柱穴跡群につながっている。これらは、埋土の共通性と出土遺物から中世の所産と考えられる。II区の柱穴跡群には、掘立柱建物跡を復原し得る柱の並びは認められない。

第35図160はII区S P 44から出土した土師質土器杯、161はII区S P 61から出土した白磁碗である。161は、内湾して立ち上がる体部から外湾する口縁をもつことから、横田賢次郎、森田勉幅年のV-2類に当ると考えられる。

II区S D 02~04

座標北から約30度西偏する方向に直線に流れる溝状遺構である。見かけ上平行しているが、II区S D 02は古代、II区S D 03と04は中世のものである。

II区S D 02は、幅約1、深さ約0.55mの規模で、断面形は半球状を呈する。埋土中に5cm以下の縁を含むのが特徴である。出土遺物は僅少で、図化した2点のはかは須恵器窓の体部（外側はタキ後ハケ、内側は青海波文）が出土したに過ぎない。第35図162は土師器の細片で、口縁部上面を強くナデて端部を摘み上げて終わらせていることから、高杯の口縁部と考えられる。163は須恵器杯とした。復原径は13.8cmであるが、細片のため不正確である。出土遺物が僅少であることから、II区S D 02の年代を確定することは困難であるが、8世紀を中心とする古代のものと考えられる。

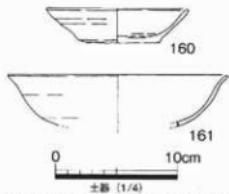
II区S D 03は、幅約0.75、深さ約0.15mの規模で、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は1層である。第36図164~172はII区S D 03出土の遺物実測図である。II区S D 03からは、28%入りコンテナ4分の1箱の遺物が出土している。

164は土師質土器小皿、165~167は土師質土器土釜の口縁部、168は土師質土器土釜の脚部、169~171は土師土器土鍋の口縁部、172は土師質土器鉢の口縁部である。

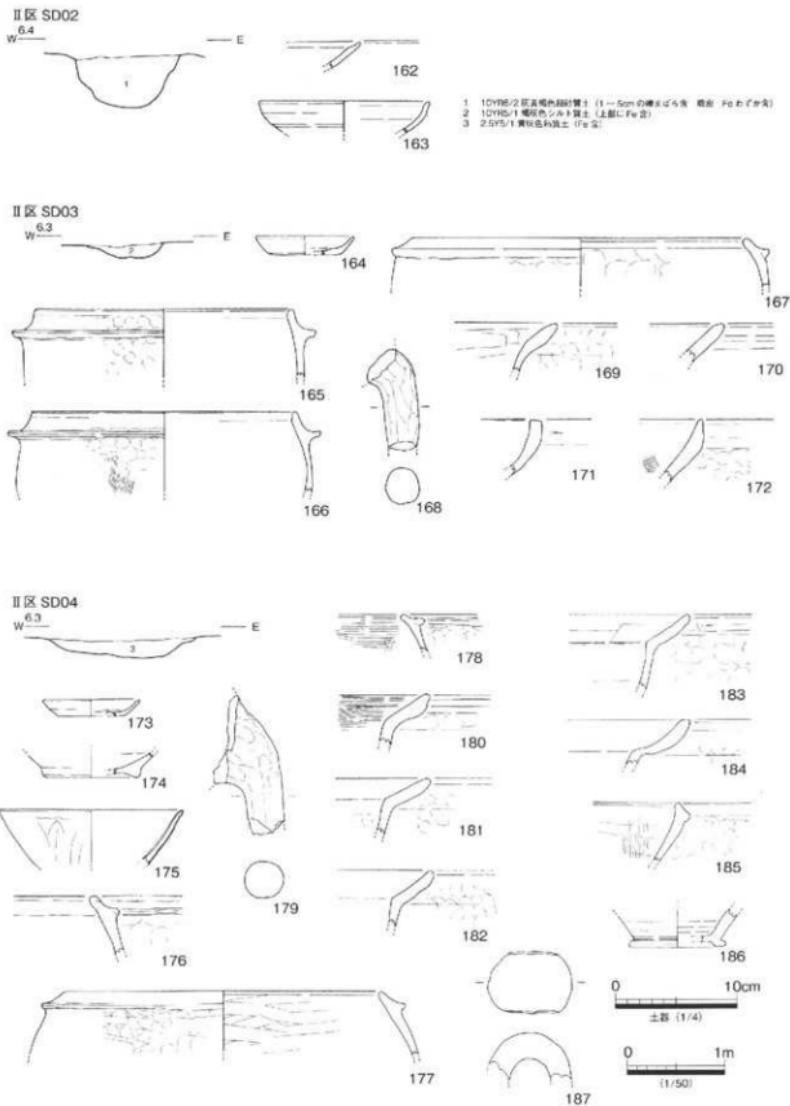
II区S D 04は、幅約1.5、深さ約0.2mの規模で、断面形は浅い皿状を呈する。調査区南壁の断面図では、掘り直しが認められるが（第9図）、大半は1層の埋土である。溝底を中心に28%入りコンテナ4分の1箱の遺物が出土している。第36図173~187はII区S D 04出土の遺物実測図である。

173は土師質土器小皿、174は白磁碗である。174の胎土には黒色粒が含まれ、全面の釉がかけられている。内面に1条の沈線が巡っている。以上の様態は横田賢次郎、森田勉氏の分類によるIV-1類に該当するとと思われる。175は青磁碗で、外面に錦運舟が刻されている。胎土は灰白色を呈し、厚く釉がかけられている。以上の様態は、横田賢次郎、森田勉氏の分類による龍泉窯系青磁碗I-5b類に当たる。176~178は土師質土器土釜の口縁部、179は脚部、181~184は土師質土器土鍋の口縁部である。185は土師質土器すり鉢、186は須恵器壺の底部、187は土鍤である。

以上の出土土器から、II区S D 03と04には大きな時期差は認められず、13世紀中頃から14世紀の



第35図 その他のII区SP出土
遺物実測図



第36図 II区 SD02～04 出土遺物実測図

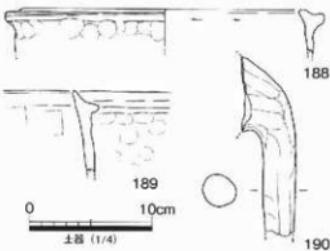
遺構と考えられる。なお、II区SD 02～04は、復原される条里型地割の坪界線からII区SD 02が西に約28m、03が西に約31m、04が西に約35mの位置にある。

II区堤状遺構

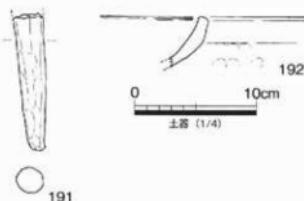
II区SD 03の西側に接して、幅約0.4mの範囲に疊が集中する個所が見られる。II区SD 03東側やII区SD 02、04には見られない。疊の集中範囲は図化できるほど明瞭ではなく、また、当時の遺構面との関係が明瞭でないので確かなことは不明であるが、付近の砂礫を盛り上げた堤状の遺構の痕跡の可能性が考えられる(第9図II-2区南壁断面図の7層及び図版16)。第37図188～190は疊層に接して出土した土師質土器土釜である。

その他の遺構・遺物

この他、II区SD 05は、II区SD 04から派生する幅約30、深さ約57cmの溝状遺構である。II区SD 04とは切り合い関係はない。II区SD 06は幅約40、深さ約49cmの溝状遺構である。また、第38図191、192はII区西半分の機械掘削中に採集したものである。



第37図 II区堤状遺構 遺物実測図



第38図 機械掘削 出土遺物実測図

第4節 III区の調査成果

III区には柱穴跡が多数検出され、総数は883個に及ぶ。埋土は2種類に分けられるが、巨視的には同一と把握される。不整な平面形をしているものが多いのが特徴である。掘立柱建物跡の復原作業を行った結果、29棟の建物を復原した。これらは床面積が平均4.5m²の小規模な建物が多いことが特徴である。出土遺物から、III区の集落跡は14世紀後半期から15世紀前半期にかけてのものと考えられる。

III区SB 01～29

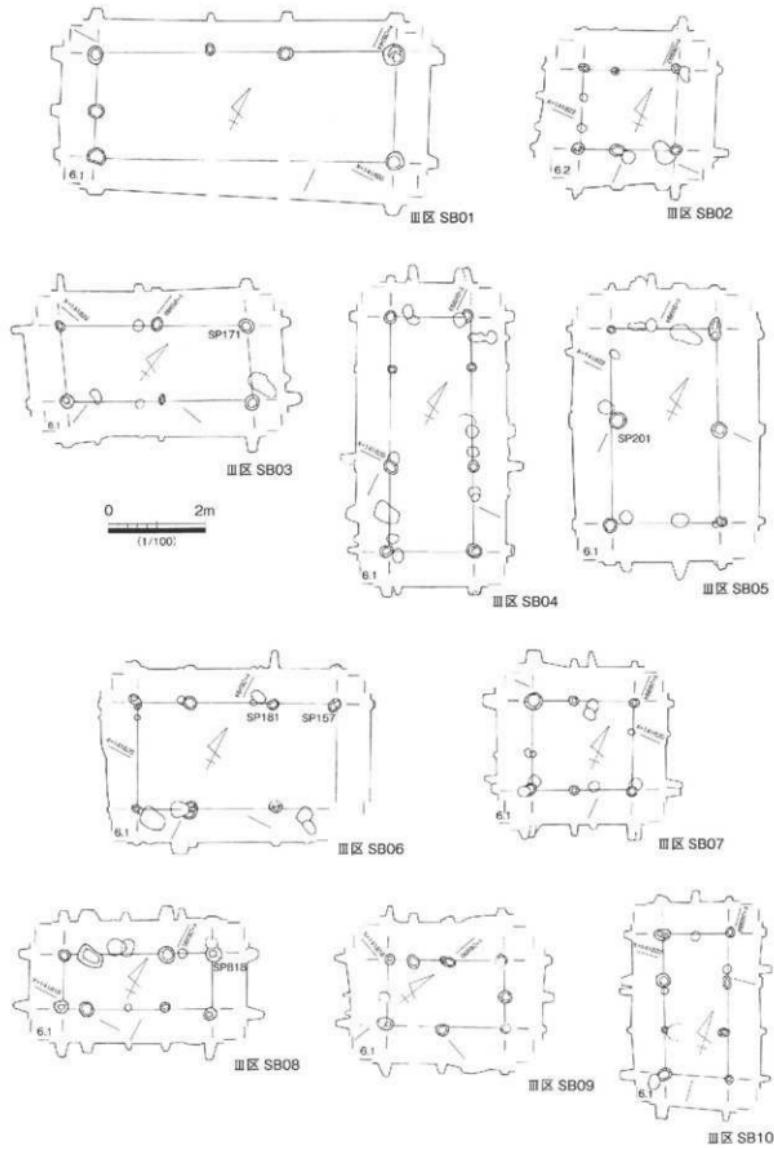
検出された柱穴跡の並びから掘立柱建物跡を復原した結果、29棟の建物跡を復原した。なお、建物跡は1×1間のものは、多少歪んだものまで許容すると多数にのぼるため除外し、1×2間以上の規模をもつものに限定した。したがって、実際はこれより多数の建物が存在していたと考えられる。III区SB 01～29の内容については、第1表及び第39～41図にまとめる。

第42図は、III区SB 01～29に関連する柱穴跡から出土した遺物の実測図である。193はIII区SB 03のS P 171出土の土師質土器杯、194はIII区SB 05のS P 201出土の土錘、195～197はIII区SB 06関連で、195はS P 157出土の土師質土器小皿、196はS P 181出土の土師質土器土鍋、197はS P 157出土の土師質土器釜の脚部、198はIII区SB 08のS P 818出土の土師質土器上釜の脚部である。199、200はIII区SB 11関連で、ともにS P 441から出土した。199は土師質土器小皿、200は青磁碗である。200は灰白色の胎土で、高台内部の体部外面部分の釉を掻き取っている。見込みに花文様がスタンプされており、横田賢次郎、森田勉氏分類による龍泉窯青磁碗I-5c類に相当する。201はIII区SB 12のS P 430出土の土師質土器杯、202はIII区SB 13のS P 434出土の土師質土器杯、203はIII区SB 14のS P 405出土の備前焼壺の底部、204～206はIII区SB 15関連で、204はS P 453出土の土師質土器小皿、205はS P 412出土の青磁碗、206はS P 453出土の土師質土器土釜である。205はにぶい橙(5YR7/4)の胎土で、外面に鎬運びが刻されている。207はIII区SB 16関連のS P 526出土の土師質土器小皿、208はIII区SB 17関連のS P 544出土の土師質土器上釜の口縁部、209はIII区SB 20関連のS P 512出土の土師質土器杯、210はIII区SB 23関連のS P 671出土の土師質土器小皿、211はIII区SB 24関連のS P 697出土の須恵器の底部である。211は断面三角形の高台を付している。小片のため復原径は不正確であるが、碗と判断される。212～215はIII区SB 28関連の出土遺物で、212、215がS P 657、213、214がS P 674から出土した。216はIII区SB 29関連のS P 658出土の土師質土器杯である。

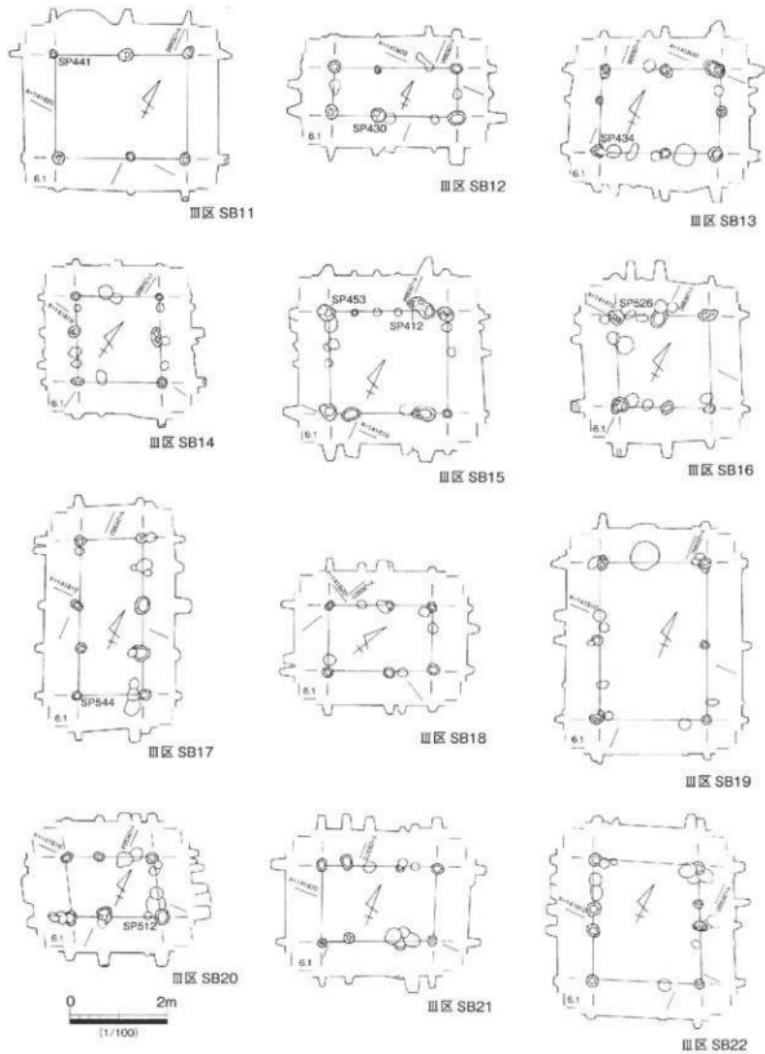
III区の掘立柱建物跡群の個々の建物跡の年代や前後関係、セット関係を明らかにすることは困難である。出土遺物は、青磁碗の年代観、備前焼の存在、小型化した土師質土器杯等から14世紀後半期から15世紀前半期の所産と思われる。なお、III区の掘立柱建物跡群は、床面積が約2.5m²のものを最小に、平均で約4.5m²の小型のものが、建物の方向を揃えずに密集する様態が復原される。また、建物を画する区画溝も見当たらない。このような点に集落の性格を窺うことができると考える。



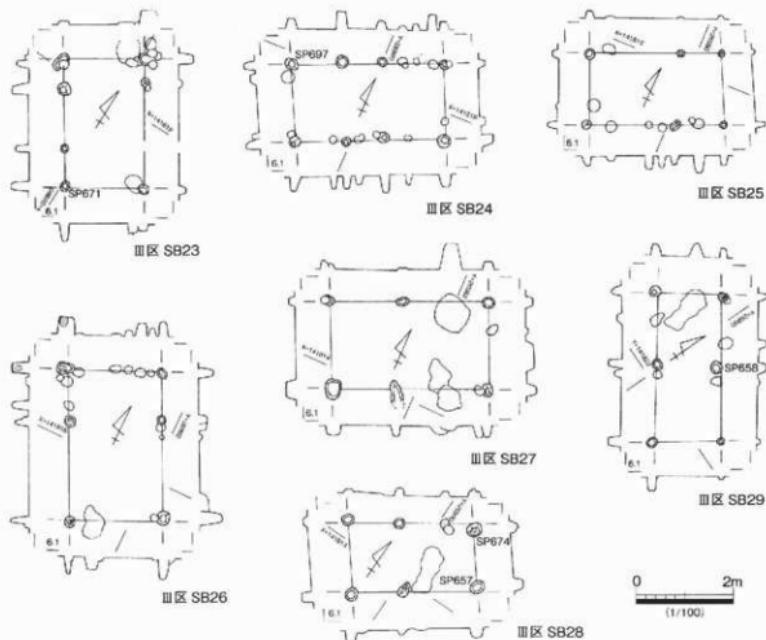
第39図 III区SB復原図



第40図 III区 SB 平・断面図 (1)



第41図 III区 SB 平・断面図 (2)



第42図 III区 SB 平・断面図 (3)

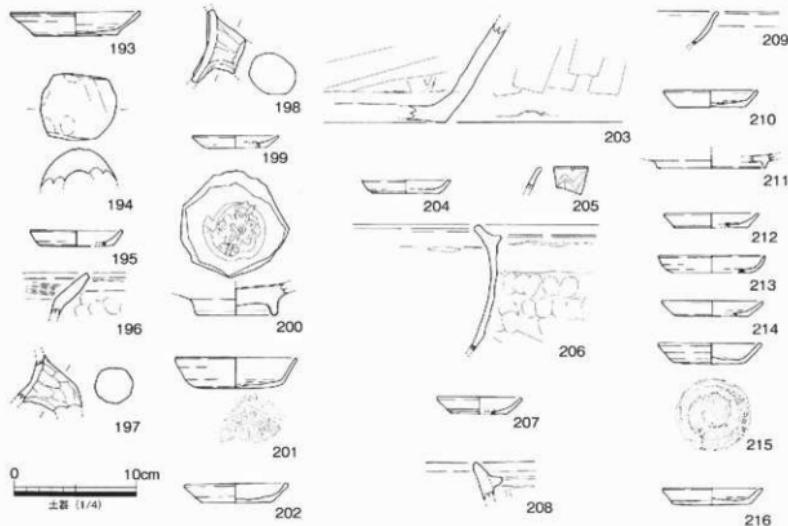
第2表 SB観察表

I区						
SB	幅×奥 (間)	幅 m × 奥 m	面積 (m ²)	方位	出土遺物番号	備考
SB01	(1)×3	15 × 35	525以上	N 25° W	14	
SB02	3×2	5.5 × 3.1	17.2	N 18° W	15, 16, 17	
SB03	3×3	4.2 × 4.9	20.2	N 26° W	18, 19, 20, 21	鉛柱
SP01	5×2	8.5 × 4.1	34.9	N 30° W	22, 23, 24	
SB05	4×2	6.5 × 3.6	23.4	N 30° W		
SB06	4×2	8.8 × 4.3	37.2	N 29.5° W	25, 26	
SB07	3×2	6.3 × 4.0	25.2	N 27° W		
SB08	3×2	7.0 × 4.2	29.2	N 27° W		
SB09	3×2	7.4 × 4.3	31.6	N 24° W	27, 28, 29, 30, 31, 32	
SB10	4×2	6.0 × 3.5	21.2	N 37° W	33, 34	
SB11	3×2	4.7 × 2.9	13.4	N 26° W		鉛柱
SB12	3×1	6.4 × 3.3	21.1	N 35° W	35, 36	
SB13	2×2	4.4 × 3.4	14.7	N 28° W	37	
SB14	4×2	9.4 × 4.1	38.9	N 26° W	38, 39, 40, 41, 42	
SB15	2×1	4.8 × 2.4	11.3	N 23° W		
SB16	2×2	5.5 × 3.5	19.4	N 25° W	43, 44, 45	

II区						
SB	幅×奥 (間)	幅 m × 奥 m	面積 (m ²)	方位	出土遺物番号	備考
SB01	2×2	3.6 × 3.4	12.2	N 30° W	158, 159	鉛柱

III区

S.B.	幅×奥 (m)	幅 m × 奥 m	面積 (m ²)	方位	出土遺物番号	備考
SB01	3 × 2	6.1 × 2.3	13.8	N - 25° - W		
SB02	2 × 1	2.0 × 1.6	3.2	N - 25° - W		
SB03	2 × 1	3.8 × 1.5	5.7	N - 43° - W	193	
SB04	3 × 1	4.8 × 1.6	7.8	N - 26° - W		
SB05	2 × 1	4.0 × 2.2	8.7	N - 27° - W	194	
SB06	3 × 1	4.1 × 2.2	8.7	N - 27° - W	195, 196, 197	
SB07	2 × 1	2.1 × 1.8	3.7	N - 24° - W		
SB08	3 × 1	3.1 × 1.1	3.5	N - 25° - W	198	
SB09	2 × 2	2.4 × 1.4	3.3	N - 50° - W		
SB10	3 × 1	3.0 × 1.4	4.1	N - 15° - W		
SB11	2 × 1	2.7 × 2.1	5.7	N - 24° - W	199, 200	
SB12	2 × 1	2.5 × 1.0	2.5	N - 20° - W	201	
SB13	2 × 2	2.4 × 1.7	4.1	N - 20° - W	202	
SB14	2 × 1	1.8 × 1.7	3.0	N - 35° - W	203	
SB15	3 × 1	2.4 × 2.1	5.1	N - 25° - W	204, 205, 206	
SB16	2 × 1	1.9 × 1.9	3.6	N - 24° - W	207	
SB17	3 × 1	3.2 × 1.3	4.2	N - 23° - W	208	
SB18	2 × 1	2.1 × 1.3	2.8	N - 55° - W		
SB19	2 × 1	3.2 × 2.2	7.0	N - 22° - W		
SB20	2 × 1	1.9 × 1.2	2.2	N - 28° - W	209	
SB21	3 × 1	2.3 × 1.6	3.6	N - 21° - W		
SB22	3 × 1	2.5 × 2.2	5.3	N - 25° - W		
SB23	3 × 1	2.6 × 1.6	4.3	N - 31° - W	210	
SB24	3 × 1	3.1 × 1.6	4.9	N - 24° - W	211	
SB25	2 × 1	2.8 × 1.5	4.0	N - 22° - W		
SB26	2 × 1	3.1 × 1.9	5.9	N - 25° - W		
SB27	2 × 1	3.2 × 1.8	5.7	N - 24° - W		
SB28	2 × 1	2.6 × 1.4	3.5	N - 32° - W	212, 213, 214, 215	
SB29	2 × 1	3.1 × 1.3	3.9	N - 54° - W	216	



第43図 III区 SB 出土遺物実測図

Ⅲ区 SP 841

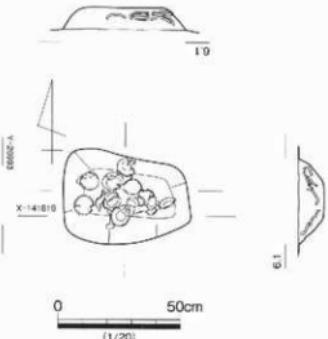
Ⅲ区 SP 841 は長径約 52、短径約 38、深さ約 10cm の規模で、28 個体の土師質土器小皿を積み重ねて埋納した祭祀遺構である。検出時には破片の状態のものも存在したが、大半は完形の状態であった。小皿以外の遺物は検出されなかった。地鎮等に係る祭祀遺構である。

その他の柱穴跡の出土遺物

第 46 図 245～296、第 47 図 297～312 は、Ⅲ区のその他の柱穴跡から出土した遺物の実測図である。245 はⅢ区 SP 02 出土の土師質土器杯、246 はⅢ区 SP 46 から出土したものである。246 は、外上方に直線的な体部で、口縁端部は丸みを帯びる。外面の下半を除き灰釉が施されており、内面には重ね焼きの痕跡がある。

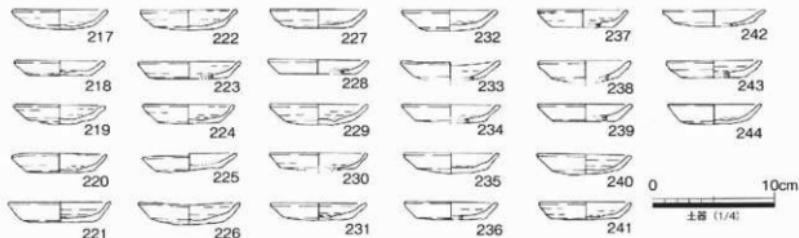
以上の様態から 246 は古瀬戸の碗形鉢に該当すると考えられる。藤沢良祐氏の分類による後期様式に含まれ、14世紀後半期から15世紀前半期に編年される。247 はⅢ区 SP 63 から出土した須恵器鉢である。口縁部を上、外方にわずかに肥厚させている。248 はⅢ区 SP 65 から出土した青磁碗である。灰白色の胎土で、高台内部は露胎であり、見込みに花文がスタンプされている。249 はⅢ区 SP 114 から出土した輪花を有する白磁碗である。251～253 はⅢ区 SP 122 出土のもので、251、252 は土師質土器小皿、253 は土師質土器土釜である。259 はⅢ区 SP 186 出土の須恵器鉢である。247 と同様に口縁部を上、外方にわずかに肥厚させている。261 はⅢ区 SP 223 から出土した瓦質土器の甕である。大阪府南部産かと思われる。262 はⅢ区 SP 227 出土の土師質土器で、細片であるが鉢と考えられる。310 はⅢ区 SP 881 出土の須恵器のすり鉢である。311、312 は柱穴から出土したものである。

以上の遺物は、13世紀中頃から15世紀前半期までのものが含まれている。出土遺物の時期差と柱穴跡位置に相関関係は認められず、遺物が細片であるものが多いことから、古い段階の遺物は混入で、検出遺構の主体は14世紀後半期から15世紀前半期にかけてと考えられる。

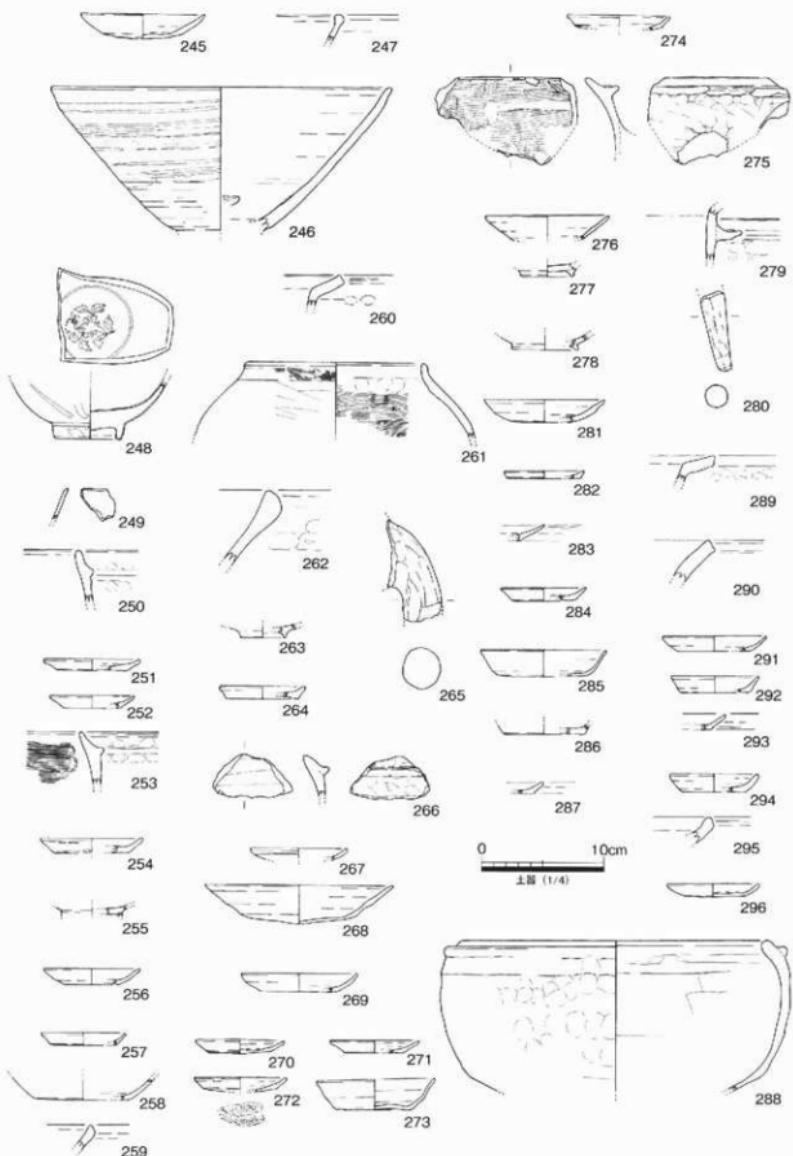


第 44 図 Ⅲ区 SP841 遺物出土状況

平・断面図



第 45 図 Ⅲ区 SP841 出土遺物実測図



第46図 その他のIII区SP出土遺物実測図(1)



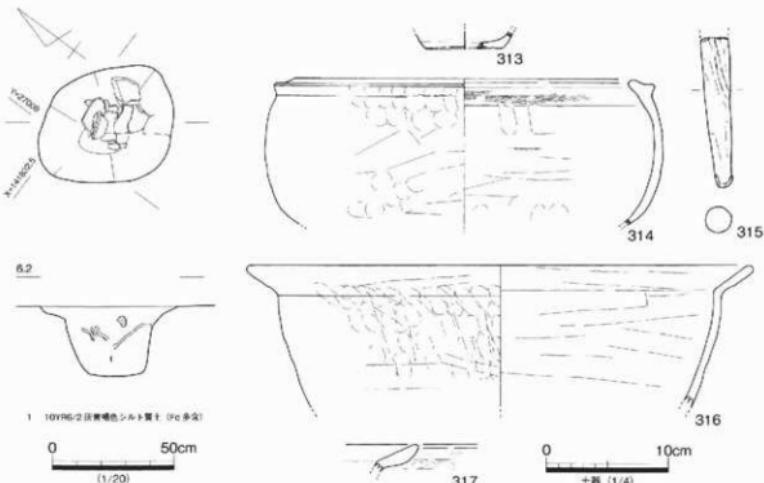
第47図 その他のIII区SP出土遺物実測図(2)

III区SK 02

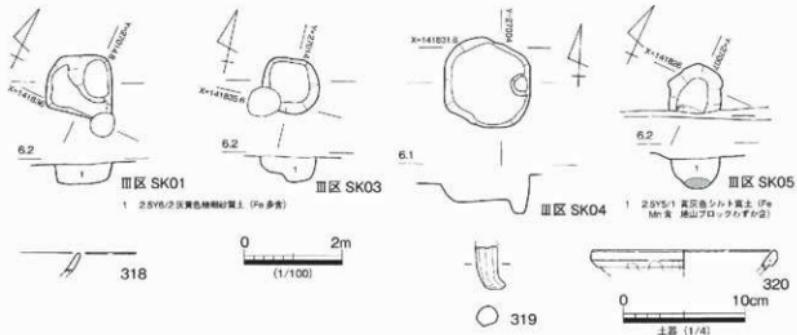
長径約60、短径約45、深さ約28cmの土坑である。埋土の上位に遺物がかたまって出土した。遺物はいずれも破片であり、埋没時に廃棄されたものと考えられる。第48図313～317は、III区SK 02から出土した遺物実測図である。313は土師質土器杯、314は土師質土器土釜の口縁、315は脚部、316、317は土師質土器土鍋である。

III区SK 01、03～05

III区SK 01は、一辺約25、深さ約8cmの、やや不整な隅丸方形の土坑である。土師質土器杯の細片(318)が出土している。



第48図 III区SK02平・断面図・出土遺物実測図



第49図 III区 SK01・03～05 平・断面図、出土遺物実測図

III区SK03は、径約24、深さ約9cmの、やや不整な円形の土坑である。遺物は出土しなかった。

III区SK04は、径約35、深さ約10cmの、やや不整な円形の土坑である。III区SX02と切り合い関係があり、III区SX02よりも古い。土師質上器上釜の脚部片が出土している。

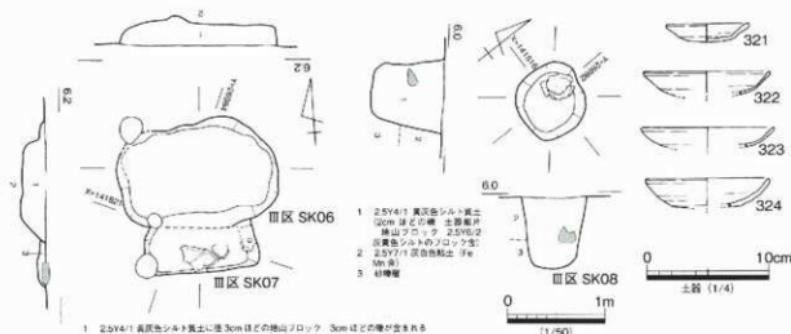
III区SK05は、北側一部のみを検出し、南側は調査区外になる。底部に亜円碟が据えるように置かれていることから、土坑窓である可能性を考えられたが、確証は得られなかった。320の白磁碗の口縁部細片が出土している。玉環状の口縁で、種が垂下している。

III区SK01～05は、遺物や埋土の様相から周囲の他の造構と同じく中世のものと考えられる。

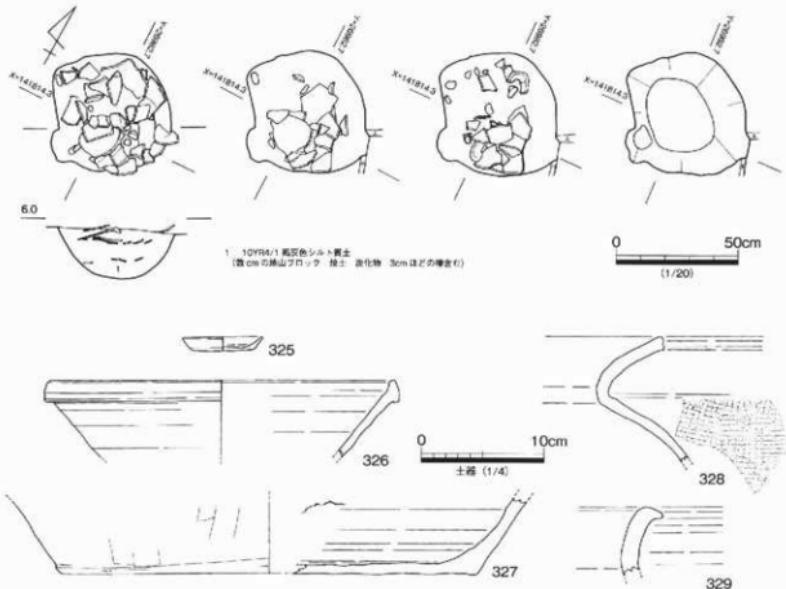
III区SK06～08

III区SK06は長辺約170、短辺約110、深さ約25cmの隅丸長方形の土坑である。図化可能な遺物は出土しなかった。

III区SK07は長辺約115、短辺約50以上、深さ約10cmの隅丸長方形の土坑である。III区SK06と切り合い関係があり、III区SK06よりも古い。一辺約40cmの安山岩の岩塊が据えられたような状況で



第50図 III区 SK06～08 平・断面図、出土遺物実測図



第51図 III区 SK09 平・断面図、出土遺物実測図

出土している。図化可能な遺物は出土しなかった。

III区SK08は、径約75、深さ約70cmの、やや不整な円形の土坑である。土師質土器小皿と杯が出土している。このうち321の小皿は、ほぼ完形で出土している。

III区SK06～08は、埋土から周囲の遺構と同じく中世のものと考えられる。

III区SK09

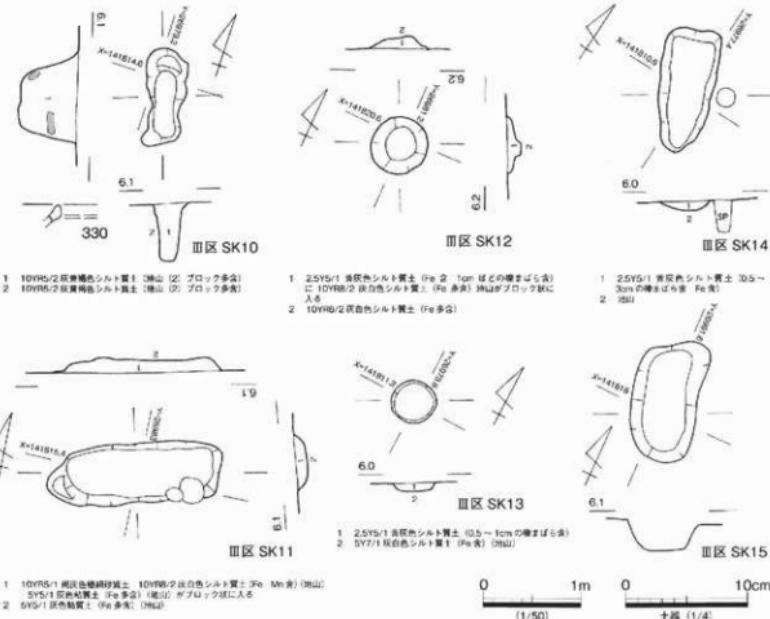
III区SK09は、径約50、深さ約20cmの、やや不整な円形の土坑である。III区SK09には多量の遺物片が含まれていた。遺物は、据えられた状態ではなく、325の土師質土器小皿が完形で出土した以外は、比較的大きな破片が廃棄された出土状況である。整理作業時にも破片はあまり接合できなかった。326は東播系の須恵器鉢で、口縁部を上下に肥厚させる特徴的な形態をしている。327は須恵器甕の底部、328、329は須恵器甕の口縁部の破片である。328の外面上には格子目タタキが認められる。

III区SK10～15

III区SK10は、長辺約100、短辺約45、深さ約60cmの、やや不整な隅丸方形の土坑である。330の須恵器鉢の口縁部細片が出土している。

III区SK11は、長辺約180、短辺約60、深さ約15cmの、やや不整な隅丸方形の土坑である。形態から土坑墓の可能性を考えて精査したが、遺構の性格を考える資料は得られなかった。

III区SK12は直径約60、深さ約15cm、III区SK13は直径約45、深さ約10cmの円形の遺構である。土坑



第52図 III区 SK10～15 平・断面図、出土遺物実測図

とするよりも大型の柱穴跡と考えるべきかもしれない。図化可能な遺物は出土しなかった。

III区 SK 14は長辺約125、短辺約60、深さ約10cm、III区 SK 15は長辺約125、短辺約75、深さ約30cmの不整形の土坑である。いずれも図化可能な遺物は出土しなかった。

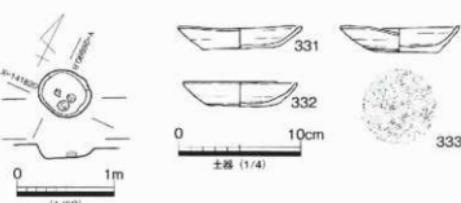
III区 SK 10～15は、いずれも中世の遺構と考えられる。

III区 SK 16

III区 SK 16は、径約50、深さ約15cmの円形の土坑である。ほぼ完形の土師質上器杯が3点出土した。いずれも底部は回転ヘラ切りで、333には板状压痕が認められる。

III区 SX 01～11

III区には、不定形できわめて浅い落ち込みが複数検出されている。この中には、落ち込みから小溝が派生するものもあり、自然形成の落ち込みとは考え難いものである。このためSXとして以下に報告する。なお、III区 SX 08は性格が異なるもので、古代の井戸跡の可能性のある遺構で



第53図 III区 SK16 平・断面図、出土遺物実測図

ある。

Ⅲ区 SX 01 は深さ約 16cm の落ち込みである。南半は調査区外になるため平面形状は不明である。遺物は出土しなかつたが、一部に集中して礫を検出した。性格不明の中世のものである。

Ⅲ区 SX 02 は、深さ約 10cm の落ち込みである。西半は調査区外になるため平面形状は不明である。第 54 図 334 ~ 337 は、Ⅲ区 SX 02 出土の遺物実測図である。いずれも細片で、334 は土師質土器杯、335 は須恵器碗、336 は青磁碗、337 は土師質土器土釜である。

Ⅲ区 SX 04 は、長辺約 460、短辺約 200、深さ約 16cm の不定形の落ち込みである。Ⅲ区 SK 15 と切り合ひ関係があり、Ⅲ区 SK 15 より新しい。338 ~ 341 を固化したが、いずれも細片である。338 は土師質土器小皿、339、340 は土師質土器杯、350 は土師質土器土釜である。

Ⅲ区 SX 05 は、長辺約 560、短辺約 220、深さ約 16cm の不定形の落ち込みである。342、343 は土師質土器杯で、ほぼ完形で出土した。344 は土師質土器土釜である。

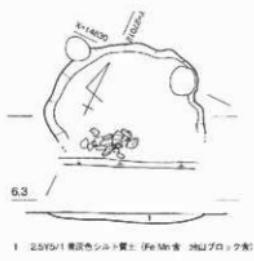
Ⅲ区 SX 06 は、長辺約 360、短辺約 240、深さ約 8cm の不定形の落ち込みである。345 の土師質土器小皿、346、347 の土師質土器土鍋が出土している。いずれも細片である。

Ⅲ区 SX 07 は、深さ約 10cm の落ち込みである。北半は調査区外になるため平面形状は不明である。348 の土師質土器小皿が出土している。

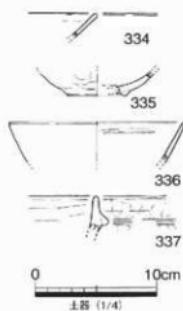
Ⅲ区 SX 08 は、深さ約 65cm の落ち込みである。Ⅲ区 SX 08 付近の基盤層は、砂礫層が構造面にまで盛り上がっているところであり、Ⅲ区 SX 08 は砂礫層を掘り下げている。一定量の湧水が認められる。底付近は草本質の泥炭層で、その上部は基盤層と同じ砂礫（マトリックスは褐色粘質土）で埋まっている。遺物はこの砂礫層中から散在する状況で出土している。

349 ~ 354 はⅢ区 SX 08 から出土した遺物実測図である。349 は須恵器高杯の脚部で、脚端部で下方に屈曲させている。350 は土師器鉢で、摩滅する。351 は土師器土釜で、水平方向に突き出し、上方に摘み出す鋸部の破片である。352 は須恵器短頸壺である。完形に近い状態で出土したが、口縁部や体部の屈曲は甘く、体部の屈曲部の上位に沈線が巡るが、部分的に 2 条になる沈線が平行にならないなど、稚拙な印象を受ける。353 は須恵器甕で、口縁部は外側に肥厚させ、丸く收めている。体部外面はタタキの後カキ目調整を施している。354 は垂玉で、砂岩亞円礫を穿孔している。

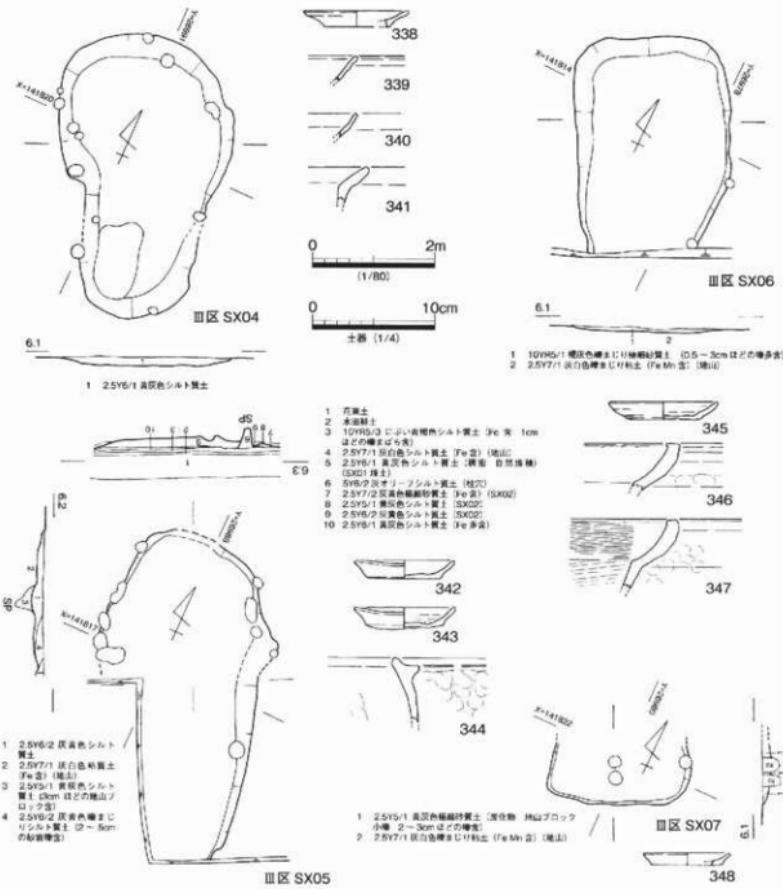
Ⅲ区 SX 08 は、354 を考慮外とすると、やや時期幅のある古代の土器が出土している。349、352 は古い様態であり、351 は新しい様態と思われる。先述したような遺物出土状況から、長期的に使用された状況や時間をかけて埋没した様態は認められず、新しい時期に埋没したと考えられる。また、機能は素掘りの井戸跡の可能性が考えられる。



第 54 図 Ⅲ区 SX01 平・断面図

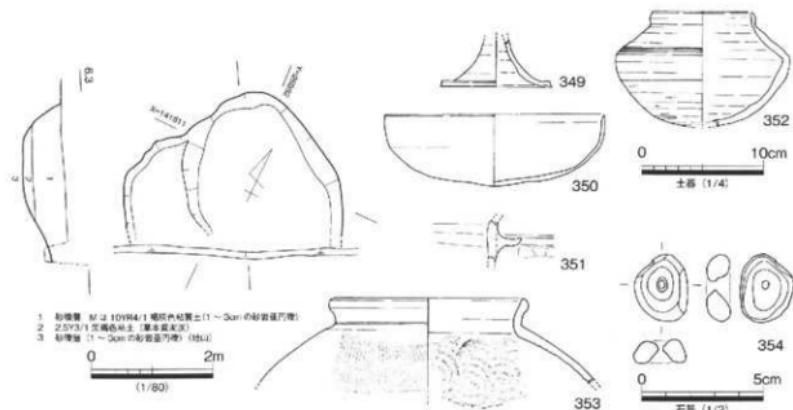


第 55 図 Ⅲ区 SX02 出土遺物実測図

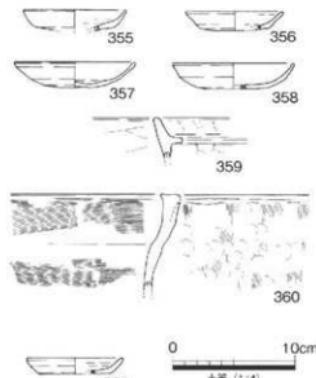


第56図 III区 SX04~07 平・断面図、出土遺物実測図

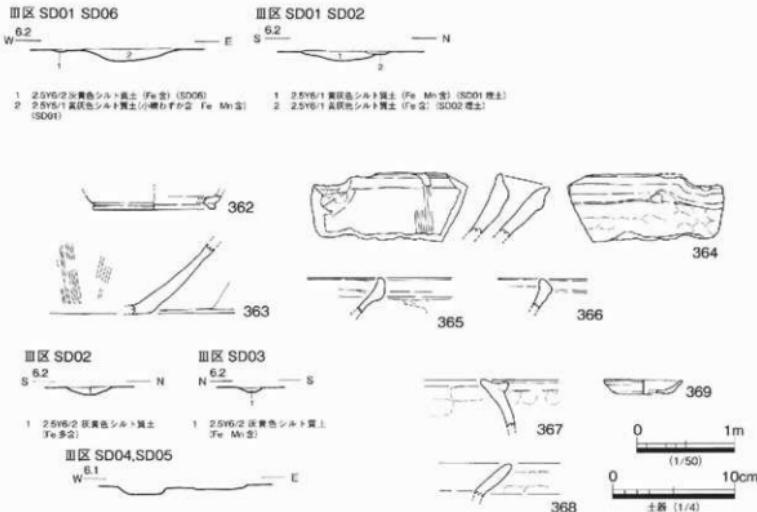
Ⅲ区S X 09は、Ⅲ区西南隅付近で検出した深さ約16cmの落ち込みである。南側が調査区外になるため、本来の形状は不明である。遺物は出土しなかった。Ⅲ区S X 10は、深さ約8cmの落ち込みである。これらも南側は調査区外となる。北側に幅約50、深さ約4cmの小溝が派生する。第57図355～360はⅢ区S X 10の出土遺物であるが、いずれも細片である。なお、360は上師質土器土鍋の口縁部と考えられるが、小片のため図の傾きは不正確である。Ⅲ区S X 11は、深さ約12cmの落ち込みである。これも南側は調査区外となる。土師質土器小皿片(361)が出土している。



第 57 図 III 区 SX08 平・断面図・出土遺物実測図



第 58 図 III 区 SX10,11 出土遺物実測図



第 59 図 III 区 SD01 ~ 06 断面図、出土遺物実測図

III区 SD 01 ~ 12

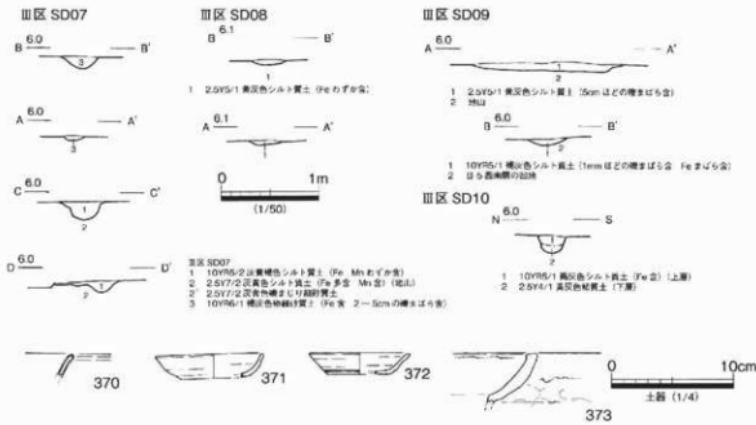
III区 SD 01 は、幅約 70 ~ 90、深さ約 10cm の溝状遺構である。ほぼ直線に東流し、途中で北へ屈曲している。屈曲は直角ではなく、北流する部分も直線ではないため、集落や建物を囲繞する溝とは考え難い。III区 SD 03、06 と切り合い関係があり、最も古い。出土遺物は破片の状態で出土し、図化遺物の他に土師質土器杯や小皿、土釜脚部等が出土している。第 58 図 362 ~ 366 は、III区 SD 01 出土の遺物実測図である。362 は須恵器杯の底部であり、混入と判断される。363 は土師質土器すり鉢、364 は須恵器の片口のすり鉢である。口縁部を上下に拡張するが、上方は尖り気味の漏斗部となっている。365 は東播系の須恵器鉢、366 は瓦質土器の鉢である。

III区 SD 02 は幅約 20、深さ約 7.5cm、III区 SD 03 は幅約 20、深さ約 7cm の溝状遺構である。III区 SD 02 は、北に凸の弓状に弯曲して東流し、III区 SD 01 の東側の落ち込みに流れ込む。III区 SD 03 も同様に落ち込みに合流している。落ち込みについては、後世の搅乱のため形状等の情報を欠く。出土遺物は細片の状態で出土した。367 は土師質土器土釜、368 は土師質土器土鍋の口縁部である。

III区 SD 04、05 は、調査区北側で一部を検出した浅い落ち込みである。III区 SD 05 から土師質土器小皿 (369) が出土し、III区 SD 04 からは図化不能の土師質土器の小皿か杯の破片が出土している。

III区 SD 06 は幅約 15、深さ約 2cm の直線に流れる溝状遺構で、延長約 4m を検出した。III区 SD 01、02 と切り合いがあり、最も新しい。遺物は出土しなかった。

III区 SD 07 は、III区西端付近を緩く蛇行しながら北流する幅約 35、深さ約 10cm の溝状遺構である。III区 SD 08 と切り合いがあり、III区 SD 07 が古い。土師質土器土鍋の口縁部小片と器種不明の土師質土器片が出土している。



第60図 III区 SD07～10断面図、出土遺物実測図

Ⅲ区SD 08は、Ⅲ区西端で検出した幅約30、深さ約6cmの溝状遺構である。条里型地割の方向と合致して直線に流れている。器種不明の須恵器片、土師器片が出土した他、370の玉縁状の口縁の青磁碗が出土している。

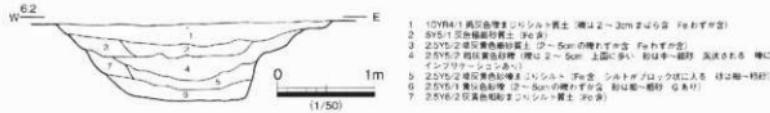
Ⅲ区SD 09～12は、Ⅲ区西南端で検出した。この付近から西に傾斜しており、包含層が堆積している。Ⅲ区SD 07、09、10、12は包含層の上面から掘り込まれたもの、Ⅲ区SD 11は下層のⅢ区SX 09の埋土上面から掘り込まれたものである。

Ⅲ区SD 09は、幅約40、深さ約8cmの溝が、東に屈曲して長辺約3、短辺約1.7mの不定形の落ち込みとなって終わる。371～373の他に土師質土器の小皿か杯の小片等が出土している。Ⅲ区SD 10は幅約35、深さ約15cmの規模で、Ⅲ区SD 09と切り合いがあり、Ⅲ区SD 09より古い。器種不明の上師質土器片が数点出土したのみである。Ⅲ区SD 11は幅60～100、深さ約30cmの規模である。先述したように、周辺の溝状造構の中では最も古い。出土遺物は摩滅した器種不明の小片が10点程度であるが、すべて弥生時代後期の土器である可能性がある。Ⅲ区SD 12は、調査区西端で検出したもので、西肩は調査区外となるため規模は不明である。遺物は出土していない。

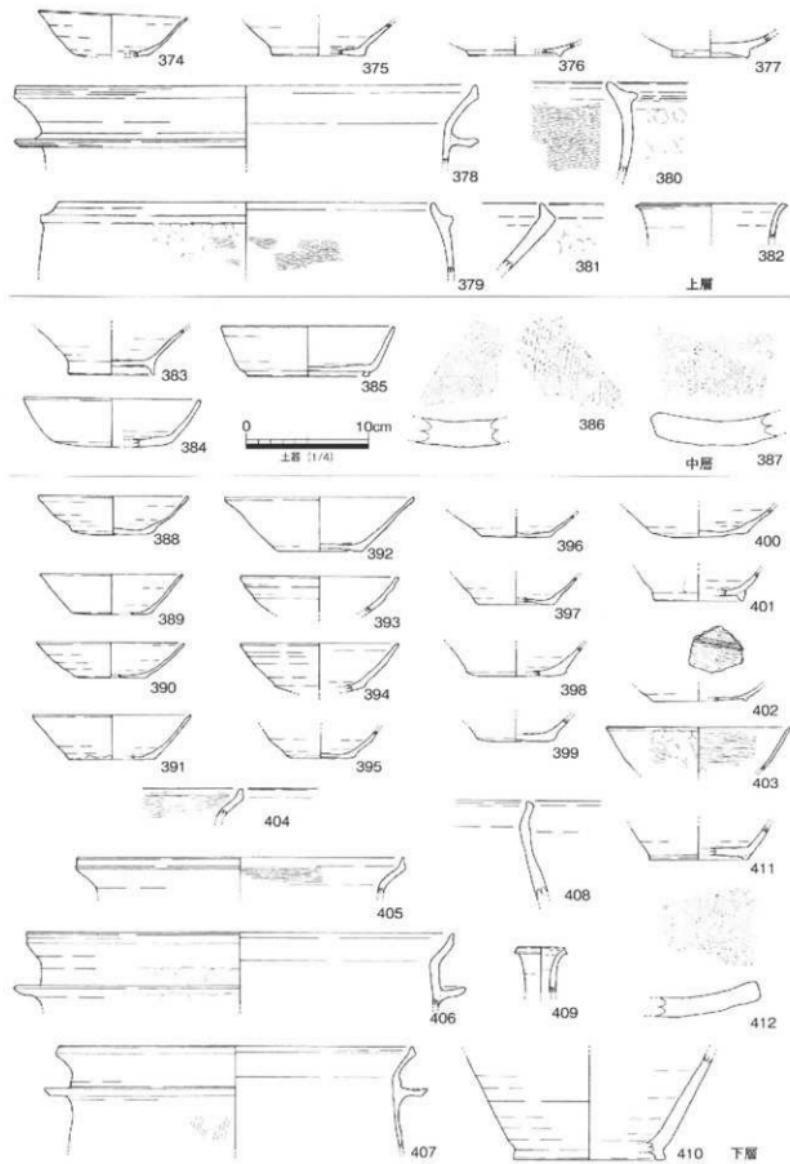
Ⅲ区の溝状遺構は、Ⅲ区SD 11のように層位的に古く位置付けられ、弥生時代後期の可能性があるものがあるが、この他のものは柱穴跡や土坑と同じ中世のものと考えられる。

III区SR01

Ⅲ区東端で検出した旧河道跡である。幅2.5~3.0、深さ約0.8cmの規模で、断面形は「じ」字状を呈する。



第61図 III区 SR01断面図



第62図 III区 SR01 出土遺物実測図

堆積構造は、調査区南壁・北壁及び2ヶ所に設定した土層観察用の畦ごとに異なっている。最大5cm以下の礫を含み、砂層に級化層理が見られることから、強い流れによって堆積したものと判断できる。埋土を大きく上層・中層・下層に分けて遺物を採集した。遺物は、埋土中に散在して包含されていた。

第62図374～382は、上層出土の遺物実測図である。374と375は土師器杯で、375は円盤状の底部である。376は内面黒色の黒色土器碗の底部で、断面三角形の高台を付している。377は縁付陶器碗の底部で、軟陶で、削り出しの蛇の目高台をもつ。378は土師器上釜である。「く」の字状に屈曲する口縁で、端部は上方に摘み上げており、水平に突き出す鶴の端部もやや上方に摘み上げている。379、380は土師質土器上釜、381は土師質土器鉢である。Ⅲ区SR01の上面には、一部搅乱された層が被っており、379～381は混入である可能性がある。382は須恵器壺の口縁部である。

第62図383～387は、中層出土の遺物実測図である。383は土師器碗で、高い高台に外反して直線状に伸る体部をもつ。384、385はいずれも焼成不良の須恵器杯である。385は下層遺物の年代親から混入と考えられる。386、387は瓦質焼成された平瓦である。津森位遺跡からの瓦の出土は僅少であり、調査区内での瓦の使用を考えるより上流の至近距離の場所に位置する田村磨寺との関連を考えるべきである。

第62図388～410は、下層出土の遺物実測図である。388～400は土師器杯で、円盤状の底部をもつものが多く、摩滅しているものが目立つ。401は土師器碗の底部、402は内面黒色の黒色土器碗、403は両面黒色の黒色土器碗で、見込みに並行するヘラミガキが認められる。403は口縁部内面に沈線が1条通っている。404、405は土師器壺、406、407は土師器土釜である。408は真蛸壺と思われるが、小片のため確証はない。409～411は須恵器壺、412は土師質焼成の平瓦である。

Ⅲ区SR01は、上層に中世の遺物が含まれるが、これを混入すると上層から下層まで9世紀後半期から10世紀代の遺物が含まれている。なお、下層出土の403の黒色土器碗が10世紀後半期のものと考えられるから、埋没年代は10世紀後半期以後と考えられる。

Ⅲ区SR02

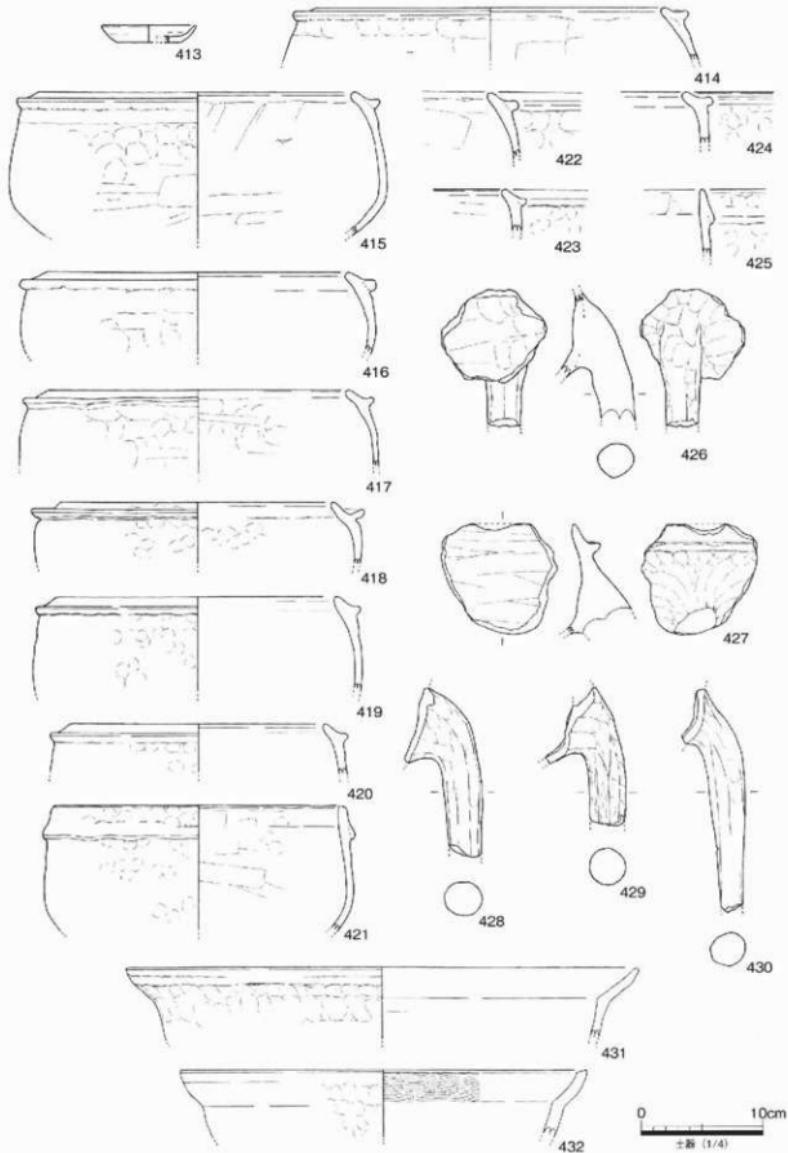
Ⅲ区中央部を北流する旧河道路跡である。多量の礫と遺物片が廃棄されたと考えられる状況で出土している。幅は13～55m、深さ約15cmの規模で、明瞭な岸をもたない不定形の流路跡である。埋土は1層であるが、下方に向かって粘性が増す傾向があり、便宜的に上層と下層の2層に分けて遺物を取り上げた。

第64図は、Ⅲ区SR02の上層出土の遺物、第65図は、Ⅲ区SR02下層の出土遺物である。また、第66図は、Ⅲ区SR02付近での遺構検出作業中やトレーニングから出土した遺物で、Ⅲ区SR02に伴う可能性が高い遺物の実測図である。

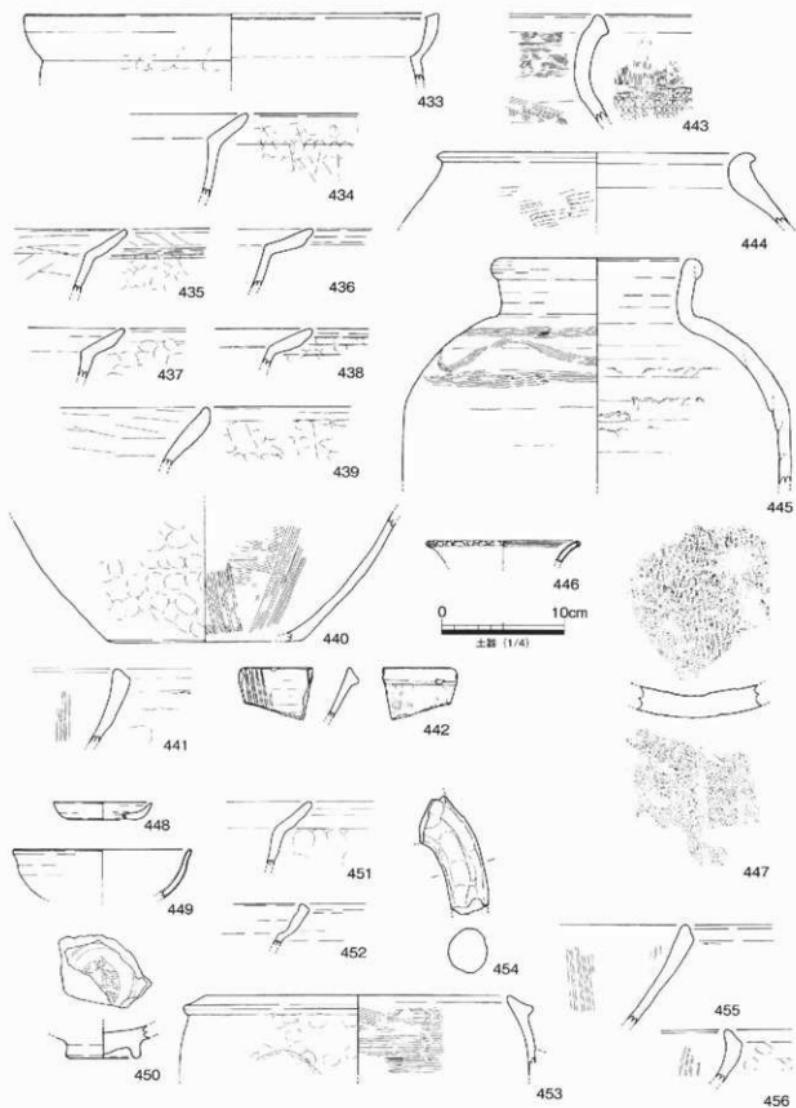
第64図413は土師質土器小皿である。414～430は、土師質土器上釜である。421と425は同一個体の可能性があるが、形骸化した特徴的な鋤部である。431～439は土師質土器土鍋の口縁部、433は須恵質に焼成されている。440、441は土師質土器すり鉢、442は瓦質焼成のすり鉢である。443は瓦質上器壺である。外面は縦ハケの後に格子目の圧痕が見られる。444は須恵質焼成の壺で、外面にタタキ目が認められる。大阪府南部産の可能性が考えられ



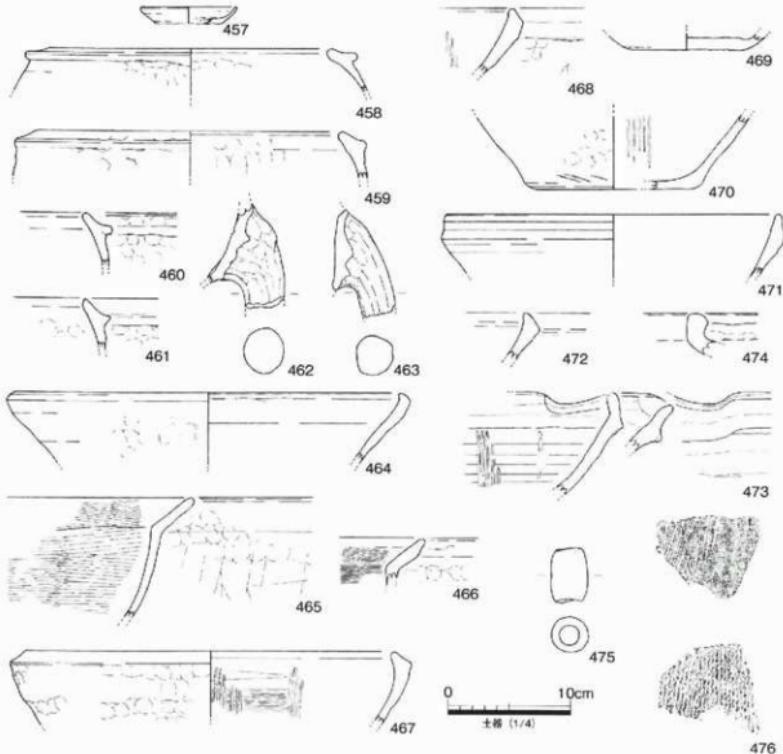
第63図 Ⅲ区SR02断面図



第64図 III区 SRO2 出土遺物実測図（1）



第65図 III区 SR02 出土遺物実測図（2）



第66図 III区 SR02出土遺物実測図（3）

る。445は備前焼壺で、玉縁状の口縁から直立する頸部をもち、肩部に2条の櫛描き条線と、その間に波状の櫛目文を描いている。間壁忠彦他によるIV期の所産と判断される。446は青磁壺の口縁部で、内面に沈線が3条巡り、端部に刻み目が施されている。447は須恵質に焼成された平瓦である。

第65図448は土師質土器小皿の破片、449、450は青磁碗である。449は肉厚で、口縁部をわずかに外反させており、後出のものと思われる。450は全面に釉がかけられ、高台内の見込み裏側は釉を掻き取っている。見込み部には花文様のスタンプがされている。龍泉窯青磁碗I-5c類に相当する。451、452は土師質土器土鍋、453、454は土師質土器土釜、455、456は土師質上器すり鉢である。

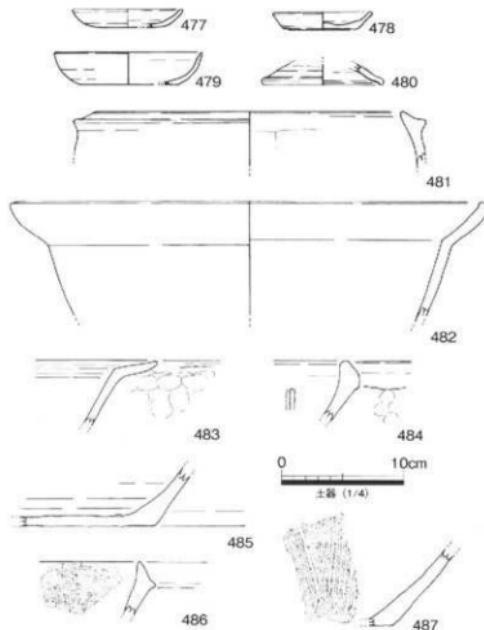
第66図457は土師質土器小皿、458～463は土師質土器土釜、464～466は土師質土器土鍋である。464は鉢のように見えるが、内済気味に立ち上がる口縁をもつことから土鍋と考えた。467～470は土師質土器すり鉢、471は須恵質に焼成された鉢である。471は重ね焼きにより、口縁部外面が変色している。472は東播系の須恵器鉢、473は備前焼すり鉢である。473は口縁部上部を上に立ち上がらせた

形態で、間櫛分類のⅣ期後半期のものである。474は土師質土器壺、475は管状土錐、476は須恵質の平瓦である。

以上の出土遺物から、Ⅲ区S R 02は柱穴跡などの周辺の中世遺構と同様に、14世紀後半期から15世紀代のものと考えられる。

その他の出土遺物

第67図は、Ⅲ区での機械掘削、遺構検出作業等の際に出土したもので、本来所属する遺構や層位が不明となったものである。477、478は土師質土器小皿、478は、ほぼ完形である。479は土師質土器杯、480は縁釉陶器蓋の小片である。口縁部は、水平方向に湾曲させ、端部は内側に丸く肥厚させている。481は形骸化した鈎を付す土師質土器土釜の口縁部、482、483は土師質土器土鍋の口縁部である。484は土師質土器すり鉢、485は須恵器鉢の底部と考えられる。486、487は備前焼すり鉢である。



第67図 その他のⅢ区出土遺物実測図

第4章　まとめ

検出した遺構・遺物の内容から、津森位遺跡の時期別変遷を概観し、まとめとしたい。

1. 古代以前

切り合い関係から、古代以前の遺構と考えられる溝状遺構を数条検出しているが、明確な所属時期は不明である。なお、県教委が行った調査では、I区に当る範囲から弥生時代後期の竪穴住居跡の可能性の高い遺構を検出しているが、追認することができなかった。

2. 古代

① 検出遺構の検討

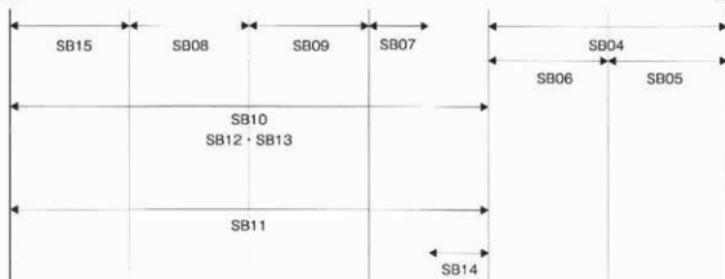
I区からII区の東半部にかけての範囲で、古代の集落跡を検出している。内容は、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡17棟、土坑、溝状遺構、旧河道跡等である。また、III区の西南部において井戸跡の可能性のある遺構1を検出した。集落跡を構成する遺構は、7世紀後半期から8世紀前半期のものと9、10世紀のものに分けられる。

7世紀後半期から8世紀前半期の遺構は、I区SH01とI区SX03である。I区SH01は平面形状が方形を呈するもので、周辺の条里型地割の方向と合致している。香川県では7世紀前半期から竪穴住居跡から掘立柱建物跡へ居住の形態が変化するが、I区SH01は竪穴住居跡が作られなくなる最後の段階のものと考えられる。I区SX03は一辺約3mの方形の落ち込みで、多数の飯蛸壺が出土した。住居跡等様々な機能が想定されるが、飯蛸壺保管用の土坑と考えた。なお、津森位遺跡と当該期には埋積が進行していたと考えられる潟湖とは、直線距離で約600m離れている。溝等を介すれば海とのつながりを想定できなくもないが、津森位遺跡は内陸に位置する遺跡であり、飯蛸壺が多数出土したことの意味を明解に説明することはできない。

9、10世紀の遺構は、17棟の掘立柱建物跡、柵列跡、溝状遺構等からなる。掘立柱建物跡の向きは、巨視的には条里型地割の方向に合うものであるが、細かく見ると微妙にずれている。このうちI区SB10とI区SB12については建物方向から、I区SB04とI区SB05、06が柱穴跡埋土の共通性等からグルーピングできるが、その他のものはグルーピングすることが難しい。柱穴跡の切り合い関係や建物の重複の有無等から分類を試みると、以下のように6時期以上に分けられる。I区SB01～03、II区SB01がどの時期に該当するのか不明なため、集落規模が拡大したり縮小したりする現象を把握す

(旧)

(新)



第68図 I区 9, 10世紀の掘立柱建物の変遷

ることができないが、建物規模に拡大や縮小の状況が認められないことから、同じような規模の集落が連続と営まれていた可能性が高いと考えられる。なお、集落の範囲を想定できるような遺構は未検出である。

② 条里型地割との関連

第2章の地理的環境の項でも述べたが、津森位遺跡周辺では条里型地割の一町方格の経溝が断片的である。第69図は、遺跡周辺で条里型地割に関係すると考えられる経溝を抽出したものである。これによると津森位遺跡のI区とII区の境界を南北に通る市道とIII区西側の南北の市道が坪界線になる。

検出遺構のうち溝状遺構について見ると、II区SD 01がI区とII区の境界を通る坪界線から西方へ約28mの位置にあり、一町方格の4分の1にあたる。また、I区SD 08がI区とII区の境界を通る坪界線から東約43mの位置にあり、一町方格の5分の2にあたる可能性がある。ただし、I区SD 08は条里型地割の方向とは約5度ずれているため、厳密に坪界線との関係を把握できない。この他に条里型地割の方向と合致する方向の溝状遺構は多数検出されているが、一町方格の中で規則的な配置をするものはないようである。

3. 中世

II区西端のII区SD 03以西からIII区のはば全域で中世後半期の遺構を検出した。出土遺物から14世紀後半期から15世紀前半期の集落と考えられる。検出した柱穴跡は不定形の平面形のものが多く、柱穴跡が1×2間以上の規模で通るものを建物と認定した結果、29棟の掘立柱建物跡を復原できた。これらは建物跡の重複から6時期以上の建て替えが想定できる。しかし、建物跡の方向や配置は雑然としており、グルーピングは困難である。

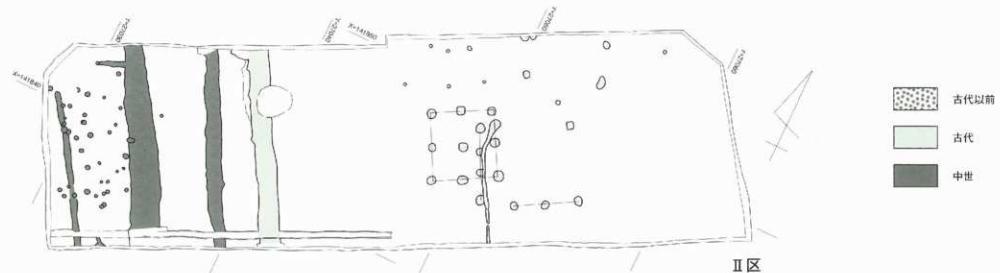
III区の掘立柱建物跡の床面積は、III区SB 12の2.5m²や、III区SB 20の2.2m²を最小に小型のものが多いのが特徴である。III区SB 20では大人が横臥する空間がかろうじて確保できる大きさであり、人間の居住する建物とは別の機能を考えるべきであると考えられる。なお、この集落の居住者層の内容等を検討することは、今のところなし得ていない。



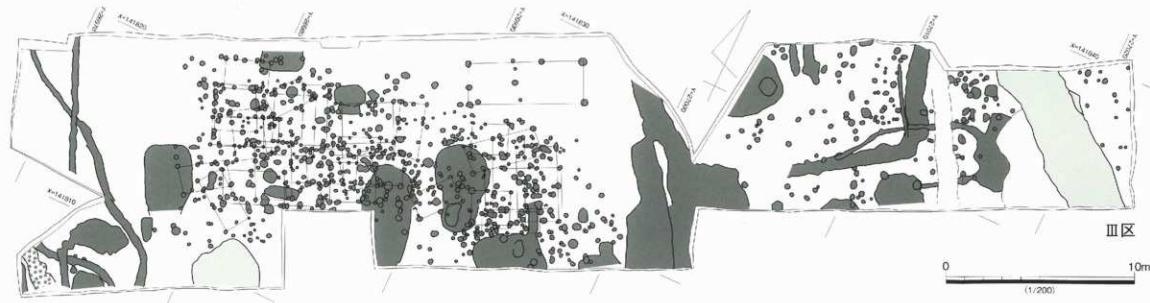
第 69 図 遺跡付近の条里型地割



I区



II区



III区

第70図 時期別 遺構図

0
(1/200)
10m

第3表 漣森位遺跡出土土器類觀察表

編號 番号	通省名	種類	形相	色調	胎上		法語	測量	保存率	備考	
					外圓・輪	内面・輪	灰・E5	赤・色粒	角質石	泥質	
1 SH01	集落器	杯型	杯	N7/灰白	N7/灰白						1種品 破片
2 SH02	集落器	杯	杯	N6/灰白	25Y7.1/E1						口輪混 破片
3 SH03	土壺器	(把手)	把手	7.5YR4 1.5-E5-A4	5YR6.6/6.6						1種子ナメ
4 SH04	土壺器	甕	甕	5YR6.6/6	7.5YR6.6/6						口輪混 破片
5 SH05	土壺器	甕	甕	2.5YR5.6/6.6/6	7.5YR6.4 1.5-E5-B4						口輪混 2.6
6 SH06	土壺器	甕	甕	1.5-E5-B3	7.5YR6.6/6						口輪混 1.8
7 SH07	土壺器	甕	甕	7.5YR7.6/6	7.5YR7.6/6						口輪混 破片
8 SH08	瓮	甕	甕	N7/灰白	N7/灰白						3.8
9 SH09	瓮	甕	甕	N7/灰白	N7/灰白						7.8
10 SH10	瓮	甕	甕	N6/灰	N6/灰						1種品 破片
11 SH11	瓮	甕	甕	N6/灰	N6/灰						1種品 破片
12 SH12	十輪器	甕	甕	7.5YR5.7 1.5-E5-B4	7.5YR5.4 1.5-E5-B4						8.8
13 SH13	土壺器	甕	甕	5YR5.6/6.6/6	7.5YR5.4 1.5-E5-B4						口輪混 破片
14 SH14	集落器	杯型	杯	N7/6.6/1	N7/6.6/1						1種子ナメ
15 SH15	集落器	杯	杯	N6/灰	N6/灰						1種子ナメ
16 SH16	土壺器	甕	甕	2.5Y7.3/6/6	7.5YR5.3 1.5-E5-B4						1種品 破片
17 SH17	土壺器	甕	甕	2.5Y6.4/6.4/6.4	7.5Y6.4/6.4/6.4						1種品 破片
18 SH18	集落器	杯	杯	N6/灰	N6/灰						1種品 破片
19 SH19	集落器	杯	杯	5YR6.6/6	5YR7.3						1種品 破片
20 SH20	土壺器	甕	甕	5YR4.1/6.6/6	5YR7.3 1.5-E5-B4						1種品 破片
21 SH21	土壺器	甕	甕	5Y8.1/6/6							7.8
22 SH22	土壺器	甕	甕	7.5YR7.6/6	5YR7.6/6						1種品 破片
23 SH23	土壺器	甕	甕	N6/灰	N6/灰						1種品 破片
24 SH24	土壺器	甕	甕	1.5-E5-B4	10YR6.4 1.5-E5-B4						1種品 破片
25 SH25	集落器	柄	柄	5Y7.1/6/6	5Y7.1/6/6						1種品 破片
26 SH26	十輪器	鍋底型	鍋	25Y6.6/6/6/6	5YR6.6/6						1種品 1.8
27 SH27	土壺器	甕	甕	5YR5.4 1.5-E5-B4	2.5Y6.1/灰						2.8
28 SH28	十輪器	甕	甕	2.5Y8.2/6/6/6	10YR6.3/灰						2.8
29 SH29	集落器	柄	柄	N8/灰白	N8/灰白						2.8 灰白

編文 番号	測量名	種類	階級	色調	外因・熱	19面・粉土	7SYBS-4(炭灰岩)	黑色系	角閃石	雲母	柱状		面状		塊存率	備考		
											115# 露風 1/100 1/100	115# 露風 1/100 1/100	外面・凸面	外面・凹面				
30 SP144	黒色土器	瓶	7SYBS-4(炭灰岩)	25%4-1 黑灰							無・並	無・並	115# 露風 1/100 1/100	マメツ	塊部	4%		
31 SP185	原生器	杯	N8.灰白	N8.灰白							無・少	156	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・黒泥ヘラ切り	露風ナゲ	内面黑色		
32 SP168	集魚器	甕	N6.灰	N6.灰							無・並	109	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・黒泥ヘラ切り	露風ナゲ	2.6%		
33 SP194	魚籃器	杯	N5.灰	N5.灰							無・少	102	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ	露部	1.8%		
34 SP165	土鍋器	甕	10YR5-3	10YR5-3							無・並	マメツ	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ	露部	0.3%		
35 SP255	魚籃器	杯	N6.灰	N6.灰							無・少	1128	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ	火側			
26 SP100	土鍋器	甕	7.5YR4.6 紅	7.5YR4.6 紅							無・並	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ	露部	3.6%			
37 SP237	土鍋器	甕	7.5YR6.4 1.5YR5.9 1.5YR5.9	7.5YR6.4 1.5YR5.9 1.5YR5.9							無・少	272	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・ハケ目	口済泥	2.8%		
38 SP169	土鍋器	杯	7.5YR7.6 粉	7.5YR7.6 粉							無・少	72	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・黒泥 ヘラ切り後子母	露部	1.8%		
39 SP169	土鍋器	杯	5.5YR7.6 粉	5.5YR7.6 粉							無・少	127	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ	露部	1.2%		
40 SP119	土鍋器	杯	10YR7.3 1.5YR7.3	10YR7.3 1.5YR7.3							無・少	103	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・回 板ヘラ削り	露部	3.8%		
41 SP105	土鍋器	甕	10YR7.3 1.5YR7.3	10YR7.3 1.5YR7.3							無・少	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・ハケ目	露部	0.5%			
42 SP112	酒樽器	甕	7SYBS-4(炭灰岩)	7SYBS-4(炭灰岩)							無・並	138	7SYBS-4(炭灰岩)	黒ナゲ・マメツ リ・赤泥けえ	115# 露風 1/100 1/100	1.8%		
43 SP241	上部質土器	杯	10YR7.2 1.5YR7.2	10YR7.2 1.5YR7.2							露・少	105	28	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・黒 板ヘラ削り	露部ナゲ	4.8%	
44 SP241	下部質土器	杯	10YR8.2 黑白	10YR8.2 黑白							露・少	104	28	65	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・黒泥ヘ ラ削り・後泥仔根	露部ナゲ	5.8%
45 SP162	燒亞器	甕	N8.灰白	N8.灰白							無・少	168	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・黒 板ヘラ削り・黒 板ヘラ削り	露部ナゲ・上げナゲ	露部	2.8%	
46 SP08	燒亞器	杯	N6.灰	N6.灰							無・少	127	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・黒 板ヘラ削り・黒 板ヘラ削り	露部ナゲナゲ	露部	1.8%	
47 SP19	土鍋器	杯	2.5YR7.2 黑灰	2.5YR7.2 黑灰							露・少	92	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・黒泥ヘ ラ削り・後泥仔根	露部ナゲ	1.8%		
48 SP26	土鍋器	杯	2.5YR8.2 黑白	2.5YR8.2 黑白							露・少	119	28	76	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・黒泥ヘ ラ削り・黒泥ナゲ	露部ナゲ	4.8%
49 SP32	燒亞器	杯	10YR5.2 黑	10YR5.2 黑							露・少	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・ハケ目 リ・黒泥ナゲ	露部ナゲ	1.8%			
50 SP36	土鍋器	杯	N7.灰白	N7.灰白							露・少	74	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・黒泥ヘ ラ削り・後泥仔根	露部ナゲ	3.8%		
51 SP42	燒亞器	甕	7.5YR7.4 1.5YR7.4	7.5YR7.4 1.5YR7.4							露・並	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・黒泥ヘ ラ削り	露部ナゲ	1.8%			
52 SP42	土鍋器	甕	7SYBS-4 1.5YR7.4	7SYBS-4 1.5YR7.4							露・少	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・黒泥ヘ ラ削り	露部ナゲ	1.8%			
53 SP54	原生器	杯	N6.灰	N6.灰							露・少	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ	115# 露風 1/100 1/100	露部			
54 SP54	原生器	杯	N6.灰	N6.灰							露・少	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ	115# 露風 1/100 1/100	露部			
55 SP10	土鍋器	杯	5YR8.6 紅	5YR8.6 紅							露・少	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・マメツ	115# 露風 1/100 1/100	露部			
56 SP10	土鍋器	杯	10YR7.4 1.5YR7.4	10YR7.4 1.5YR7.4							露・少	70	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ・黒泥 ヘラ削り	露部ナゲ	8.8%		
57 SP104	原生器	杯	10YR8.2 黑白	10YR8.2 黑白							露・少	70	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ	露部	2.8%		
58 SP104	原生器	杯	5YR7.1 黑	5YR7.1 黑							露・少	127	115# 露風 1/100 1/100	露風ナゲ	口済泥	1.8%		

品番	通称名	種類	形態	色調	硬度	外観	内面・裏面	要覧	参考	
									外観・輪	内面・底
59	SX04	無色器	板状	内面・底	硬	N5-N6	赤色斑・無質	無母	26	斜板ナメ
60	SX020	黑色寶石	板状	N8-灰白	25781.66	25781.66	無	無	1.8	マスク
61	SX06	無色器	板状	N6	25781.66	25781.66	無	無	1.8	斜板ナメ
62	SX03	無色器	板状	N8-N6	25781.66	25781.66	無	無	1.8	斜板ナメ
63	SX014	上面器	板	N5-N6	51781.66	51781.66	無	無	2.8	斜板ナメ・黒
64	SX057	生水晶	板	10YR7.4 12.5%・無質	10YR7.4 12.5%・無質	無	少	134	指揮さき・斜板ナメ	無
65	SX089	無色器	板	N7-N6.5	N7-N6.5	無	少	121	マスク	1.8
66	SX022	无色器	板	25762.66	25762.66	無	少	67	マスク	1.8
67	SX037	無色器	板	N6	N7-N6	無	少	67	マスク	1.8
68	SX02	上面器	板	10YR6.4 12.5%・無質	10YR6.4 12.5%・無質	無	並	120	斜板ナメ	口裂部 碎片
69	SX01	無色器	板	N5-N6	N5-N6	無	並	68	マスク	1.8
70	SX04	無色器	板	N8-N6	N8-N6	無	少	68	マスク	口裂部 碎片
71	SX04	土鱗器	土鱗	10YR7.2 12.5%・無質	10YR7.2 12.5%・無質	無	少	68	マスク	口裂部 碎片
72	SX02	上輪質上器	小皿	25782.66	25782.66	無	少	69	1.5	斜板ナメ・圓
74	SX02	十輪質上器	板	10YR8.3	10YR8.3	無	少	99	29	斜板ナメ・圓
75	SX02	上輪質上器	土鱗	10YR7.3 12.5%・無質	10YR7.3 12.5%・無質	無	少	99	29	斜板ナメ・圓
76	SX02	無色器	板	N7-N6.5	N7-N6.5	無	少	246	マスク	口裂部 碎片
77	SX02	無色器	板	N7-N6.5	N7-N6.5	無	少	100	マスク	口裂部 碎片
78	SX02	(輪質) 2	在板	2573.4	2573.4	無	並	63	2573.4	口裂部ナメ
79	SX02	上輪質上器	板	10YR6.4 12.5%・無質	10YR6.4 12.5%・無質	無	並	63	2573.4	口裂部ナメ
81	SX03	無色器	板	7.5YR6.6	7.5YR6.6	無	少	138	マスク	口裂部 碎片
82	SX03	十輪質	板	7.5YR6.4 12.5%・無質	7.5YR6.4 12.5%・無質	無	少	156	斜板ナメ	口裂部 碎片
83	SX03	無色器	板	N5-N6	N5-N6	無	少	116	斜板ナメ	口裂部ナメ
84	SX03	無色器	板	N7-N6	N7-N6	無	少	116	斜板ナメ	口裂部ナメ
86	SX03	無色器	板	10YR6.4 12.5%・無質	10YR6.4 12.5%・無質	無	少	138	マスク	口裂部 碎片
87	SX03	無色器	板	2577.1	2577.1	無	少	278	マスク	口裂部ナメ
88	SX03	上輪質	板	10YR6.4 12.5%・無質	10YR6.4 12.5%・無質	無	並	278	マスク	口裂部 碎片
89	SX03	上輪質上器	板	5YR6.6	5YR6.6	無	少	280	マスク	口裂部 碎片
90	SX03	上面器	板	5YR6.6	5YR6.6	無	並	280	マスク	口裂部 碎片
91	SX03	土鱗器	板	10YR7.3 12.5%・無質	10YR7.3 12.5%・無質	無	少	280	マスク	口裂部 碎片

件 号	標 名	種 類	葉 被	外 面	內 面	葉 上	花		果		葉		特 性	備 考		
							花	被	果	葉	葉	葉	葉			
92	SX03	無	無	75VH4.3根	10YB6.2承晉哥				71	104	圓錐花序	圓錐花序	外面・正面	背面・側面	8.8	容量 100cc
93	SX03	無	無	10YR7.4	5YB5.6毛櫛裸				73	90	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	7.8	容量 80cc
94	SX03	無	無	10YR7.4	75VH7.4				69	98	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	7.8	容量 80cc
95	SX03	無	無	10YR6.4	10YR6.3				72	103	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	8.8	容量 100cc
96	SX03	無	無	10YR6.3	10YR6.3				77	85	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	8.8	容量 80cc
97	SX03	無	無	75VH6.4	75VH6.4				67	91	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	7.8	容量 100cc
98	SX03	無	無	75VH5.4	75VH5.4				64	97	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	8.8	容量 75cc
99	SX03	無	無	75VH6.4	75VH6.4				59	97	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	8.8	容量 85cc
100	SX03	無	無	10YR6.4	10YR6.4				68	95	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	6.8	容量 100cc
101	SX03	無	無	75VH6.4	75VH6.3				64	104	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	8.8	容量 100cc
102	SX03	無	無	75VH6.4	75VH6.4				66	97	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	7.8	容量 110cc
103	SX03	無	無	75VH5.4	75VH5.4				76	101	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	8.8	容量 125cc
104	SX03	無	無	75VH6.6毛櫛	75VH6.6毛櫛				61	97	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	8.8	容量 80cc
105	SX03	無	無	25Y7.3毛櫛	25Y7.3毛櫛				74	91	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	6.8	容量 100cc
106	SX03	無	無	75VH6.6	75VH6.6				69	101	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	7.8	容量 110cc
107	SX03	無	無	10YR6.3	25Y4.1削灰				57	74	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	6.8	容量 60cc
108	SX03	無	無	75VH6.4	75VH6.4				56	92	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	7.8	容量 80cc
109	SX03	無	無	75VH6.6	3YR5.6毛櫛				59	97	圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	7.8	容量 80cc
110	SX03	無	無	10YR6.4	25Y6.2底新				69		圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	6.8	
111	SX03	無	無	25Y7.2底新	75VH6.4				62		圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	6.8	
112	SX03	無	無	10YR6.4	75VH6.4				63		圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	6.8	
113	SX03	無	無	75VH6.4	75VH6.6				63		圓錐花序	圓錐花序	側瓣毛櫛裸子	側瓣毛櫛裸子	7.8	
114	S001	小葉圓土蘭	小葉	10YB6.2根	10YB6.2根				74	12	圓錐花序	圓錐花序	圓錐花序	圓錐花序	6.8	容量 1.8
115	S001	小葉圓土蘭	小葉	10YB6.3根	10YB6.3根				63		圓錐花序	圓錐花序	圓錐花序	圓錐花序	6.8	容量 1.8
116	S001	小葉圓土蘭	小葉	25Y6.1削灰	25Y8.2底白				51		圓錐花序	圓錐花序	圓錐花序	圓錐花序	2.8	容量 2.8
117	S001	小葉圓土蘭	小葉	5Y8.1底白	5Y8.1底白				57		圓錐花序	圓錐花序	圓錐花序	圓錐花序	8.8	

漢文 音写	通假名	種類	型態	色調	基上	註記	頭	胸	腹	外觀、顏色	內臟、肉質	殘存率	備考
118 S001	上鈞貳十謀	蟹	25384 次白	内面、點土	5581 黑	角突石	卵形	1.1倍	膨脹	黑色	黑色	1.8	
119 S001	魚良謀	杯	Ns/灰	Ns/灰			極少	79	79	黑色	黑色	1.8	
120 S001	口魚	蟹	5771 1次白	Ns/灰			極少	74	74	黑色	黑色	1.8	
121 S001	魚良謀	杯	Ns/灰	Ns/灰			極少	21.3	21.3	黑色	黑色	1.8	東瀛系
122 S008	十一五謀	蟹	25386 3次黃	5586 6 紅	5586 6 紅		極少	15.5	21	14.2	黑色	黑色	1.8
123 S006	上鈞謀	杯	5586 6 紅	5586 6 紅			極少	19.7	19.7	黑色	黑色	1.8	
124 S006	魚良謀	杯	Ns/灰	Ns/灰			極少	19.7	19.7	黑色	黑色	1.8	
125 S006	網良謀	杯	25384 次白	25384 次白			極少	19.7	19.7	黑色	黑色	1.8	
126 S008	網良謀	蟹	5586 6 紅	10784 1極紅	10784 1極紅		極少	22.0	22.0	黑色	黑色	1.8	
127 S008	土鈞謀	土瓶	10787 2	10787 2	10787 2		極少	22.0	22.0	黑色	黑色	1.8	
128 S008	魚良謀	蟹	Ns/灰	Ns/灰			極少	22.0	22.0	黑色	黑色	1.8	
129 S008	吳良謀	蟹	N7 16.1	25381 1次白	25381 1次白		極少	22.0	22.0	黑色	黑色	1.8	日本船番
130 S008	土鈞謀	蟹	10784 1極紅	10786 4	10786 4		極少	22.0	22.0	黑色	黑色	1.8	
131 S009	上鈞謀	杯	55786 6 紅	25383 次黃	25383 次黃		極少	22.0	22.0	黑色	黑色	1.8	
132 S009	魚良謀	杯	Ns/灰	Ns/灰			極少	22.0	22.0	黑色	黑色	1.8	
133 S009	十一五謀	蟹	5586 11.5 次黃	5586 11.5 次黃	5586 11.5 次黃		中-老	28.7	28.7	黑色	黑色	1.8	
134 S009	土鈞謀	蟹	10788 1極白	10788 1極白	10788 1極白		中-老	28.7	28.7	黑色	黑色	1.8	
135 S003	坐生十謀	蟹	25388 3 次黃	10788 3 次黃	10788 3 次黃	頭、並	極少	23	23	黑色	黑色	8.8	
136 S006	魚良謀	杯	Ns/灰	Ns/灰			極少	23	23	黑色	黑色	8.8	
137 S006	上鈞謀	杯	55786 11.5 次黃	10784 1極紅	10784 1極紅		極少	23	23	黑色	黑色	8.8	
138 S006	魚良謀	小皿	25382 次白	25382 次白	25382 次白		極少	80	80	1.2	5.6	1.8	
139 S006	坐生十謀	蟹	25384 次黃	25384 次黃	25384 次黃		極少	80	80	1.2	5.6	1.8	
140 S006	魚良謀	杯	55751 次白	55751 次白	55751 次白		極少	80	80	1.2	5.6	1.8	
141 S006	上鈞謀	杯	10788 2 次黃	10788 2 次黃	10788 2 次黃		極少	80	80	1.2	5.6	1.8	
142 S006	魚良謀	杯	Ns/灰	Ns/灰			極少	80	80	1.2	5.6	1.8	
143 S006	魚良謀	杯	Ns/灰	Ns/灰			極少	80	80	1.2	5.6	1.8	
144 S006	魚良謀	杯	Ns/灰	Ns/灰			極少	80	80	1.2	5.6	1.8	
145 S006	魚良謀	杯	25377 1極白	25377 1極白	25377 1極白		極少	80	80	1.2	5.6	1.8	
146 S006	魚良謀	杯	5586 1次白	5586 1次白	5586 1次白		極少	80	80	1.2	5.6	1.8	
147 S006	魚良謀	杯	5571 1極白	5571 1極白	5571 1極白		極少	80	80	1.2	5.6	1.8	
148 S006	魚良謀	杯	Ns/灰	Ns/灰			極少	80	80	1.2	5.6	1.8	
149 S006	魚良謀	杯	Ns/灰	Ns/灰			極少	80	80	1.2	5.6	1.8	
150 S006	魚良謀	杯	25395 8.9 次黃	25395 8.9 次黃	25395 8.9 次黃		極少	80	80	1.2	5.6	1.8	
151 S006	上鈞謀	蟹	55755 6 利地	10787 4	10787 4		極少	80	80	1.2	5.6	1.8	
								25	25				

層文 番号	地質名	性質	岩相	色調	内面・斜面	E-W	赤色帶・灰白色	基底	溶出	外溢・點面	内面・凹面	塊ナメ・マメツ	塊ナメ・ロミナ	塊存率	備考	
152	含金層	土類質土質	砂利	10YR8.3灰褐色	10YR4.4 5.5G, 黄褐色	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落	
153	含金層	土類質土質	砂利	10YR8.3灰褐色	10YR4.4 5.5G, 黄褐色	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落	
154	含金層	鉱物質	無	N8-N4.1	N8-N4.1	無	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落
155	含金層	鉱物質	無	N8-N4.1	N8-N4.1	無	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落
156	含金層	鉱物質	無	N8-N4.1	N8-N4.1	無	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落
157	含金層	鉱物質	無	N8-N4.1	N8-N4.1	無	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落
158	S012	上部岩	砂岩	10YR7.6明褐色	10YR7.6明褐色	無	無	無	無	無	無	無	無	無	2.8%	外因：自然崩落
159	S012	上部岩	砂岩	10YR7.6明褐色	10YR7.6明褐色	無	無	無	無	無	無	無	無	無	2.8%	外因：自然崩落
160	SP04	下部岩	砂	7.5YR8.8灰黃白	10YR8.8-2灰白色	無	無	無	無	無	無	無	無	無	5.8%	外因：自然崩落
161	S011	白垩	無	25Y8.1灰白	25Y8.1灰白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落
162	S002	上部岩	砂岩	25Y7.3灰黃	25Y7.3灰黃	無	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落
163	S002	更變岩	砂岩	5Y7.1灰白	5Y7.1灰白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落
164	S003	上部岩	砂岩	25Y8.2灰白	25Y8.2灰白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	2.8%	外因：自然崩落
165	S003	上部岩	砂岩	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落
166	S003	上部岩	砂岩	10YR8.4灰黃白	10YR8.4灰黃白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落
167	S003	上部岩	砂岩	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落
168	S003	上部岩	砂岩	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落
169	S003	上部岩	砂岩	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落
170	S003	上部岩	砂岩	10YR8.4灰黃白	10YR8.4灰黃白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落
171	S003	上部岩	砂岩	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落
172	S003	上部岩	砂岩	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落
173	S004	上部岩	砂岩	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	1.8%	外因：自然崩落
174	S004	白堊	無	3Y8.1灰白	3Y8.1灰白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	2.8%	外因：自然崩落
175	S004	首頁	無	4Y1-2灰白	3Y6.4-3灰白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	2.8%	外因：自然崩落
176	S004	土壤質土	土	10YR8.3灰黃白	10YR8.3灰黃白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	2.8%	外因：自然崩落
177	S004	土壤質土	土	25Y8.2灰白	25Y8.2灰白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	2.8%	外因：自然崩落
178	S004	土壤質土	土	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	2.8%	外因：自然崩落
179	S004	土壤質土	土	10YR7.3灰黃白	10YR7.3灰黃白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	2.8%	外因：自然崩落
180	S004	土壤質土	土	10YR7.3灰黃白	10YR7.3灰黃白	無	無	無	無	無	無	無	無	無	2.8%	外因：自然崩落

引 号	造機名	種類	型番	色調	材 土			清 量	口 添 量	内 面 ・外 面	残 率	備考	
					表面	裏面	施土						
181	S004	十輪買上器	十頭	5YR6.14-5Y5.16	7.5YR7.4 1.5Y5.4	5YR6.6.0	表面、裏面、色板	砂粒	中・少	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片	
182	S004	上部買上器	上頭	10YR5.2灰	7.5YR7.4 1.5Y5.4	表面	表面、裏面	砂粒	中・多	指揮さえ・施土ナ・テ	指揮さえ・施土ナ・テ	口添部 破片	
183	S004	十五輪買上器	十五頭	10YR5.2灰	7.5YR7.4 1.5Y5.4	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片	
184	S004	十五輪買上器	十五頭	10YR5.2灰	7.5YR7.4 1.5Y5.4	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片	
185	S004	十五輪買上器	十五頭	10YR5.2灰	7.5YR7.4 1.5Y5.4	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片	
186	S004	頭部買上器	頭	N5.16	2.5YR7.4灰	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	頭部ナ・テ	頭部ナ・テ	頭部ナ・テ
187	S004	十輪買上器	十頭	10YR8.2灰	10YR8.2灰	表面	表面、裏面	砂粒	中・多	マ・ヌ・ツ	マ・ヌ・ツ	頭部 破片	
188	セイ解	上部買上器	十頭	10YR7.4 1.5Y5.4	10YR7.4 7.5YR5.4 1.5Y5.4	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	2.11	マ・ヌ・ツ	マ・ヌ・ツ	口添部 1.8
189	セイ解	上部買上器	上頭	10YR5.2灰	7.5YR5.4 1.5Y5.4	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片
190	セイ解	上部買上器	上頭	10YR5.2灰	7.5YR6.6	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片
191	セイ解	土輪買上器	十頭	10YR5.2灰	7.5YR5.4 1.5Y5.4	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片
192	セイ解	土輪買上器	上頭	10YR5.2灰	7.5YR5.4 1.5Y5.4	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片
193	SP171	上部買上器	平	2.5YR7.4白	2.5YR7.4白	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	106	1.9	6.9	ナ・テ、指揮さえ
194	SP291	上部買上器	十頭	10YR8.3灰	10YR8.3灰	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片
195	SP165	七輪買上器	小頭	7.5YR8.4灰	10YR8.2灰	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片
196	SP181	十輪買上器	十頭	10YR8.3灰	10YR8.3灰	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片
197	SP181	十輪買上器	十頭	10YR8.3灰	10YR8.3灰	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片
198	SP918	十五輪買上器	十五頭	10YR8.3灰	10YR8.3灰	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片
199	SP441	上部買上器	小頭	10YR5.2灰	7.5YR7.4 1.5Y5.4	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片
200	SP441	青塗	柄	7.5YR5.2 6.0ヨリーブ	7.5YR5.2 6.0ヨリーブ	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片
201	SP430	十輪買上器	十頭	2.5YR8.1灰	2.5YR8.1灰	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	9.8	1.5	6.3	ナ・テ、指揮さえ
202	SP434	上部買上器	平	10YR8.2灰	10YR8.2灰	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	83	1.6	5.7	ナ・テ、指揮さえ
203	SP905	指前処	英	10YR5.2灰	7.5YR5.3 1.5Y5.4	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	6.0	6.0	6.0	ナ・テ、指揮さえ
204	SP933	十輪買上器	小頭	7.5YR8.3灰	7.5YR8.3灰	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.2	1.1	7.3	ナ・テ、指揮さえ
205	SP412	青塗	柄	5YR6.2 6.0ヨリーブ	5YR6.2 6.0ヨリーブ	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片
206	SP453	十輪買上器	十頭	10YR7.4 1.5Y5.4	2.5YR7.4 1.5Y5.4	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片
207	SP326	上部買上器	小頭	10YR5.2 1.5Y5.4	10YR7.2 1.5Y5.4	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	68	1.4	4.6	ナ・テ、指揮さえ
208	SP514	十輪買上器	十頭	10YR5.2灰	2.5YR8.2灰	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	マ・ヌ・ツ、版ナ・ダ	マ・ヌ・ツ、版ナ・ダ	口添部 破片
209	SP512	十輪買上器	平	10YR8.2灰	10YR8.2灰	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 破片
210	SP671	上部買上器	小頭	2.5YR8.2灰	2.5YR8.2灰	表面	表面、裏面	砂粒	中・少	7.6	ナ・テ、指揮さえ	ナ・テ、指揮さえ	口添部 2.8

番号	地名	種類	層位	色調	岩上			法子			露井			残存率	備考
					外面・粗	内面・細	底面・板	砂粒	砂	底面	外面・粗面	内面・凹面	底面		
211	SP657	土鶴瓦器	陶	NS/灰							18.8%	手引付付盆	手引付付盆	高	磁片
212	SP657	土鶴瓦器	小皿	10YR8.2/6H	2538.2/6H			粗・少	75	12	60	手引付付盆	手引付付盆	高	高
213	SP657	土鶴瓦器	小皿	10YR8.2/6H	10YR8.2/6H			粗・少	87	14	62	手引付付盆	手引付付盆	高	高
214	SP657	土鶴瓦器	小皿	7.5YR8.7/6	10YR8.2/6H			粗・少	82	13	61	手引付付盆	手引付付盆	高	高
215	SP657	土鶴瓦器	小皿	10YR8.3/6H	10YR8.2/6H			粗・少	83	17	60	手引付付盆	手引付付盆	高	高
216	SP658	土鶴瓦器	手	10YR8.3/6H	10YR8.2/6H			粗・浅	82	15	64	手引付付盆	手引付付盆	高	高
217	SP651	土鶴瓦器	小皿	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	76	16	56	手引付付盆	手引付付盆	高	高
218	SP651	土鶴瓦器	小皿	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	74	12	52	手引付付盆	手引付付盆	高	高
219	SP651	土鶴瓦器	小皿	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	75	16	57	手引付付盆	手引付付盆	高	高
220	SP651	土鶴瓦器	小皿	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	76	16	56	手引付付盆	手引付付盆	高	高
221	SP651	土鶴瓦器	小皿	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	84	16	60	手引付付盆	手引付付盆	高	高
222	SP651	土鶴瓦器	小皿	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	77	17	59	手引付付盆	手引付付盆	高	高
223	SP651	土鶴瓦器	小皿	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	82	14	64	手引付付盆	手引付付盆	高	高
224	SP651	土鶴瓦器	小皿	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	73	16	53	手引付付盆	手引付付盆	高	高
225	SP651	土鶴瓦器	手	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	77	15	55	手引付付盆	手引付付盆	高	高
226	SP651	土鶴瓦器	手	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	82	18	61	手引付付盆	手引付付盆	高	高
227	SP651	土鶴瓦器	手	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	78	16	57	手引付付盆	手引付付盆	高	高
228	SP651	土鶴瓦器	手	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	84	11	62	手引付付盆	手引付付盆	高	高
229	SP651	土鶴瓦器	手	10YR8.2/6H	10YR8.2/6H			粗・少	79	17	56	手引付付盆	手引付付盆	高	高
230	SP651	土鶴瓦器	手	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	77	16	54	手引付付盆	手引付付盆	高	高
231	SP651	土鶴瓦器	手	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	79	14	56	手引付付盆	手引付付盆	高	高
232	SP651	土鶴瓦器	手	10YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	78	17	52	手引付付盆	手引付付盆	高	高
233	SP651	土鶴瓦器	手	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	83			手引付付盆	手引付付盆	高	高
234	SP651	土鶴瓦器	手	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	89	15	57	手引付付盆	手引付付盆	高	高
235	SP651	土鶴瓦器	手	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	77	16	58	手引付付盆	手引付付盆	高	高
236	SP651	土鶴瓦器	手	2.5YR8.2/6H	2.5YR8.2/6H			粗・少	74	14	56	手引付付盆	手引付付盆	高	高

器文 番号	通称名	種類	形状	文質	外邊・輪	内面・盤	底	上	底足	器形	口径	腹周	底径	外圍・凸部	内面・凹部	残存部	備考	
高さ	幅	厚さ	高さ	幅	厚さ	高さ	幅	厚さ	高さ	器形	口径	腹周	底径	外圍・凸部	内面・凹部	残存部	備考	
237	SP841	土師質土器	小皿	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	盤	7.2	1.5	5.1	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	
238	SP841	土師質土器	小皿	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	盤	7.6	1.4	5.2	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	
239	SP841	土師質土器	小皿	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	盤	7.7	1.7	5.1	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	
290	SP841	土師質土器	小皿	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	盤	7.7	1.7	5.1	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	
241	SP841	土師質土器	小皿	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	盤	7.4	1.4	5.6	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	
242	SP841	土師質土器	小皿	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	盤	8.3	1.4	6.6	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	
243	SP841	土師質土器	小皿	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	盤	7.7	1.3	5.4	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	
244	SP841	土師質土器	小皿	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	盤	7.6	1.6	5.5	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	2.578.2灰白	
245	SP841	土師質土器	杯	7.578.1 1.56.3 1.56.3 1.56.3	7.578.1 1.56.3 1.56.3 1.56.3	7.578.1 1.56.3 1.56.3 1.56.3	7.578.1 1.56.3 1.56.3 1.56.3	7.578.1 1.56.3 1.56.3 1.56.3	7.578.1 1.56.3 1.56.3 1.56.3	盤	10.2	2.1	4.6	7.578.1 1.56.3 1.56.3 1.56.3	7.578.1 1.56.3 1.56.3 1.56.3	7.578.1 1.56.3 1.56.3 1.56.3	7.578.1 1.56.3 1.56.3 1.56.3	
246	SP946	吉瀬口	瓶	3.91.7 3.91.7 3.91.7 3.91.7	3.91.7 3.91.7 3.91.7 3.91.7	3.91.7 3.91.7 3.91.7 3.91.7	3.91.7 3.91.7 3.91.7 3.91.7	3.91.7 3.91.7 3.91.7 3.91.7	3.91.7 3.91.7 3.91.7 3.91.7	瓶	27.6			3.91.7 3.91.7 3.91.7 3.91.7	3.91.7 3.91.7 3.91.7 3.91.7	3.91.7 3.91.7 3.91.7 3.91.7	3.91.7 3.91.7 3.91.7 3.91.7	
247	SP951	青出窓	瓶	N.S.灰	N.S.灰	N.S.灰	N.S.灰	N.S.灰	N.S.灰	瓶	1.5			青出窓ナメ	青出窓ナメ	青出窓ナメ	青出窓ナメ	
248	SP955	青出窓	瓶	3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1	3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1	3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1	3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1	3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1	3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1	瓶	5.4	持手・割り出しの台		青出窓	青出窓	青出窓	青出窓	
249	SP955	青出窓	瓶	7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1	7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1	7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1	7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1	7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1	7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1	瓶	1.5	青出窓		青出窓	青出窓	青出窓	青出窓	
250	SP955	青出窓	十釜	N.S.灰	N.S.灰	N.S.灰	N.S.灰	N.S.灰	N.S.灰	瓶	少	7.6	0.9	3.9	青出窓さく	青出窓さく	青出窓さく	青出窓さく
251	SP955	青出窓	小皿	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	盤	少	6.9	1.0	4.7	青出窓ヘラボウ	青出窓ヘラボウ	青出窓ヘラボウ	青出窓ヘラボウ
252	SP955	青出窓	小皿	3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1	3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1	3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1	3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1	3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1	3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1 3.57.7.1	盤	少	6.9	1.0	4.7	青出窓ヘラボウ	青出窓ヘラボウ	青出窓ヘラボウ	青出窓ヘラボウ
253	SP955	青出窓	十釜	7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1	7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1	7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1	7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1	7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1	7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1 7.57.7.1	瓶	少			青出窓さく	青出窓さく	青出窓さく	青出窓さく	
254	SP955	青出窓	小皿	2.57.8.2灰白	2.57.8.2灰白	2.57.8.2灰白	2.57.8.2灰白	2.57.8.2灰白	2.57.8.2灰白	盤	8.3			青出窓	青出窓	青出窓	青出窓	
255	SP958	土師質土器	瓶	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	瓶	少	8.3	6.5	1.5	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白
256	SP958	土師質土器	小皿	5.97.1灰白	5.97.1灰白	5.97.1灰白	5.97.1灰白	5.97.1灰白	5.97.1灰白	盤	少	7.9	1.3	4.7	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白
257	SP958	土師質土器	小皿	2.57.7.1灰白	2.57.7.1灰白	2.57.7.1灰白	2.57.7.1灰白	2.57.7.1灰白	2.57.7.1灰白	盤	少	7.0	1.0	5.0	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白
258	SP958	土師質土器	杯	10.38.1 1.56.3 1.56.3 1.56.3	10.38.1 1.56.3 1.56.3 1.56.3	10.38.1 1.56.3 1.56.3 1.56.3	10.38.1 1.56.3 1.56.3 1.56.3	10.38.1 1.56.3 1.56.3 1.56.3	10.38.1 1.56.3 1.56.3 1.56.3	瓶	少			10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	
259	SP958	土師質土器	鉢	N.S.灰	N.S.灰	N.S.灰	N.S.灰	N.S.灰	N.S.灰	盤	少			10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	
260	SP958	土師質土器	土鍋	2.57.8.1灰白	2.57.8.1灰白	2.57.8.1灰白	2.57.8.1灰白	2.57.8.1灰白	2.57.8.1灰白	盤	少			10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	
261	SP958	瓦質十器	蓋	N.S.灰	N.S.灰	N.S.灰	N.S.灰	N.S.灰	N.S.灰	盤	少	14.2		10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	
262	SP958	土師質土器	鉢	5.97.6.6	5.97.6.6	5.97.6.6	5.97.6.6	5.97.6.6	5.97.6.6	盤	少			10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	
263	SP958	土師質土器	鉢	2.57.8.1灰白	2.57.8.1灰白	2.57.8.1灰白	2.57.8.1灰白	2.57.8.1灰白	2.57.8.1灰白	盤	少	36		10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	
264	SP958	土師質土器	小皿	2.57.8.1灰白	2.57.8.1灰白	2.57.8.1灰白	2.57.8.1灰白	2.57.8.1灰白	2.57.8.1灰白	盤	少	68	1.1	5.9	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白
265	SP958	土師質土器	土鍋	1.56.3 1.56.3 1.56.3	1.56.3 1.56.3 1.56.3	1.56.3 1.56.3 1.56.3	1.56.3 1.56.3 1.56.3	1.56.3 1.56.3 1.56.3	1.56.3 1.56.3 1.56.3	盤	少			10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	10.38.2灰白	

標名	標名	種類	形狀	色調	外面・海	内面・船	角凹石	露邊	鉢形	底質	測量		残存率	備考
											底質	底質	底質	底質
SP312	上部質土器	上部	外輪・海	10YR7.3 1.5-5.5%水溶	10YR7.4 1.5-5.5%水溶	10YR8.2灰白	角凹石	鉢・少	11H6 露邊	底質	外圓・凸圓	内圓・凹圓	底質	底質
266	SP361	上部質土器	上部	2.5Y8.3浅灰色	2.5Y8.3浅灰色	2.5Y8.2灰白		鉢・多	7.9	腐泥	底質ナメ	板ナメ	底質ナメ	口溶部 破片
267	SP362	上部質土器	小皿	2.5Y8.1灰白	2.5Y8.1灰白	2.5Y8.1灰白		鉢・並	11.48	3.22	0.5	底質ナメ	底質ナメ	1.清部 2.8
268	SP363	上部質土器	杯	2.5Y8.1灰白	2.5Y8.1灰白	2.5Y8.1灰白		鉢・少	9.3	1.5	0.3	底質ナメ	底質ナメ	口溶部 1.8
269	SP368	上部質土器	小皿	2.5Y8.1灰白	2.5Y8.1灰白	2.5Y8.1灰白		鉢・少	7.1	1.1	0.2	底質ナメ	底質ナメ	口溶部 1.8
270	SP373	上部質土器	小皿	2.5Y8.2灰白	2.5Y8.2灰白	2.5Y8.1灰白		鉢・並	11.48	3.22	0.5	底質ナメ	底質ナメ	口溶部 4.8
271	SP373	上部質土器	小皿	2.5Y7.1灰白	2.5Y7.1灰白	2.5Y7.1灰白		鉢・少	7.3	1.0	0.0	底質ナメ	底質ナメ	口溶部 2.8
272	SP373	上部質土器	小皿	2.5Y8.8-4灰白色	2.5Y8.8-4灰白色	2.5Y8.8-4灰白色		鉢・少	7.6	1.0	0.0	底質ナメ	底質ナメ	口溶部 1.8
273	SP373	上部質土器	杯	10Y8.8-2灰白	10Y8.8-2灰白	10Y8.8-2灰白		鉢・少	9.7	2.5	0.5	底質ナメ	底質ナメ	口溶部 7.8
274	SP375	上部質土器	小皿	10Y8.8-2灰白	10Y8.8-2灰白	10Y8.8-2灰白		鉢・並	11.48	3.22	0.5	底質ナメ	底質ナメ	1.清部 1.8
275	SP382	上部質土器	七茶	10Y8.8-4 1.5-5%	10Y8.8-4 1.5-5%	10Y8.8-4 1.5-5%		鉢・並	8.2			底質ナメ	底質ナメ	口溶部 7.8
276	SP385	上部質土器	杯	10Y8.8-2灰白	10Y8.8-2灰白	10Y8.8-2灰白		鉢・少	10.1			底質ナメ	底質ナメ	口溶部 1.8
277	SP385	上部質土器	杯	N8.6灰	10Y8.8-1灰白	10Y8.8-1灰白		鉢・少	4.2			底質ナメ	底質ナメ	底部 1.8
278	SP417	上部質土器	杯	2.5Y8.1灰白	2.5Y8.1灰白	2.5Y8.1灰白		鉢・少	5.4	1.0	0.0	底質ナメ	底質ナメ	底部 破片
279	SP458	上部質土器	上湯	31Y8.6-8	2.5Y8.2灰白	2.5Y8.2灰白		鉢・並	1.8	0.5	0.0	底質ナメ	底質ナメ	底部 破片
280	SP458	上部質土器	土釜	10Y8.6-3 1.5-5%	10Y8.6-3 1.5-5%	10Y8.6-3 1.5-5%		鉢・並	1.8	0.5	0.0	底質ナメ	底質ナメ	底部 破片
281	SP476	上部質土器	小皿	10Y8.6-1灰白	10Y8.6-1灰白	10Y8.6-1灰白		鉢・少	9.9	1.9	0.0	底質ナメ	底質ナメ	1.清部 1.8
282	SP480	上部質土器	小皿	10Y8.8-2灰白	10Y8.8-2灰白	10Y8.8-2灰白		鉢・少	6.5	0.6	0.0	底質ナメ	底質ナメ	1.清部 1.8
283	SP494	上部質土器	小皿	7.5Y8.8-2灰白	10Y8.8-1灰白	10Y8.8-1灰白		鉢・並	1.8	0.5	0.0	底質ナメ	底質ナメ	口溶部 破片
284	SP500	上部質土器	小皿	2.5Y7.1灰白	2.5Y7.1灰白	2.5Y7.1灰白		鉢・少	7.0	1.1	0.0	底質ナメ	底質ナメ	口溶部 1.8
285	SP510	上部質土器	杯	10Y8.8-3浅灰色	10Y8.8-3浅灰色	10Y8.8-3浅灰色		鉢・少	10.2	2.2	0.0	底質ナメ	底質ナメ	底部 2.8
286	SP524	上部質土器	小皿	2.5Y8.1灰白	2.5Y8.1灰白	2.5Y8.1灰白		鉢・少	6.6			底質ナメ	底質ナメ	底部 1.8
287	SP531	上部質土器	小皿	2.5Y8.1灰白	2.5Y8.1灰白	2.5Y8.1灰白		鉢・少	1.8	0.5	0.0	底質ナメ	底質ナメ	口溶部 破片
288	SP561	上部質土器	小皿	10Y8.8-3浅灰色	10Y8.8-3浅灰色	10Y8.8-3浅灰色		鉢・並	2.46			底質ナメ	底質ナメ	1.清部 2.8
289	SP574	上部質土器	上湯	10Y8.6-3 1.5-5%	10Y8.6-3 1.5-5%	10Y8.6-3 1.5-5%		鉢・並	1.8	0.5	0.0	底質ナメ	底質ナメ	口溶部 破片
290	SP589	上部質土器	盛	N8灰	N8灰	N8灰		鉢・並	1.8	0.5	0.0	底質ナメ	底質ナメ	口溶部 破片
291	SP593	上部質土器	小皿	10Y8.8-2灰白	10Y8.8-2灰白	10Y8.8-2灰白		鉢・少	8.4	1.2	0.0	底質ナメ	底質ナメ	底部 1.8
292	SP593	上部質土器	小皿	10Y8.8-2灰白	10Y8.8-2灰白	10Y8.8-2灰白		鉢・少	7.2	1.4	0.0	底質ナメ	底質ナメ	底部 1.8
293	SP593	上部質土器	小皿	2.5Y8.1灰白	2.5Y8.1灰白	2.5Y8.1灰白		鉢・並	1.8	0.5	0.0	底質ナメ	底質ナメ	口溶部 破片
294	SP605	上部質土器	小皿	10Y8.8-2灰白	10Y8.8-2灰白	10Y8.8-2灰白		鉢・少	7.2	1.5	0.0	底質ナメ	底質ナメ	1.清部 2.8

基 数 番 号	品 名	種 類	色 調	岩 土				鉱 物	外 觀	顯 微	測 定	發 育 率	出 處	
				外 觀	內 部	結 晶	集 合							
295	S9706	1.海鹽十鈣 石	灰 色	7.5R G 6 級	2.5R G 6 級	圓 形	粒 狀	無	圓 形	無	無	無	1.漂 浮	無 痕
296	S9711	土壤質土器 石	小 黑	10YR 8.3 2灰白	10YR 8.3 2灰白	圓 形	少	75	1.1	47	圓柱 形	少	7.8	粘土 粘土
297	S9712	土壤質土器 石	灰	7.5YR 8.4 1黃白	7.5YR 8.4 1黃白	圓 形	少	72	1.4	50	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土
298	S9736	1.鈣質十 鈣	灰 色	2.5G 8.2灰白	2.5G 8.2灰白	圓 形	少	90	1.9	52	圓柱 形	少	2.8	粘土 粘土
299	S9746	1.鈣質土器 石	小 黑	10YR 8.3 2灰白	10YR 8.3 2灰白	圓 形	少	79	1.4	64	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土
300	S9770	土壤質土器 石	小 黑	7.5YR 7.5 1黃 白	10YR 8.1 1灰 白	圓 形	少	65	0.9	50	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土
301	S9770	土壤質土器 石	小 黑	7.5YR 7.5 1黃 白	7.5YR 7.5 1黃 白	圓 形	少	82	62	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土	
302	S9770	土壤質土器 石	灰 色	2.5G 8.2灰白	2.5G 8.2灰白	圓 形	少	11.7	7.7	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土	
303	S9750	土壤質土器 石	小 黑	7.5YR 8.4 1黃 白	7.5YR 8.4 1黃 白	圓 形	少	73	1.4	51	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土
304	S9758	土壤質土器 石	土 黃	2.5Y 5.1 1黃 白	2.5Y 5.1 1黃 白	圓 形	並	30.7	-	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土	
305	S9799	1.鈣質十 鈣	小 黑	2.5Y 8.2灰白	2.5Y 8.2灰白	圓 形	少	80	1.1	73	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土
306	S9809	1.鈣質十 鈣	小 黑	10YR 8.3 2灰 白	10YR 8.2 2灰 白	圓 形	並	10.0	8.0	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土	
307	S9797	1.鈣質土器 石	小 黑	7.5YR 8.6 2灰 白	7.5YR 8.6 2灰 白	圓 形	少	9.2	-	圓柱 形	少	2.8	八面體黑鐵 石	
308	S9830	鈣鐵 石	黑 色	Ns 灰白	Ns 灰白	圓 形	少	4.3	0.9	0.3	少	-	少	1.8
309	S9823	鈣鐵 石	黑 色	2.5Y 6.8 灰 白	-	圓 形	並	-	-	-	-	-	-	1.8
310	S984	鈣亞鐵 石	土 黃	7.5Y 8.1 1灰 白	7.5Y 8.1 1灰 白	圓 形	少	-	-	-	-	-	-	1.8
311	S9846	1.鈣質土器 石	土 黃	10YR 8.4 1灰 白	10YR 8.4 1灰 白	圓 形	少	-	-	-	-	-	-	1.8
312	S9846	1.鈣質土器 石	灰 色	2.5Y 8.2灰白	2.5Y 8.2灰白	圓 形	少	10.0	-	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土	
313	S982	土壤質土器 石	灰 色	7.5R 7.6 級	7.5R 7.6 級	圓 形	少	64	-	圓柱 形	少	2.8	粘土 粘土	
314	S982	土壤質土器 石	土 黃	2.5Y 8.2灰白	2.5Y 8.2灰白	圓 形	少	27.8	-	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土	
315	S982	土壤質土器 石	白 色	2.5Y 8.2灰白	2.5Y 8.2灰白	圓 形	少	14.6	-	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土	
316	S982	土壤質土器 石	土 黃	10YR 8.3 2灰 白	10YR 8.3 2灰 白	圓 形	並	10.9	-	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土	
317	S982	土壤質土器 石	土 黃	10YR 8.2灰 白	10YR 8.2灰 白	圓 形	少	-	-	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土	
318	S982	土壤質土器 石	土 黃	2.5Y 8.2灰白	2.5Y 8.2灰白	圓 形	少	-	-	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土	
319	S985	土壤質土器 石	白 色	5Y 8.1 1灰 白	-	圓 形	少	-	-	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土	
320	S985	土壤質土器 石	小 黑	7.5Y 7.1 1灰 白	Ns 灰白	圓 形	少	-	-	圓柱 形	少	1.8	粘土 粘土	
321	S988	1.鈣質十 鈣	灰 色	10YR 8.2灰白	10YR 8.2灰白	圓 形	少	67	1.5	34	圓柱 形	少	7.8	粘土 粘土
322	S988	1.鈣質土器 石	灰 色	2.5Y 8.2灰白	2.5Y 8.2灰白	圓 形	少	10.4	-	圓柱 形	少	2.8	粘土 粘土	
323	S988	土壤質土器 石	灰 色	5Y 8.1 1灰 白	5Y 8.1 1灰 白	圓 形	少	10.8	-	圓柱 形	少	2.8	粘土 粘土	
324	S988	土壤質土器 石	灰 色	2.5Y 8.2灰白	2.5Y 8.2灰白	圓 形	少	10.1	5.8	圓柱 形	少	2.8	粘土 粘土	
325	S989	土壤質土器 石	小 黑	2.5Y 7.6 級	2.5Y 7.6 級	圓 形	少	65	1.2	50	圓柱 形	少	7.8	粘土 粘土
326	S989	土壤質土器 石	灰 色	-	-	圓 形	少	28.0	-	圓柱 形	少	3.8	粘土 粘土	

目次 番号	測量名	種類	器物	位置		寸法	法量	内面・外面		備考
				外面・輪	内面・輪			寸法	法量	
237	0	銀墨25	墨	N7/灰白	N7/灰白	757.1	336	ア・靴ナシ	内面ナシ	底部 2.8
328	SX09	重出器	墨	N8/灰白	N8/灰白	757.1	336	靴ナシ・帽子ナタ	靴ナシ・頭部ナシ	底部 破壊
339	SX09	重出器	墨	N8/灰白	N8/灰白	757.1	336	靴ナシ	靴ナシ	口輪部 破壊
340	SX09	重出器上墨	墨	N8/灰白	N8/灰白	757.1	336	靴ナシ	靴ナシ	口輪部 破壊
341	SX09	土動乳土器	杯	10Y882-2灰白	10Y882-2灰白	10Y882-2灰白	100	1.8	6.2	底部ナシ・目 底部ナシ・口
342	SX09	土動乳土器	杯	10Y882-2灰白	10Y882-2灰白	10Y882-2灰白	92	1.9	6.1	底部ナシ・口
343	SX09	土動乳土器	杯	75Y882-2灰白	75Y882-2灰白	75Y882-2灰白	96	2.2	5.9	1.半ナシ・底上へ 切り
344	SX09	土動乳土器	杯	10Y882-2灰白	10Y882-2灰白	10Y882-2灰白	96	2.2	5.9	1.半ナシ・底上へ 切り
345	SX09	黑地器	桶	N8/灰	N7/灰白	N7/灰白	55	指印等ナシ・ 見付	ナシ	底部 4.8
346	SX09	青磁	桶	6E-3-1-2	6V7.1灰白	6V7.1灰白	143	底輪	底輪 2ヶ	口輪部 1.8
347	SX09	土動乳土器	土器	10Y882-2灰白	10Y882-2灰白	10Y882-2灰白	86	1.3	7.4	底部ナシ・口
348	SX09	土動乳土器	小皿	25Y882-2灰白	25Y882-2灰白	25Y882-2灰白	86	1.3	7.4	底部ナシ・口
349	SX09	土動乳土器	杯	10Y87.1灰白	10Y87.1灰白	10Y87.1灰白	86	1.3	7.4	底部ナシ・口
350	SX09	土動乳土器	杯	25Y882-2灰白	25Y882-2灰白	25Y882-2灰白	86	1.3	7.4	底部ナシ・口
351	SX09	土動乳土器	土器	25Y882-2灰白	25Y882-2灰白	25Y882-2灰白	86	1.3	7.4	底部ナシ・口
342	SX09	土動乳土器	小皿	10Y882-3灰白	10Y882-3灰白	10Y882-3灰白	86	1.3	7.4	底部ナシ・口
343	SX09	土動乳土器	小皿	75Y87.6	75Y87.6	75Y87.6	81	1.8	6.3	底輪ナシ
344	SX09	土動乳土器	土器	10Y882-2灰白	10Y882-2灰白	10Y882-2灰白	86	1.3	7.4	底輪ナシ
345	SX09	土動乳土器	小皿	10Y882-2灰白	10Y882-2灰白	10Y882-2灰白	86	1.3	7.4	底輪ナシ
346	SX09	土動乳土器	土器	10Y87.3	10Y87.3	10Y87.3	86	1.3	7.4	底輪ナシ
347	SX09	土動乳土器	土器	10Y87.3	10Y87.3	10Y87.3	86	1.3	7.4	底輪ナシ
348	SX09	土動乳土器	小皿	10Y87.3	10Y87.3	10Y87.3	86	1.3	7.4	底輪ナシ
349	SX09	土動乳土器	小皿	N8/灰白	N8/灰白	N8/灰白	86	1.3	7.4	底輪ナシ
350	SX09	土動乳土器	杯	75Y87.6	75Y87.6	75Y87.6	86	1.3	7.4	底輪ナシ
351	SX09	土動乳土器	土器	10Y882-4灰白	10Y882-4灰白	10Y882-4灰白	86	1.3	7.4	底輪ナシ
352	SX09	土動乳土器	杯	N8/灰	N7/灰	N7/灰	81	1.3	7.4	底輪ナシ
353	SX09	施墨器	墨	N8/灰白	N8/灰白	N8/灰白	153	墨跡ナシ・ 墨跡ナシ	墨跡ナシ	底部 1.8
355	SX10	土動乳土器	杯	25Y882-2灰白	25Y882-2灰白	25Y882-2灰白	82	1.3	7.4	底輪ナシ
356	SX10	土動乳土器	杯	10Y87.3	10Y87.3	10Y87.3	80	1.3	7.4	底輪ナシ
357	SX10	土動乳土器	杯	10Y882-1灰白	10Y882-1灰白	10Y882-1灰白	98	2.1	5.2	底輪ナシ

目次 番号	種類名	被検	特徴	色調		外殻 形態	外殻 表面	外殻 内部	法量		内面・肉面	残存率	備考
				外殻 色	内面 色				外殻 厚	外殻 表面 性状			
385 SROI	筆刷群	糸	黒	黒	黒	N8/灰白	N8/灰白	N8/灰白	少	少	14.0	4.2	4.8
388 SROI	土蜘蛛	糸	10YR7.1 1.5G.7黄	10YR7.1 1.5G.7黄	10YR7.1 1.5G.7黄	10YR7.1 1.5G.7黄	10YR7.1 1.5G.7黄	10YR7.1 1.5G.7黄	少	少	12.4	3.2	6.8
389 SROI	土蜘蛛	糸	10YR8.2.5灰白	10YR8.2.5灰白	10YR8.2.5灰白	10YR8.2.5灰白	10YR8.2.5灰白	10YR8.2.5灰白	少	少	11.7	3.3	2.5
390 SROI	土蜘蛛	糸	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	少	少	13.0	7.0	1.8
392 SROI	土蜘蛛	糸	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	少	少	15.6	1.4	1.8
393 SROI	土蜘蛛	糸	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	少	少	13.0	2.7	2.5
394 SROI	土蜘蛛	糸	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	10YR7.6.6白	少	少	13.0	2.7	1.8
395 SROI	土蜘蛛	糸	10YR8.3灰白	10YR8.3灰白	10YR8.3灰白	10YR8.3灰白	10YR8.3灰白	10YR8.3灰白	少	少	15.6	1.4	1.8
396 SROI	土蜘蛛	糸	10YR7.2 1.5G.7黄	10YR7.2 1.5G.7黄	10YR7.2 1.5G.7黄	10YR7.2 1.5G.7黄	10YR7.2 1.5G.7黄	10YR7.2 1.5G.7黄	少	少	13.0	2.7	2.5
397 SROI	土蜘蛛	糸	10YR6.6白	10YR6.6白	10YR6.6白	10YR6.6白	10YR6.6白	10YR6.6白	少	少	15.6	1.4	1.8
398 SROI	土蜘蛛	糸	10YR6.6白	10YR6.6白	10YR6.6白	10YR6.6白	10YR6.6白	10YR6.6白	少	少	13.0	2.7	2.5
399 SROI	土蜘蛛	糸	2.5YR8.2灰白	2.5YR8.2灰白	2.5YR8.2灰白	2.5YR8.2灰白	2.5YR8.2灰白	2.5YR8.2灰白	少	少	13.0	2.7	2.5
400 SROI	土蜘蛛	糸	2.5YR8.2灰白	2.5YR8.2灰白	2.5YR8.2灰白	2.5YR8.2灰白	2.5YR8.2灰白	2.5YR8.2灰白	少	少	13.0	2.7	2.5
401 SROI	土蜘蛛	糸	10YR6.4 1.5G.7黄	10YR6.4 1.5G.7黄	10YR6.4 1.5G.7黄	10YR6.4 1.5G.7黄	10YR6.4 1.5G.7黄	10YR6.4 1.5G.7黄	少	少	15.6	1.4	1.8
402 SROI	黒色土壁	糸	7.5YR6.1 1.5G.7黄	7.5YR6.1 1.5G.7黄	7.5YR6.1 1.5G.7黄	7.5YR6.1 1.5G.7黄	7.5YR6.1 1.5G.7黄	7.5YR6.1 1.5G.7黄	少	少	15.6	1.4	1.8
403 SROI	黒色土壁	糸	2.5YR2.1灰	2.5YR2.1灰	2.5YR2.1灰	2.5YR2.1灰	2.5YR2.1灰	2.5YR2.1灰	少	少	13.0	2.7	2.5
404 SROI	土蜘蛛	糸	10YR5.3 1.5G.7黄	10YR5.3 1.5G.7黄	10YR5.3 1.5G.7黄	10YR5.3 1.5G.7黄	10YR5.3 1.5G.7黄	10YR5.3 1.5G.7黄	少	少	15.6	1.4	1.8
405 SROI	土蜘蛛	糸	10YR6.4 1.5G.7黄	10YR6.4 1.5G.7黄	10YR6.4 1.5G.7黄	10YR6.4 1.5G.7黄	10YR6.4 1.5G.7黄	10YR6.4 1.5G.7黄	少	少	15.6	1.4	1.8
406 SROI	土蜘蛛十箇	糸	2.5YR7.3灰	2.5YR7.3灰	2.5YR7.3灰	2.5YR7.3灰	2.5YR7.3灰	2.5YR7.3灰	少	少	13.0	2.7	2.5
407 SROI	土蜘蛛上器	上器	10YR6.4 1.5G.7黄	10YR6.4 1.5G.7黄	10YR6.4 1.5G.7黄	10YR6.4 1.5G.7黄	10YR6.4 1.5G.7黄	10YR6.4 1.5G.7黄	少	少	15.6	1.4	1.8
408 SROI	土蜘蛛上器	上器	2.5YR8.2灰白	2.5YR8.2灰白	2.5YR8.2灰白	2.5YR8.2灰白	2.5YR8.2灰白	2.5YR8.2灰白	少	少	13.0	2.7	2.5
409 SROI	絶縁帶	糸	366 索	少	少	12.5	2.6	2.8					
410 SROI	絶縁端	糸	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N6/灰	少	少	12.5	2.6	2.8
411 SROI	絶縁端	糸	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N6/灰	少	少	12.5	2.6	2.8
412 SROI	土蜘蛛十箇	小器	10YR8.3灰白	10YR8.3灰白	10YR8.3灰白	10YR8.3灰白	10YR8.3灰白	10YR8.3灰白	少	少	12.5	2.6	2.8
414 SROI	土蜘蛛十箇	小器	10YR8.3灰白	10YR8.3灰白	10YR8.3灰白	10YR8.3灰白	10YR8.3灰白	10YR8.3灰白	少	少	12.5	2.6	2.8
415 SROI	土蜘蛛十箇	小器	2.5YR7.3灰	2.5YR7.3灰	2.5YR7.3灰	2.5YR7.3灰	2.5YR7.3灰	2.5YR7.3灰	少	少	12.5	2.6	2.8
416 SROI	土蜘蛛十箇	小器	2.5YR7.2灰	2.5YR7.2灰	2.5YR7.2灰	2.5YR7.2灰	2.5YR7.2灰	2.5YR7.2灰	少	少	12.5	2.6	2.8

集音 番号	道場名	柱期	種類	外觀・基	色調	指土	法量	測定			測定中	備考
								柱上・柱 下部	柱上・柱 下部	柱上・柱 下部		
417	SRC2	十輪貫+四 十二茎	柱	JOY88.3後貫相 10YR6/3灰白	23Y8.2灰白	NS/灰	246	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	1.8	
418	SRC2	上輪貫上部 上部	柱	10YR6/3灰白 [+灰]黃相	23Y7.2灰白 [+灰]黃相	NS/灰	226	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	1.8	
419	SRC2	十輪貫上部 十一茎	柱	23Y7.2灰白 [+灰]黃相	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	NS/灰	225	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	2.8	
420	SRC2	十輪貫上部 十一茎	柱	10YR6/3灰白 [+灰]黃相	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	NS/灰	206	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	2.8	
421	SRC2	上輪貫上部 十一茎	柱	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	NS/灰	222	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	2.8	
422	SRC2	十輪貫上部 十一茎	柱	7.5YR7.4 [+灰]黃相	7.5YR7.4 [+灰]黃相	NS/灰	147	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
423	SRC2	十輪貫上部 十一茎	柱	JOY88.3後輪相 10YR6/3灰白	5YR7.4灰白	NS/灰	139	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
424	SRC2	十輪貫上部 十一茎	柱	7.5YR7.4灰白相 10YR6/3灰白	5YR7.4灰白	NS/灰	138	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
425	SRC2	上輪貫上部 十一茎	柱	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	NS/灰	118	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
426	SRC2	上輪貫上部 十一茎	柱	10YR6/3灰白 [+灰]黃相	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	NS/灰	117	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
427	SRC2	十輪貫上部 十一茎	柱	7.5YR7.4 [+灰]黃相	7.5YR7.4 [+灰]黃相	NS/灰	116	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
428	SRC2	十輪貫上部 十一茎	柱	23Y7.2灰白 [+灰]黃相	23Y7.2灰白 [+灰]黃相	NS/灰	115	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
429	SRC2	上輪貫上部 十一茎	柱	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	NS/灰	114	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
430	SRC2	上輪貫上部 十一茎	柱	10YR6/3灰白 [+灰]黃相	10YR6/3灰白 [+灰]黃相	NS/灰	113	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
431	SRC2	十輪貫上部 十一茎	柱	10YR6/3灰白 [+灰]黃相	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	NS/灰	112	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
432	SRC2	上輪貫上部 十一茎	柱	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	NS/灰	111	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
433	SRC2	十輪貫上部 十一茎	柱	10YR6/3灰白 [+灰]黃相	5YR7.4灰白	NS/灰	110	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
434	SRC2	上輪貫上部 十一茎	柱	10YR6/3灰白 [+灰]黃相	10YR6/3灰白 [+灰]黃相	NS/灰	109	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
435	SRC2	上輪貫上部 十一茎	柱	10YR6/3灰白 [+灰]黃相	10YR6/3灰白 [+灰]黃相	NS/灰	108	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
436	SRC2	上輪貫上部 十一茎	柱	10YR6/3灰白 [+灰]黃相	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	NS/灰	107	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
437	SRC2	十輪貫上部 十一茎	柱	5YR7.4灰白 [+灰]黃相	5YR7.4灰白 [+灰]黃相	NS/灰	106	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
438	SRC2	上輪貫上部 十一茎	柱	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	NS/灰	105	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
439	SRC2	上輪貫上部 十一茎	柱	10YR6/3 [+灰]黃相	10YR6/3 [+灰]黃相	NS/灰	104	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
440	SRC2	上輪貫上部 十一茎	柱	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	NS/灰	103	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
441	SRC2	上輪貫上部 十一茎	柱	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	NS/灰	102	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
442	SRC2	上輪貫上部 十一茎	柱	5YR7.4灰白 [+灰]黃相	5YR7.4灰白 [+灰]黃相	NS/灰	101	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
443	SRC2	上輪貫上部 十一茎	柱	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	23Y8.2灰白 [+灰]黃相	NS/灰	100	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
444	SRC2	通忠器	黑	NS/灰白	NS/灰白	NS/灰	260	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
445	SRC2	電音	金	7.5YR4.3 [+灰]黃相	7.5YR4.3 [+灰]黃相	NS/灰	135	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	
446	SRC2	音絃	金	5G17.1 [+灰]黃相	5G17.1 [+灰]黃相	NS/灰白	122	ナデ・指揮さえ ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	ナデ・後輪ナ デ・後輪ナデ	口輪部	3.8	

編 番 號	通 稱 名	種 類	性 質	色 調			質 土			性 質			候 作 期	備 考		
				外 出 輪	内 面 輪	白 化 度	赤 色 粒 度	角 質 度	露 母	株 粒	口 径 粗 度	露 量	肥 力	外 面 性 質	内 面 性 質	
468	SRC2	土壤質土層 小黑	黑	10YR8/1灰白	10YR8/1灰白	10YR8/1灰白	N5 5%	5%	80	1.4	5.6	0.14(4)	粘重	砂砾土	泥炭土	泥炭土
469	SRC2	青苔 黑	黑	7.5Y6/1灰 5%	7.5Y6/1灰 5%	7.5Y6/1灰 5%	N5 5%	5%	80	1.4	5.6	0.14(4)	粘重	砂砾土	砂砾土	砂砾土
470	SRC2	青苔 黑	黑	7.5Y6/1灰 5%	7.5Y6/1灰 5%	7.5Y6/1灰 5%	N5 5%	5%	80	1.4	5.6	0.14(4)	粘重	砂砾土	砂砾土	砂砾土
471	SRC2	土壤質土層 小黑	黑	10YR8/3灰黃 5%	10YR8/3灰黃 5%	10YR8/3灰黃 5%	N5 5%	5%	80	1.4	5.6	0.14(4)	粘重	砂砾土	砂砾土	砂砾土
472	SRC2	土壤質土層 小黑	黑	10YR8/3灰黃 5%	10YR8/3灰黃 5%	10YR8/3灰黃 5%	N5 5%	5%	80	1.4	5.6	0.14(4)	粘重	砂砾土	砂砾土	砂砾土
473	SRC2	土壤質土層 小黑	黑	10YR8/3灰黃 5%	10YR8/3灰黃 5%	10YR8/3灰黃 5%	N5 5%	5%	80	1.4	5.6	0.14(4)	粘重	砂砾土	砂砾土	砂砾土
474	SRC2	土壤質土層 黑	黑	7.5Y6/1灰 5%	7.5Y6/1灰 5%	7.5Y6/1灰 5%	N5 5%	5%	80	1.4	5.6	0.14(4)	粘重	砂砾土	砂砾土	砂砾土
475	SRC2	土壤質土層 小黑	黑	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	N5 5%	5%	80	1.4	5.6	0.14(4)	粘重	砂砾土	砂砾土	砂砾土
476	SRC2	土壤質土層 小黑	黑	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	N5 5%	5%	80	1.4	5.6	0.14(4)	粘重	砂砾土	砂砾土	砂砾土
477	SRC2	土壤質土層 小黑	黑	10YR8/3灰黃 5%	10YR8/3灰黃 5%	10YR8/3灰黃 5%	N5 5%	5%	80	1.4	5.6	0.14(4)	粘重	砂砾土	砂砾土	砂砾土
478	SRC2	土壤質土層 小黑	黑	7.5Y6/8灰黃 5%	7.5Y6/8灰黃 5%	7.5Y6/8灰黃 5%	N5 5%	5%	80	1.4	5.6	0.14(4)	粘重	砂砾土	砂砾土	砂砾土
479	SRC2	土壤質土層 黑	黑	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	N5 5%	5%	80	1.4	5.6	0.14(4)	粘重	砂砾土	砂砾土	砂砾土

編號	遺物名	種類	形狀	顏色	色調	質地	內面・輪	外圓・輪	角質石	墨形	多孔	口沿	器底	外圓・凸面	圓弧	內面・凹面	現存率	備考
480	包含層 縫隙窓器	匙	75/6/3 オリーブ	SY8-2灰白								扁鉗	9.7					口輪部 破片
481	包含層 土礦質土器	土瓶	25/8-2灰白 1.5cm×1.8cm	SY8-2灰白	25/8-2灰白 1.5cm×1.8cm							扁鉗	24.8					口輪部 破片
482	包含層 土礦質土器	土瓶	10Y66-3 1.5cm×1.8cm	10Y66-3 1.5cm×1.8cm	10Y66-2灰白 1.5cm×1.8cm							扁鉗	39.0					口輪部 破片
483	包含層 土礦質土器	土瓶	10Y66-2灰白 1.5cm×1.8cm	10Y66-2灰白 1.5cm×1.8cm	10Y66-2灰白 1.5cm×1.8cm							扁鉗	24.8					口輪部 破片
484	包含層 土礦質土器	土瓶	25/8-2灰白 1.5cm×1.8cm	25/8-2灰白 1.5cm×1.8cm	25/8-2灰白 1.5cm×1.8cm							扁鉗	24.8					口輪部 破片
485	包含層 茶葉罐	鉢	SY7-1灰白 1.5cm×1.8cm	SY7-1灰白 1.5cm×1.8cm	SY7-1灰白 1.5cm×1.8cm							扁鉗	24.8					口輪部 破片
486	包含層 陶臼	1号鉢	5Y4-3 1.5cm×1.8cm	5Y4-3 1.5cm×1.8cm	5Y4-3 1.5cm×1.8cm							扁鉗	24.8					口輪部 破片
487	包含層 陶臼	2号鉢	25Y5-4 1.5cm×1.8cm	25Y5-4 1.5cm×1.8cm	25Y5-4 1.5cm×1.8cm							扁鉗	24.8					口輪部 破片

第4表 津森位遺跡出土石器觀察表

遺物番号	遺物名	形態	剖面	測量		剖面	測量	剖面	測量	剖面	
				現行長(cm)	現行幅(cm)						
72	SX01	刀	刀形	2.12	1.4		0.2		0.58		
251	SX08	劍	V字形	2.17	2.22		0.9		0.63		

第5表 津森位遺跡出土瓦觀察表

遺物番号	遺物名	形態	剖面	色調	質地	柱子	内面	外圓	底面	側面	背面	前面	侧面	背面	侧面	前面	背面	侧面
80	SX02	丸瓦	36灰	N8灰白	N8灰白	圓孔	少	6.0	6.0		ナメ	布目?					粗面質地瓦	
386	SX01	半瓦	N8灰白	N8灰白	N8灰白	圓孔	少	6.0	6.0		ナメ	(布目)					瓦質地瓦	
387	SX01	半瓦	N8灰白	N8灰白	N8灰白	圓孔	少	6.0	6.0		ナメ	布目?					土胎質地瓦	
412	SX01	半瓦	SY8-3 直線形	SY8-2 直線形	SY8-2 直線形	圓孔	少	8.7	8.7		ナメ	布目					瓦質地瓦	
447	SX02	半瓦	N7灰白	N7灰白	N7灰白	圓孔	少	12.3	12.3		ナメ	布目					瓦質地瓦	
476	空筒瓦	半瓦	N8灰	N8灰	N8灰	圓孔	少				ナメ	布目					瓦質地瓦	

写 真 図 版

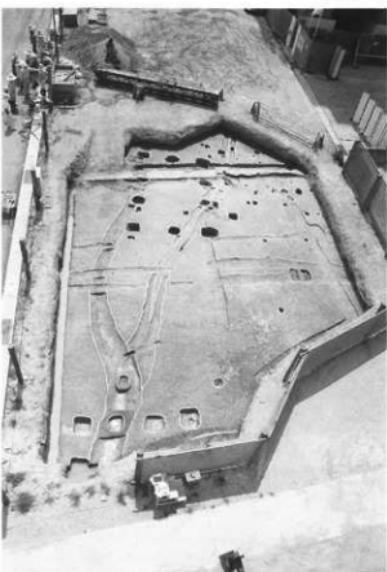


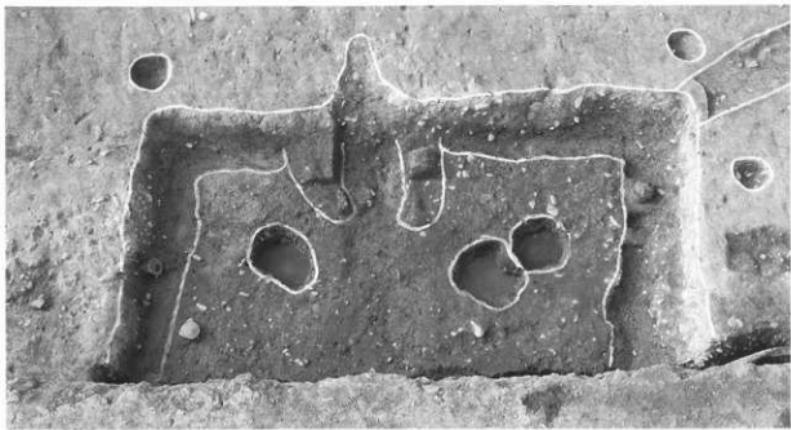
空中写真 国土地理院 1962年撮影 (SI-62-4 C9A-6 (部分))

図版 10



空中写真 米軍 1948年1月撮影 (M746 56部分 上が北)

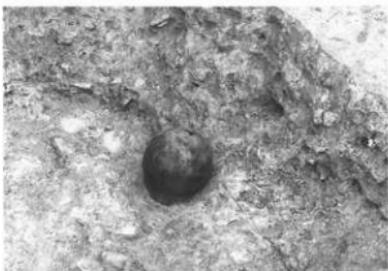




I 区 SH01 完掘状況（南から）



I 区 SH01 遺物出土状況（東から）



I 区 SH01 遺物出土状況（西南から）



I 区 SBO1 検出状況（西から）



I区 SB01 SP01 (南西から)



I区 SB02 SP17 (南から)



I区 SB04 SP269 (南から)

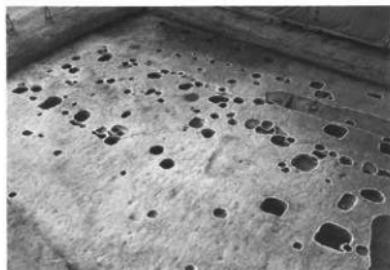


I区 SB と I区 SX03 の切り合い (南から)



I区 SB02 完掘状況 (東から)

図版 14



上 I 区 (I-③区) 完掘状況 (西から)

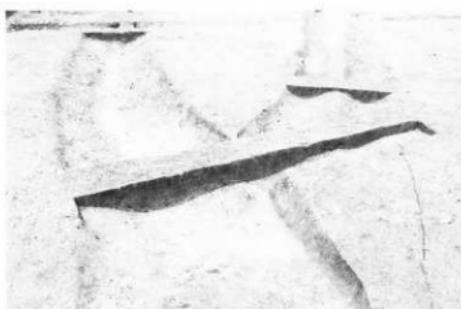


左上 I 区 SB05・06 完掘状況 (東南から)

左 I 区 SD07 等 完掘状況 (南から)

下 I 区 SB04 完掘状況 (南から)





左上 I 区 SK02 断面（北から）

上 I 区 SD08・09 挖削状況（南から）

左 I 区 SD03・04 挖削状況（東から）

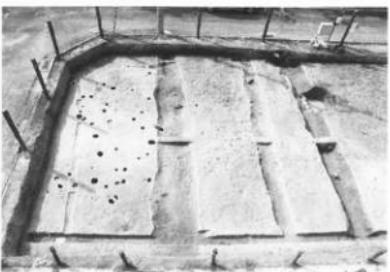
下 I 区 SX03 挖削状況（南東から）



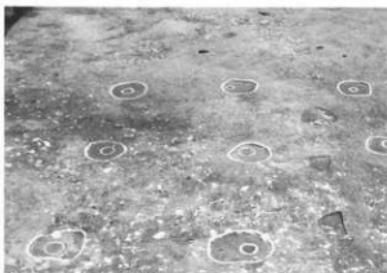
図版 16



II区(II-①区) 挖削状況(西から)



II区(II-②区) 挖削状況(南から)



II区SB01 検出状況(南から)



II区SB01 完掘状況(南から)



II区SD02 断面(北から)



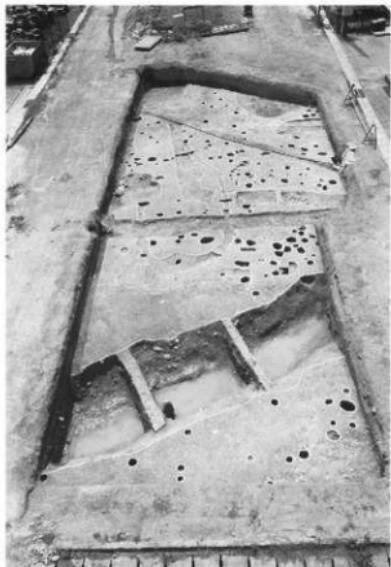
II区SD03 堤状遺構①(北から)



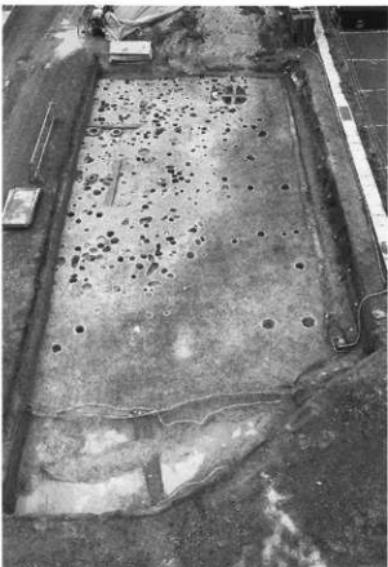
II区SD04 断面(南から)



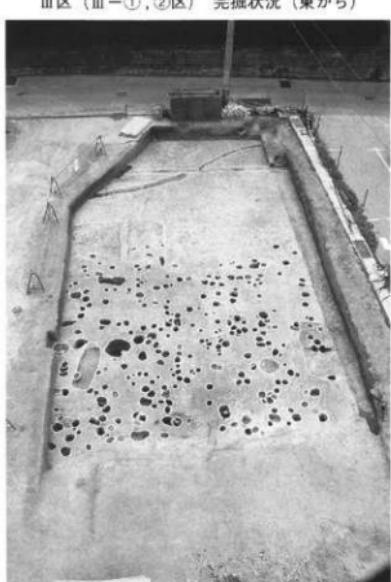
II区SD03 堤状遺構②(北から)



III区（III-①, ②区） 完掘状況（東から）



III区（III-③区） 完掘状況（東から）



III区（III-④区） 完掘状況（東から）



III区（III-⑤区） 完掘状況（東から）

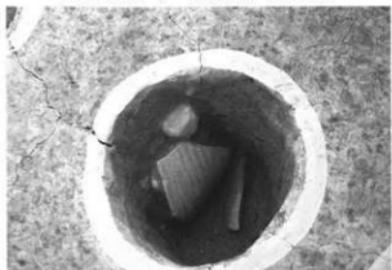
図版 18



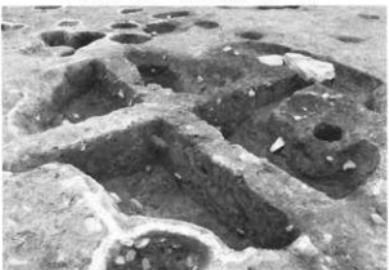
III区 SD01 等 挖削状況（北から）



III区 SP841 挖削状況（北から）



III区 SP46 遺物検出状況（北から）



III区 SK06・07 挖削状況（西北から）



III区 SK09 挖削状況（東から）



III区 SK16 断面（西から）



III区 SX08 断面（西から）



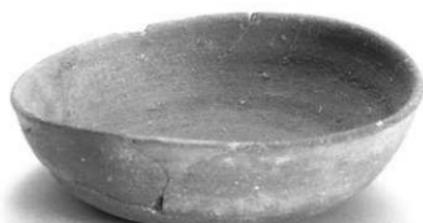
III区 SR01 挖削状況（南から）



8



22



11



25



30



12



31



40

图版 20



43



44



78



90



92



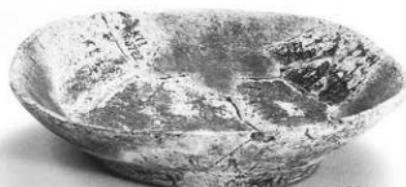
123

I 区 SX03 饭蛸壺集合





135



160



174



175



|



200



|



215

図版 22

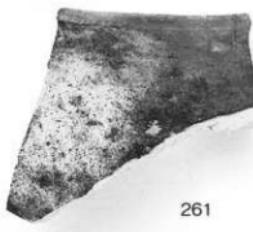


246

Ⅲ区 SP841 小皿集合



248



261



270



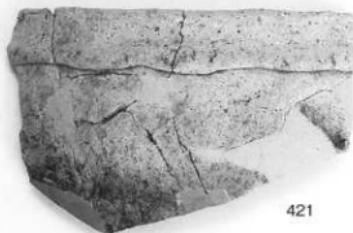
273



349



352



377



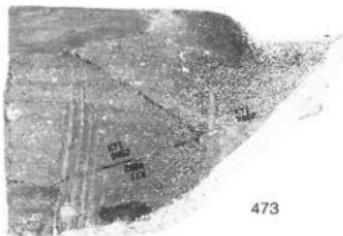
443



445



446



473

報告書抄録

県道丸亀詫間農浜線（観音寺工区）及び
県道多度津丸亀線（丸亀工区）緊急地方道路
整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

高屋条里遺跡
津森位遺跡

平成 21 年 10 月 16 日発行

編集 香川県埋蔵文化財センター

〒 762-0024 香川県坂出市府中字南谷 5001-4

Tel 0877-48-2191 Fax 0877-48-3249

発行 香川県教育委員会

印刷 (株)美巧社